



かあちゃんが逝ったのが昨日のことのような、もう何年も昔のことのような、 不思議な気持ちで毎日を過ごしています。

かあちゃんは潔くさっさと逝ってしまいました。

それが、あんたの生き方だったんだよね。

高所恐怖症のあんたが、どんなに恐い吊り橋でも、本当なら、一人でなら、絶対に渡らない橋を、仲間がいて、自分が渡らないとどうしようもないと思った時には、腹を決めて、渡れない仲間の手を引いて渡っていたよね。

泣き言や愚痴一つ言わずにね。

そんなあんたの強さをあんたの死を迎える態度でもはっきりと見せてもらったよ。

かあちゃんは強かったね。

かあちゃん、かあちゃんって言うと、「わたしはあんたのかあちゃんじゃない。」って、笑いながらよく怒ったよね。

恵子ちゃんって呼ばれるのが好きだったよね。

僕は、あんたのことを「惠子」って呼び捨てにしたことはなかったからね。

智哉君が片言を喋れるようになってからは「惠子ちゃん」が多かったけれど、 それまでは「かあちゃん」だったから、あんたは怒るかもしれないけれど「か あちゃん」って呼ぶよ。

かあちゃん□

かあちゃんと初めて会ったのは、一九六六年(昭和四十一年)の四月だった よね。

あんたは日本海の富山から、僕は太平洋の南紀白浜から、名古屋の杁中に在った日本福祉大学に入学するために出で来て、そして、同じ研究サークルに入ったんだよね。

あんたは、まん丸で可愛い子でした。

新入生歓迎コンパで東山植物園のどんぐり山の芝生広場に行った時、あんたは、とろろ昆布で巻いた丸いソフトボールのような大きさのおにぎりを持ってきてたよね。

あれにはびっくりしたし、笑っちゃったよ。

その当時に流行っていたとしたら、あんたのニックモームは、それをもじって「トトロ」になっていたかもね。

しかし、あんたのニックネームは、あんたの旧姓と、当時流行っていた漫画の 主人公のヘアースタイルが似ていることから「ワタリ」って付けられ、あんたは 気に入っていたよね。

福祉大っていうところは変わった大学で、入学して間もなく、クラスやサークルで、全員にニックネームが付けられるんだよね。

僕は、掴みどころがないっていうことから、「うなぎ」って付けられ、結婚するまで(子供が生まれるまで)は「ワタリ」、「うなぎ」って呼び合っていたよね。

偶然一緒に入った研究サークルの名は「非行少年問題研究会」(通称、非問研)で、研究対象の違いから四つのグループに分かれていた中で、これまた偶然に 二人とも「心理グループ」に入ったんだよね。

ところが、そのグループにはまともな先輩がいなくてね、殆ど出てこないので、一年生の四人だけで勉強せざるを得なくてね、僕たちは、毎日のように一緒に 勉強したんだよね。

尚且つ、ワタリは一年生であるにもかかわらず、ある先輩に、あんたの何で もノートを取る几帳面さを見込まれて、非問研の役員の一つである書記に抜擢さ れたんだよね。

会長、副会長、書記、会計の役員で、よく役員会を開き、その度に色んなこと を僕に相談するようになったよね。

そして、生協で昼食を食べる時も一緒、授業が終わった後の非問研でも夕方遅

くまで一緒という感じで、僕たちはお互いを自分の一部のように必要としていったんだよね。

僕の心が決まったのは、一年生の後期になってから、自治会選挙があった時 だよ。

一年生に入ってすぐに中国が核実験をしてね、当時の学内の先輩達は、それは アメリカ帝国主義に対する抵抗として容認していてね、僕は純粋に、それは違う と感じたから、同じクラスの有志四人と「中国の核実験に反対する」っていう アピール文を掲示板に貼ってね、知らない先輩たちから「中立君」なんて言われ ていたこともあって、そういう自分の意見を持つ態度が見込まれたのか、自治会 の執行委員に推薦されてね、僕は、迷っていたんだ。

僕は視力障害者なんだけど、外目には、目が見えないようには思えないようでね、なるべく隠していたんだけどね、やっぱり執行委員となると、ガリ版で字を書いたりしなけりゃならないし、デモなんかも誘導しなきゃならないし、恐くてね、なることを拒んでいたんだ。

その時に、あんたの意見を聞いたらね、

「うなぎが非問研からいなくなるのはいやだ。」

って言ったんだよね。

その言葉を支えにしてね、先輩たちから立候補の提出期限ぎりぎりまで説得されたけれど、僕は立候補に同意しなかったんだ。

勿論、ワタリが「いやだ。」って言ったことは黙っていたよ。

そして、二年生になる前の春休みに、僕はワタリにラブレターを出したんだ よね。

あんたの心も決まっていたんだけれど、もし、まともに返事を書いて、「冗談だよ。」って高笑いされると傷つくし、惨めだし、恐くて返事書けなかったんだよね。

だって、相手は掴みどころのない「うなぎ」だもんね。

僕が二回目のラブレターを出して、あんたは思い切って返事を書いたんだよね

「私も好きです。」 ってね。

かあちゃん□

それからは、非問研は僕が引っ張り役、ワタリはまとめ役って感じで、うなぎ とワタリは、常に二人三脚だったよね。

三年生からはゼミになって、僕は経済学のゼミ、ワタリは保育のゼミに進んだけれど、やっぱり一緒に勉強したくて、四年生の時は、非行少年の教育をテーマにした山口ゼミに入ったんだよね。

山口ゼミの中でも僕はリーダー、ワタリはまとめ役だったよね。

ゼミの夏の合宿で山口先生の故郷である伊豆大島に行った時、何かの話をきっかけに僕たちの話になり、誰かが、

「うなぎとワタリは、ツーカー

の仲というか、一心同体だよね。」

って言った時、あんたは、私たちは別々の考えを持ち、独立した対等の関係なんだってことを言いたくて、言葉を知らずに、

「一心同体じゃないよ、二心一体だよ□」

って言ったんだよね。

あんたが、汚れのない真面目な明るい子だっただけに、みんな一瞬、言葉が 出ず、そして、大笑いになったよね。

かあちゃん□

かあちゃんは優秀で、大卒は十人、短大卒は百人の採用だった名古屋市の保母 の試験に、大卒の十人の一人として一発で合格したんだよね。

僕は視力の関係で、名古屋市は受験さえさせてもらえなかったけどね。

僕は就職に失敗し、山口ゼミに残って後輩たちの面倒を見ていたんだけど、秋になって一宮の紡績会社の中の高校で臨時の先生として採用され、僕は先生として、ワタリは保母としての道を歩もうとしていたんだよね。

その時だよね、僕の病気が発見されたのは。

検査入院したり、田舎から両親が呼び出されたりして、診断が下された時には、 、さすがに僕も驚いたよ。

「進行性の血管腫の一種で、今は毛細血管が切れているだけだからいいけれど、脳や心臓の血管が切れたら命取りになるし、今のままの生活を続けていたら、四〇才くらいで死ぬからね。そして、この病気は遺伝性の病気だから、結婚はし

てはいけないし、もし結婚したとしても子供は作らないように。」 って言われ、そのことをあんたに話しても、あんたは僕と別れようともしなかっ たし、結婚することも了解してくれたよね。

かあちゃんは事業家を父に持つ三人姉妹の長女で、オヤジさんは、あんたのことを期待し、後継ぎとしての相手も決めていたんだよね。

でもあんたは僕にしたんだよね。

オヤジさんが、

「あの男のどこが良いんだ。」って聞いた時、あんたは、

「彼、優しいから。」

って答えたんだよね。

オヤジが仕事で家族と離れて暮らしていたので、子供として淋しくて、そして、一人で耐えながら子供の世話をする母親を見ていて、そんな寂しい思いをしないですむ家族が欲しかったんだよね。

同時に、視力に障害を持ち、致命的な病気の見つかったこの人は、最後までわたしが面倒をみるんだって決めてたんだよね。

かあちゃん□

僕たちは一九七一年の秋に結婚し、翌年に結子が産まれ、産休明け保育をしていた杉の子共同保育所に結子を預け、共働きを続けたよね。

そこからかあちゃんの苦労が始まったんだよね。

僕が体を壊し、同時にうつ病になり、仕事を辞めて傷病手当をもらい、その後は杉の子共同保育所やほるぷ図書月販などでアルバイトのような仕事をしていたんだけど、きちんとした仕事に就くために鍼灸師の免許を取ろうと盲学校に通い出してね。

その間、あんたはずーっと保母として働き続けて家庭を守ってくれたんだよね

泣き言も愚痴もいやみも何一つ言わずにね。

あんたは、子供から父親を取ってはいけない、父親のいない子供にしてはいけない、子供を可愛がってくれる父親であれば、稼げない人であっても構わない、わたしが面倒みるって決めたんだから…って思いで、心の中で歯を食いしばっていたんだよね。

笑顔を絶やさずにね。

毎日、夕ご飯の後、結子を連れて川の字になって、歌を歌ったり影踏みしながら歩いて銭湯に通ったよね。

僕を一言も責めないかあちゃんに僕は救われたよ。

かあちゃん□

僕はまだ盲学校で鍼灸を学んでいたけれど、心機一転とばかりに押木田の明る く少し広い家に引っ越したよね。

- 一九七七年に結子が年長さんになる時に太介が生まれ、富山の家では、子供と 孫を通して初めての男子誕生とあって、大歓迎されたよね。
- 一九七九年に僕は鍼灸師の資格を取り、中村区の今の場所で「和気」を開設し、僕はリハビリのような形で仕事を始め、それからは民商や学童の活動にも加わり、その中でも子供たちを連れて色んな所に遊びに行ったよね。

まり(犬)も飼ってね。

家族として一番充実していた時かも知れないね。

僕が見る夢の多くは、結子が小学校低学年、太介が保育園の押木田で暮らした時代のものなんだよ

かあちゃんも園長代理として頑張っていたんだけど、一九八二年に入って疲れが出て来たよね。

「とうちゃん、仕事辞めてもいい?」

ある朝、こう言ったかあちゃんに、僕は冗談だろうな一と思って、

「いいよ、辞めて。」

って答えたんだよね。

かあちゃん、凄いよね。

本当にその日に十二年間の

名古屋市の公立保母としての仕事を辞めてきたんだから。

僕の生活の基盤も出来てないのに、やっばり、かあちゃんは腹据わってたよ。

その後、かあちゃんは、ピンクの白衣着て、和気で一緒に働いたよね。

治療に来る子供たちにカンゴクちゃんて呼ばれてね。

「お灸は奥さんの方が上手だね。」

って、結構、人気あったよね。

朝から夜までずーっと一緒の楽しい日々でしたよ。

でも、かあちゃんは誘いがあって、鶴舞の勤労婦人センターの託児室の保母として働きに出ていったよね。

保育の仕事がしたかったこともあるけれど、和気だけでは食っていけなかったからね。

二人で、風の子学童保育所の父母の会、民商のゆう遊まつり、子供まつりなど 地域での活動も一杯したよね。

僕も、自分が四○才で死ぬなんてことを忘れて走り回っていたよ。

かあちゃんは心配だったろうね。

そして、一九八八年、僕が十二月に四〇才を越えた翌年の二月に突然の大きな目まいで倒れてしまったんだよね。

ついに終わったかなって思ったよね。

目で見るものと頭の中と手足の動きと言葉と、そういうものがみんなバラバラ になったみたいで、しばらくは仕事にも生活にもならず、子供たちは、

「とうちゃん、あほになったの?」

って聞く始末でね。

かあちゃんの看病のお陰で、僕は少しずつ体が戻り、仕事に復帰できてね。 その年の十月から僕は気功を習い始め、僕たちの人生も大きく変わったよね。 それまで、ちょくちょく体調を悪くして仕事を休んでいた僕が、全くといって

それまで、ちょくちょく体調を悪くして仕事を休んでいた僕が、全くといっていいほど倒れなくなってね。

一九九〇年からは、僕は気功の先生になってね。

かあちゃんも期限付きの勤労婦人センターを辞めていたんだけど、やっぱり子供が好きで、近くの城西病院の院内保育所「たんぽぽ保育所」の給食のパートのおばちゃんとして働き始めたよね。

大卒の公立保母であったこと、しかも園長代理までしていたことなどをひけらか すことなく、給食のおばちゃんに徹していたあんたには頭が下がったよ。

葬儀の後、葬儀に参列できませんでしたのでって、「たんぽぽ」の子供のお母さんだった人が家までお参りに来てくれたんだけどね、あんたがどんなに素晴らしい給食を作っていたかを話してくれてね、以前、あんたが息子に、自分はどんなに一生懸命に目の前にある仕事に取り組んでいるかを話していたのを思い出したよ。

僕は、一九九四年からは、癒しの学校、緑の風にゆられて、気功塾と、次々に 気功の仲間の集える場を作っいってね。

僕たちは夫婦であることを隠して、僕は先生として、かあちゃんは一生徒として参加したんだよね。

その方が、お互いに気楽だったし、参加される生徒さんも気を遣わなくて済んだしね。

かあちゃんがそういう立場で参加してくれたお陰で、月に一度の癒しの場を訪ねるウォーキングの会(緑の風にゆられて)は、あんたの病気が発見されたその月まで十三年間も続けることが出来たし、年に一度の熱田神宮での気功のつどいも、一九九九年から、あんたが倒れる二〇〇七年まで毎年続けることが出来たよね。

この間、二人だけの旅が多くなったよね。

もう娘は働いていたし、息子も高校生だったしね。

緑の風にゆられてや気功合宿の下見や一泊旅行で一杯出かけたよね。

京都の至る所、奈良市内、近鉄沿線、東海三県、高野山、清里…とね。

何年かしてから癒しの学校で夫婦であることを公表したんだよね。

みんな驚いていたよね、

それがいつの間にか広がっていったんだけど、みんなはあんたのことを「和気 先生の奥さん」とは呼ばなかったし、そういう感じでの接し方もせず、「浜ちゃん」として、一人の仲間として付き合ってくれたよね。

それがあんたの偉いところだよね。

引っ込んでいる訳でもなく、かと言って、しゃしゃり出る訳でもなく、愚痴も言わず、他人の悪口や噂話を一切せず、僕を助ける仕事、仲間の役に立つ仕事に徹していたよね。

あんたにとって、僕は最後まで、とうちゃんであると同時に先生だったもんね 。

あんたが倒れて、闘病している間、ずーっととうちゃんだったけれど、最後に 意識が混濁していった時には、とうちゃんが消えて、先生が残ったよね。

あんたは、この先生と一緒に何かが出来ること、このとうちゃんが喜ぶことが 嬉しかったんだよね。

陶芸も一緒に出来て嬉しかったよね。

緑の風にゆられてのあとには必ず一緒にご飯を食べに行ったけれど、

「何食べる?」

って聞いても、あんたは、いつも

「とうちゃんの食べたいものでいいよ。」

って答えたよね。

それがお寿司でも天ぷらでも、うどんでもラーメンでも、カレーでもヤムチャでも、一切首を振ることはなかったよね。

たまたまかあちゃんの誕生日の月に、

「今日はかあちゃんの好きなものにしようよ。」

って言っても、同じように

「とうちゃんの好きなものでいいよ。」

って答えたよね。

「じゃー、なか卯でうどん。」

って言うと、その時だけだよね。

「それはいやだ。」

って言ったのは。

かあちゃんは、僕に対しても自分を押し付けることもなく、常にこの人と一緒

にいること、僕が喜ぶことに喜びを見出していたんだよね。

あんたと知り合って四十二年。

僕は幸せでした。

あんたに支えられ、助けられて生きてくることが出来ました。

ありがとう。

長い間、ありがとう。

本当にありがとう。

かあちゃん□

また、会おうね。

次の世でも絶対に会おうね。

仲間として、恋人として…。



嫌な咳が続くので個人病院へ行く。 肺の下の奥に影。 CTで見ても肺の中に何かある。 日赤への紹介状が出る。 日赤呼吸器内科へ。

影の正体は腫瘍。

ガンの可能性も否定できない。

ブルーな僕です

僕のかみさんが保母の職業病である頸肩腕症候群と腰痛のために仕事を休んでいる。

勿論、僕が治療している。

僕は、これまで何人もの頸肩腕症候群の人や慢性疲労性の腰痛の人を診て来ている。

その感覚から、彼女の状態は、単なる整形外科的な状態ではない。

どうみても内科的な疾患が絡んでいる感じがして仕方がない。

そこで数回、内かにも行ったが、さほどの異常は見つからなかった。

ところが、昨日、レントゲンを撮ったら心臓と重なるあたりに影。

以前(昨年の十月)にも同じように影があって、彼女が指摘すると、心臓や呼吸の関係で白く写るという説明。

しかし、今回は医者も気になったのか、CTを撮った。

すると、肺の下の方の奥に何かがある。

紹介状を渡されて、今日、日赤の呼吸器内科に行った。

ほん数週間前も日赤に行ったのだが、予診の段階で神経内科に回されたという

神経内科?

その医者はインターンだったらしい。

今日、日赤の呼吸器内科に向かう彼女に、僕は、消化器などの内かも診てもらって来るように指示をした。

さて、彼女の中に何が在るのだろうか。

かなり気がかりな、だから、ブルーな僕なのです。

でも、今から、盲学校の授業。

生徒が待っているから、元気出して出かけよう□

やっぱり

昼休みにかみさんからメールがあた。

「今、診察がおわりました。肺にできものがあるので それを何か調べる事になりました。

ガンの可能性もあるそうです。まず、痰から調べるそうです。

痰が出なければ、来週に肺から細胞を取る検査をします。

骨の検査は今週25日にペットという検査をします。

今日は今から レントゲン 採血 尿検査です。」

という内容だった。

やっぱり□ 良性であることを祈るが…。

心境

かみさんが肩や腰が痛くなって仕事を続けられなくなり、元気がなくなり、痩せてきて、癌を疑ったが、血液検査の結果、少しコレステロールが多いけれど、 肝臓も糖尿も何もないという結果に安心していたのだけれど、急に色んなことが 起こって戸惑っています。

僕は治療師だし、気功の先生だし、出来る限りのことはするつもりです。 僕の出番です。

ペット検査について

明日のペット検査の六時間前から何も食べられないとか。夜中の三時以降は食べられないから、かわいそう。

ペット検査は保険が効いて、二万数千円とか。

物凄く高い検査なんだね。

ペット検査です

今日は九時半から日赤です。

ブドウ糖注射をして、約一時間してからペット検査。(約二十分)

その後また、約三十分休んでから帰ることになります。

検査が終わるまで何も食べれないし、だから、食後の痛み止めの薬も飲めない ので辛そうです。

<u>PET検査 無事終了</u>

十一時半に検査は終わりました。

痛み止めが飲めたので楽だったとか。

彼女の判断

彼女は、自分のことを癌だと思っているようだ。

僕も、半分以上は癌だろうなーと感じている。

問題は、局部的なのか、転移して広がっているのか、手術が可能なのか不可能 なのかだ。

<u>顔を上げて</u>

人間の体も自然界の一部。

自然の法則に随っている。

元気な時は顔が上がり、元気のない時はうなだれる。

しかし、人間には意思がある。

元気のない時に、少し顔を上げてみよう。

少しずつ元気が出てくるものだ。

<u>ゆっくり息を吐く</u>

色んな思いで胸が詰まった感じのする時は、口の奥から一○秒、一五秒とゆっくり息を追い出してみよう。

息に、イヤな思いを乗せるつもりで、息と一緒に追い出そう。

樋田医院へ

朝の八時半前には樋田医院に着いた。

今朝も歩くのは辛そうで、階段は一歩一歩降りた。

タクシーや電車の乗り継ぎはスムースに行ったので、予定通りに着けて良かった。

三人の方が待合室に座っていた。

八時四十五分には診察室へ。

診察は一人の方が良いらしいので僕は待合室に戻った。

九時二十分、一応診察が終わった。

樋田先生の治療は、感情の乱れを調えることで体の中心力、自己免疫力を高めるという治療だ。

医療という形をとったカウンセリングのような治療だ。

今から鍼とお灸の時間だ。

治療は一時間ほどで終了した。

不思議なお医者さん

今日、かみさんを連れて行った樋田先生の治療は、普通の西洋医学的な治療とは全く違う。

病名を聞かない、病名を探さない、病名を見つけようとはしない。

心と体は一体のものであるとして、見える肉体の状態に変調が起こるのは、見えない心の状態に変調が起こっているからで、その心の状態がどういう風に変調を起こしているのかを、Oーリングテストを使って、体に聞いていくのだ。

そして、得られた情報を患者に話すことによって、患者自身の頭の中で心の整理がついて行く。

すると、自己治癒力が上がっていく。

患者の自己治癒力が上がったところで、それを補うため、維持するために、掌 や手の甲に鍼をする。(刺しっ放しで約20分。

更に、そこにお灸をする。

治療はそれで終わる。

看板は耳鼻咽喉科なのに、それは、月水金だけ、あとの火木土は、今のような 治療の特別外来。

お医者さんなのに、診るのは掌だけ。

治療は鍼灸。

薬は出ないし、保険も利かない。

病名も言わない。

こんな、カウンセリングのような、心理療法的な治療だったけれど、かみさん は満足していたようだった。

痛みが強くなる

痛みが段々強くなっていく。

痛み止めが効かなくなっている。

左の肩から背中、腕が、何もしなくても中から痛のみが襲ってくる。

仙骨から大腿部にかけても同じだ。

触っても痛い。

顔をゆがめて耐えながら生きているのは辛いだろうなー。

顔を見てると

__痩せこけていく彼女の顔を見ていると、ガンセンターに入院していたAさんや、 全身にガンが広がった最後の頃の辛そうだったYさんの顔と重なってくる。

こんなことを思ってはいけないのだけれど…。

辛い。

僕は笑って

彼女が辛い顔をし、しんどそうにしている時に、僕が悲しそうな顔をしていては駄目だ。

子供みたいに、心配そうな泣き顔になってどうする。

僕が笑って、彼女を安心させないと。

僕は治療師だ

僕は鍼灸師だ。

気功の先生だ。

自分のかみさんの病気一つ治せなくてどうする。

和気先生の真価が問われているのだ。

普通の看病人ではないのだ。

治療に全力を傾けよ□

胸のつかえ

胸がつかえてくる。

ふ一っと息を吐き出す。

それでも胸のつかえは取れてこない。

毎朝、玄関まで出て

「いってらっしゃい。」

と見送ってくれた彼女が、歩くことが困難になって、玄関から出られなくなった

部屋の中で

「いってらっしゃい。」

と言った後、彼女は部屋のカーテンをあけ、窓越しに顔を見せる。

僕は、その窓の向こうの彼女の笑顔に向かって、手を振って自転車にまたがる

すぐに胸がつかえてくる。

辛い。

彼女は、風邪で休んでいるのではない。

若しかしたら、このまま外に出られないかも知れないのだ。

こんなことで、僕は仕事になるだろうか。

一緒に昼食

和気の治療を早めに切り上げて自宅に帰る。

少し治療をして、簡単な昼飯を一緒に食う。

和気風オムレツと、昨日、近江八幡で買ってきた赤こんにゃくの味噌煮(おでん?)。

そして、今から午後の熱田の気功教室へ。

ドデーン!

今朝の七時過ぎだった。

僕は布団の中で毎朝しているエアーチャージ(酸素)をしていた。

かみさんは、体の痛みで長く寝ていられないこともあって、そして、今まで通りの生活を続けたいという思いもあって、毎朝、動き辛い体を押して僕の朝食の 準備をしてくれていた。

と、奥の台所から、バターンという激しい音が響いてきた。

僕の脳裏に、椅子に手をかけて、それを支えにして立っているかみさんが倒れた映像が浮かんだ。

エアーチャージの器具を鼻から外して、台所に飛んでいった。

かみさんは、にこにこ笑いながら立っていた。

「ごめんね、びっくりした?」

Γ?ι

「結ちゃんからもらったメロン、落としちゃった。」

フー。

僕は、また、布団に戻った。

<u>久しぶりに</u>

昨夜の寝る前は足が痛い、痛いと言って、横になっておれず、足を撫でたりお 灸をしたりしたのだが、痛み止めが効いてきたのか、何とか眠りにつき、今朝は 、元気そうな顔をしていた。

いつになく眠れたようだった。

今日は玄関のドアのところまで降りて来て、見送ってくれた。

久しぶりだった。

明るい声

「どう?」

和気の治療を終えて、午後の盲学校に出掛ける前に、ラブコール。

「元気だよ。」

確かに明るそうな声だった。

眠る、眠れるというのは大切なことなんだ。

検査の結果

今日の四時から、日赤の内科で、ペットや諸々の検査の結果の発表があります

かみさんと一緒に聞きに行くことにしています。 さて…。

さて、どうする

今から日赤にペットの検査結果を聞きに行ってきます。

僕は、検査結果には関心はありますが、その結果かわかることで、僕の治療の 方針や方法が決められるから、そういう意味で聞きに行くのです。

こうであるというのではなく、こうだからこうするんだという具合に、常に能動的に把らえているのです。

高校の時に、

「であることとすること」

というタイトルの論文を国語の教科書で読んで、それが正しい生き方だと学んだ のです。

報告

医者というのは病名がつかないと治療は出来ないそうだ。

その病名を確定するまでの結果は得られてはいないと言う。

しかし、心臓の裏辺りと首の骨、骨盤の骨にガンらしいものがある。

医師は、ほぼ間違いないと言う。

しかし、組織を取ってみなければ確定はしないらしい。

それを今週の木曜日に予定しているが、明日、リンパ節からリンパ液を少し抜いて調べて結果が出れば木曜日の検査は無しになる。

いずれにせよ、来週から一月ほどは入院になるようだ。

しばらくはモルヒネの痛み止めで対処していく。

闘いの始まりだ。

声が出ない

僕は、かみさんの痛む姿、辛そうな姿、死を覚悟したような姿を見続け、それ を励まし、支え続けられるだろうか。

そんな自信は全くない。

ファイト□の声が出せない。

僕と代っていたらと、心から思う。

かみさんからのメール

今日のリンパの検査で癌であることがはっきりしたので、明日の肺の検査はなくなりました。

入院予約しました。

<u>僕からのメール</u>

毎日、一緒に少しでも気功しようね。

絶対に治すから、治ろうと思ってね。

諦めては駄目だよ。

<u>見送るわけにはいかない</u>

僕は職業柄、何人もの人の死を見届けてきた。

老衰に近い人もいれば、心臓病、脳出血などの人もいた。

過労や事故の人もいた。

勿論、ガンの人もいた。

特に、気功の集いなどを一緒にしていた仲間をガンで亡くした時は、かなりのショックだったが、冷静に対処し、自分なりに乗り越えることが出来た。

しかし、今度ばかりは平静ではいられない。

父や母を病気で亡くした時とは雲泥の差だ。

僕は、これまで、かみさんに甘え切っていた。

大抵のことは許してくれたので、仕事も様々な計画も自由にしてきた。

かみさんは理解し支持し、僕の手足として愚痴一つ言わずに働いてくれた。

かみさんは気功の仲間の中ではいなくてはならない存在だった。

しかし、かみさんを人生のパートナーとして扱ってきただろうか。

地蔵画の「癒しの言葉」の中で「わたしはここにいます」

というのを書いたが、まさに、彼女は「わたしはここにいます」という主張を命 を張って行なったように思うのだ。

僕は、そう思っている。

わたしは ここにいます

わたしは ここにいます ちょっと隠れて 見えないかも 知れないけれど わたしは ここにいます

わたしの声は 小さすぎて 聞こえないかも 知れないけれど わたしは ここにいます

わたしは ここにいますから 少ししか見えなくても 声が聞きづらくても わたしの 存在を 認めて下さい

わたしを 見て下さい わたしの声を 聞いて下さい

それだけでいいのです

わたしは ここにいます

わかりますよね わたしの わたしの 観音様

大学の一年生の時から相思相愛で、卒業後に結婚し、しかも、僕が四十歳くらいで死ぬという医師の宣言があったにもかかわらず、僕と結婚し、僕の目となり手足となって働いてくれた。

勿論、彼女は保育者としての仕事が好きで、ガンに倒れるその時まで、保育の 仕事に関わり続けてきた。 かみさんがそこにいることが前提で僕の仕事は成り立ってきたのたと思っている。

しかし、彼女は、その立場を捨てようとしている。

今度ばかりは、宗教者のように、全ての命は滅んでゆくものだなどという理性的な態度ではいられない。

見送ることは出来ないのだ。

絶対に出来ないのだ。

かみさんを連れて、京都にも奈良にも行きたいのだ。

仲間たちと一緒に出かけたいのだ。

僕の命は四十歳で終わるはずだったから、かみさんの命のためには使い切って もいい。

替わってやってもいい。

とにかく六十歳の還暦は一緒に迎えたいのだ。

そのためのパーティーもしたいのだ。

どうか、かみさんの命だけは取らないでくれ。

また、取らないでくれ。

二度とへまはしない

松山千春の「恋」の一節に

今度生まれて

来るとしたなら

やっばり 女で

生まれてみたい

だけど 二度と

へまはしない

あなたになんか

つまづかないわ

というのがある。

彼女は、この歌詞を心の底から実感しているようだった。

和気という男になんかに 二度とつまづかずに、別の、わたしだけを見て、わたしだけを愛してくれる男を選ぶわと思っている。

尊敬する人と夫(恋人)とは別なのだ。

そんなことはわかっている。

次の世でも一緒になってくれなんて言わないし、なってもらえるとも思ってはいない。

でも、今の世では、君は僕を選んだのだ。

よく、和気さんは奥さんの掌の上の孫悟空みたいなものだねと言われる。

その通りだ。

でも、まだ、僕を支える仕事、任務は終わってはいないぞ。 途中で投げ出すんじゃない。 僕とのこの世をまっとうしろ。

医者の話

昨日の検査の結果、病名は肺ガンと決まった。

肺ガンの中の腺ガンだ。

しかも、リンパと頚椎、腸骨(骨盤)にも転移し、手術の出来ないステージ四 、即ち末期だ。

あと半年ほどの生存率は五割。

肺ガンに対しては、抗がん剤治療。(効く可能性は二割)

リンパと骨に対しては放射線を当てる。

大体こんなものだった。

二割の確率と五割の生命力に賭けることになる。

娘は泣いていた。

かみさんは腹を決めている。

僕は、実感が持てずにいる。

治療に専念する以外にはない。

ガンを追い出すという強い気持ちを持つように伝えた。

首輪

昼過ぎに電話があった。

「診察、終わったから、お昼ご飯を食べに行こう。」

という電話だ。

娘の車で鍼灸院まで迎えに来てもらった。

車が着く。

ドアを開けて乗り込む。

「ご苦労さん。遅かったね。」

「レントゲンはすぐに終わったんだけど、診察に一時間以上待ったから。」 で、彼女を見ると首に輪ッカが。

勿論、それを作りに行ったのだけれど、見ると笑える。

「首の骨はそんなに悪くないけど、まぁ、作りますか。だって。

最初、はめられた時、う〜んってなってね、先生、わたし、首、ないので、もっと小さくして下さいって言って、合わせて作ってもらったんだよ。」 何か、似合ってる。

「犬みたいに、鎖つけてやって。」

と、娘。

確かに…。

月の輪熊?

夜ご飯の時、かみさんの首輪がおかしかった。

「襟巻きトカゲ?」

Γ... ι

「月の輪熊?」

「違うわ□」

「えっ? じゃー、トカゲの方がいいの?」

「やだ□」

「じゃー、なにがいいの。」 かみさん、招き猫みたいに片手を上げて 「そんなこと言うと、ワンって言うよ。」 やっぱり娘の言う通り、首輪に鎖つけなきゃ。



追い出せ!

彼女の心の中に、どうせ駄目だろうな一という気持ちがある。

「少しでもそんな気持ちがあると、奴はどんどん付け込んでくるのだからね、絶対に追い出すのだ、治るんだという強い気持ちを持ち続けないと駄目だよ。」と言っておいた。

「金曜の夜の気功教室、止めようかと思ってる」 と言うと、

「何いってんの、二万二千円も入るんだよ。甘えちゃ駄目。ガンバ□」 だって。

あの子は強い子だ。

決まりました

かみさんの入院の日が決まりました。

六月五日(火)の朝十時に来て下さいという連絡が日赤病院からありました。 いよいよ闘病生活の始まりです。(勿論、闘いは既に始まってはいるの だが…。)

矢合観音の水

久しぶりに、Tたまちゃん家に行った。

Mさんも一緒だ。

一種に昼飯を食った。 (カップラーメンとおにぎり) 今のかみさんの状況を話した。 日曜日に、U君の運転で矢合観音(やわせかんのん)に行くことになっているので、その待ち合わせの話もした。

Tたまちゃんの話によると、そこのお水が、病気治療に良いらしいのだ。 また、楽しい小旅行?が出来るかな?

黄色いお花

買物に行くよと言ったら、

「何か黄色いお花買って来て。」

と言う。

「玄関に?」

「ううん、植えるの。」

「何で黄色?」

「しあわせの黄色。」

「じゃー、ハンカチ吊してあげようか?」

「わたし、監獄に入る訳じゃないよ。」

「まぁ、同じようなものしゃない?」

「違うわ、失礼な。」

という訳で《リニアリス》という黄色い花を買ってきました。

お手植え式

黄色い花を三鉢買って来た。

「何処に植える?」

「わたしが植えるわ。」

「えっ□(玄関から外に出るんだ□)」

起き出して来た彼女、玄関で靴を履き、直ぐ前の花壇へ。

シャベルで土を掘り出したが、力が入らない。

「僕が掘るよ。」

指示された三箇所に小さな穴を掘る。

そこへ、かみさんがポイポイと花を置く。

僕は土をかぶせ、整える。

「はい、お手植え式は終わり。あとは水をまいて、よきに計らえ、お付きの者。」

「はいはい。」

水をまく僕を、かみさんは玄関に坐って見ていた。

嬉しそうだった。

心地よい風

玄関からは心地よい風が流れ込んでいた。

かみさんは玄関先に腰を降ろして、気持ち良さそうに外を見ていた。

お手植え式を終えた僕は、

「水、買って来るね。」

と言った。

「野菜ジュースとヤクルトもお願い。」

「あいよ。玄関どうする?」

「開けておいて。」

僕は自転車で近くのスーパーに行って、安売りの水を一ケースとジュースなど を買って来た。

帰って来ると、かみさんは、まだ玄関を開けっ放しで風を受けていた。

「僕の帰りを待っていたの?」

かみさんは笑っていた。

静かな土曜の昼下がりだった。

涙

今朝、痛み止めの薬が切れる一番痛む時間帯に、彼女は痛みに顔をゆがめて耐 えていたが、ついに耐え切れなくなった。

声を出して泣き出した。

「お昼、終わったらすぐに帰って来て。」

彼女がこんな風に言うのは始めてだった。

その彼女を置いて、僕は朝の気功教室に出掛けざるを得なかった。

ガンバ□

有り難かった□

今日、TちゃんとMさん、U君の三人が、矢合(やわせ)の観音さんに、病気 平癒の祈祷をしたお水をもらいに行ってくれた。

僕も行く予定だったのだが、かみさんの具合が悪かったので、三人に依頼したのだ。

戴いたお水を使って魚を煮、ご飯を炊き、薬を飲んだ。

三人の思いが身に染みた。

有り難かった。

ブリ大根

うちのかみさんは北陸育ちのためかブリが好きだ。

今夜は魚にしようと思って魚売場を見ていたらブリがあった。

その前に、消化を助けるのに良いので大根を買っていた。

そうだ、ブリ大根にしよう。

しかし、煮魚なんて作ったこともない。

醤油とミリンだけの出しで煮た。

魚の臭みを取るために梅干しを入れ、少し元気を付けるためにニンニクをすって入れた。

「お酒入れた?」

出来た後、かみさんが尋ねたが、酒は入れていない。(知らなかったよー。) でも、口にしたかみさん、

「美味しい。」

やったね!

娘がいてくれる

いよいよ明日から入院だ。

昼飯を作りに帰ると、入院の準備のために娘が来ていた。

かみさんの声が明るく感じた。

買って来たうどんを、娘に作ってもらって、三人で戴いた。

和気から採って来たビワの葉を洗って、かみさんに渡した。

かみさんは痛い患部に当てていた。

僕はまた、午後の気功教室に出掛ける。

娘がいると安心だ。

楊先生

今日、U君の車で、瑞穂区に在る楊先生宅を訪れた。

先生の住所が変わられた時に電話番号も変わっていたのだが、それを知らずに 電話をしたら、

「ただいま使われておりません。」

の案内。

やむを得ず、戴いた年賀状の住所を手がかりに訪ねて行ったという訳だ。

楊先生は漢方薬の先生。

体丸ごとを診て、免疫力を高める処方をして下さる。

先生本人がいないのはわかっていたので、奥さんに会って、電話番号を交換して来たという訳だ。

ビワの葉を戴いた

今日、Mさんからビワの葉を沢山いただいた。

昨日、例の三人で採ったものだそうだ。

仲間はありがたいなー!

貝と茸の雑炊

夕べのご飯が残っていた。

「炒飯にする? 雑炊がいい?」

「そうだねー、…、雑炊かな?」

「あいよ。」

気楽に買物に出たまでは良かったが、雑炊っていうことは、先に鍋だよなー?

お粥じゃないんだよなー?

で、頭の中で何鍋にするか考えた。

ヨシ、貝と茸の鍋にしよう。

何と、昆布を敷いた中にコンソメの素を入れ、まず大根と人参を入れ、更に 、あさりとホタテ、なめことえのきを入れる。

約三十分ほどコトコト。

それをペロリとたいらげ、最後に雑炊にし、卵をとき、ノリをかけていただきました。

入院一日目の朝

今日から入院生活に入ります。

精神的にも肉体的にも辛い辛いかみさんを、仲間の支えを受けながら、励まし 支え続けようと心に決めました。

ガンバロ

病棟

入院手続きをし、案内のボランティアの人に連れられて行った先は、新館の六階だった。

四人部屋の窓側の明るいベッドだった。

かみさんがラフな服装に着替えると、館内の案内をするということで、今日の 担当看護師さんが顔を見せた。

風呂場、トイレ、面談室、洗濯機や電子レンジなどのある所など…。

テレビも冷蔵庫も全てカードだ。

お風呂は毎日入れるとか。

面会は、一応七時までだが、家族は消灯の九時まではいいようだ。

朝は、七時くらいからならオッケーとのこと。

ガン病棟だから割と自由なようだ。

お灸をしたいと言うと、

「火は使っていけないので、お灸は駄目だと思います。」

と看護師さんに言われた。

そこで考えた。

股関節が痛くて歩くのが困難なので、車椅子を借り、

「お散歩行って来マース□」

と、エレベーターで一階へ。

そして玄関の外へ。

人の出入りする扉の横に停車して、そこでワンタッチ灸を始め出した。

「有名になって、お灸して欲しい人が並び出したらどうする?」

と、僕。

「整理券出すからいいよ。」

夕食前の楽しみが、初日から出来た。 これが僕たちの生き方だ。 さぁ、楽しむぞ□

おかげさま

僕が気功を始め、その縁で、てのひら療法の樋田先生に出会い、ビワの葉療法の恒川先生に出会い、漢方薬の楊先生に出会い、いま、その先生方のおかげで、不安におののくことなく、自分で出来る治療に取り組めています。

有り難いことです。

それにイメージ療法を加えて、僕たちは闘いにいどんでいるのです。 仲間のみなさんのパワーを戴きながら…。

入院二日目

タベも痛かったが、とん服を二つ飲んで、少しは眠れたのか、朝は割と元気そうだった。

いよいよ今日から放射線治療が始まる。

体力を維持することを目標に出来ることをしなければ…。

否定の否定

胸が締め付けられてくる。

目の前が霞んでくる。

足が地に着かない。

何処を歩いているかわからなくなる。

彼女の死が頭をよぎる。

「何、考えてるんだ□」

と頭を振る。

フーと息を吐き出す。

僕が弱気になってどうする□

否定的なことを思ってどうする。

さぁ、元気で明るい顔を彼女に見せに行かなきゃ□

腹決めて、治療に取り組むぞ!

肺ガンが、首のリンパ節、頚椎、骨盤に転移しているのは聞いていた。

更に脳にも転移しているらしいと主治医が言った。

五mm. 程度の症状を出さないようなものが十個ほどあるらしい。

二週間は骨と脳への放射線治療、その後に坑ガン剤治療と、入院は一月程度になる。

あとは、外来での月に二回の坑ガン剤治療になるとのことだ。

ただ、半年以内で亡くなる確率は五割程度らしい。

医者が一番恐れていたのは、頚椎の骨折だ。

全身不随にもなりかねないとか。

家族四人の前で、医師の説明があった。

<u>鈴の音</u>

いつかどこかで見た風景だ。

家と和気の扉のキーに付けている鈴が、ポッケの中でシャンシャンと響く。

シャンシャン鳴る音が病棟の廊下を歩いて行く。

懐かしい光景だ。

友人のお父さんが心臓発作で倒れ、奇跡的に助かったものの植物状態になり、 その方のリハビリやマッサージのために、十五ヶ月間、週に二回か三回、病室を 訪れたのだが、その時に、いつもシャンシャンと鈴を鳴らして廊下を歩いていた 今日もシャンシャン鳴らしてかみさんの病室に歩いて行く。 これから一ヶ月、シャンシャン鳴る音で、 「あっ、〇〇号室の和氣さんの旦那さんが来たよ。」 と、看護師さんに知らせることになる。 まるで猫だね。

ビワの種

ビワの種には、ビワの葉の1000倍以上のビタミンB17(アミグダリン)が含まれ、これには、

- ・血液の浄化
- 抗ガン
- 鎮痛
- ・殺菌

などの作用があると言われています。

そのビワの種を粉末にしたものがあるので、それを買ってきました。

ビワの葉の直接貼付とビワの種の飲用は、血液をさらさらにし、様々な病気の 予防、治療に効果があるようです。

友人

今日、Mさんがビワの葉を沢山持って病院に来て下さった。

日中と夜の二回、五箇所くらいにビワの葉を貼るので、すぐに無くなってしまい、今日の夜の分から無いところだったので、有り難かった。

Mさんには区役所まで着いて行ってもらって、高額療養費などの手続きもしてもらった。(僕が視力の関係で字が書けないので、代筆してもらったのだ。) これからも、色々助けてもらわなければならない。

かみさんの友人がいてくれて良かった□

ピース!

モルヒネの副作用に便秘があるらしい。

看護師さんが聞きに来たので、昨日出たのに、今日は出ていないと言うと、薬 を出しましょうかと言う。

彼女は断った。

医師や看護師は、早め早めの対処がいいからと言うが、何でも薬はいやだ。 夕食後、トイレに行った彼女、戻ってくるなり、

「ピース□」

普段でも便秘気味なのだから、ちょっと出ないくらいで、下剤を飲まさないでね

腸が動かなくなるからね。

モーニング

病院の一階に焼きたてパンの店があり、喫茶店になっていて、モーニングもあるというので、今朝は、そこで朝食です。

パンとコーヒーとサラダとゆでたまごです。

朝は、ここで食べられる。

しあわせかな?

朝の気功教室に行く前に病院に寄る。

起きてはいたが、痛みと悪心があると言う。

薬を飲んで横になる。

鍼灸治療と軽いマッサージをする。

旦那が治療師だなんてことは滅多にないことだ。

そういう点では彼女はしあわせなのかも知れないね。

吐き気

放射線治療が始まったら、やはり副作用としての吐き気が出て来た。

朝も昼も食べれなかったようだ。

吐き気を楽にする治療をした。

夕ご飯は食べられるようにしないとね。

「専属の治療師を抱えているからいいよ。」

仕事前に顔を見せた息子に向かってかみさんが話していた。

お見舞い

_____ 彦根にいる僕の姉が病院に来てくれた。

今日は調子が最悪だったので、余計に心配をかけたかな?

久しぶりに姉弟で、焼きたてパンの喫茶店でお昼を食べた。

今日は娘も息子も顔を出したので、彼女は寝ているだけだったけど、疲れたかな?

医者の説得

__今日、嘔吐を少しして、それを防止するための点滴をした。

それで、夕食後も点滴をするという。

針を刺したり抜いたりするのは大変だから、針を入れっ放しにしようという話があった。

そんなことをするのは嫌いな彼女だったし、今日はいやだと言ったのだけど、 主治医が説得に来て、彼女は諦めた。

手に点滴の針を刺したまま寝かされるイメージを持ったのだろう。

病人らしくなっていくのがいやだったんだろうな。

でも、吐き気を抑えて、きちんと食べられれは、その方が体のためには良いのだと僕は思っている。

やっぱりなぁー

今朝、病室に顔を見せたら、吐き気止めの点滴を受けていた。

食事の前にするのだとか。

「下剤も入れられたよ。モルヒネの副作用として便秘があって、痛みを抑えるためにモルヒネの量を多くしたから、便秘になるだろうから、そのためだって。」 彼女がこの前、下剤を拒否したものだから、点滴の中に入れられてしまったのかなと思うが、何だかなぁー。

入院五日目

痛み止めと吐き気止めが効いているのか、今日は朝から笑顔だ。

朝食後、少し休んでからお灸をしに外へ。

戻ると、娘夫婦が見舞に来てくれた。

しばらくするとシャワーの時間。

義理の息子に押されて車椅子でシャワールームへ。

娘に洗髪してもらったとか。

嬉しそうだった。

そのあと少しお休み。

昼ご飯の後、何をするのかな?

「何もないと寝ちゃうから駄目だね。何かするとこ考えておくわ。」 と言ってはいたが、さて…。

僕ならお地蔵さんの絵を描くんだけどね。

下剤

__便秘になってもいないし、便も出ているのに下剤を入れたものだから、少しお腹が痛くなり、ゆるくなった感じたという。

ということで、夜の下剤は断った。

ビワの葉は冷たくて気持ちがいいし、痛みも和らぎ、熱(炎症)も取ってくれるらしい。

喜んでせっせと貼っている。

感心すること

「〇〇さーん、お早うございます。今日担当させていただきます山田です。よろしくお願いしまーす。」

「〇〇さーん、こんばんは一。今から明日の朝まで担当します木村です。よろ しくお願いしまーす。」

担当が替わる度に、毎日毎日、看護師さんたちが挨拶に来る。

患者全員に対してそうしているのだ。

これは凄いと感心した。

みんな優しくていい看護師さんばかりだ。

バージンロード

かみさんは四人部屋の窓側に寝ている。

トイレは廊下側の入口にある。

だから、トイレに行く時は痛い足を引きずって少し歩かなければならない。

一人でも行けるのだが、少し支えがあると安心するらしい。

僕がいる時は手をつないで行く。

「バージンロードみたいだね。」

彼女が言った。

僕は少し照れ臭かったので、ふざけて言った。

「バージーロードでしょ。」

「ガクッ!バージンロードとバージーロードではエライ違いだね。」 彼女の気持ちを素直に受け止めれば良かったかなー。(反省)

治療方針

ガンに対して放射線と抗がん剤で対応し、痛みはモルヒネで抑え、それに伴う 副作用は点滴で対処する。

ガンは今のままで、これ以上大きくならないようにする。

ガンと上手く共生していけるように。

これが医者の方針だ。

僕たちは、鍼灸、気功、腹式呼吸、イメージ療法、ビワの葉療法、これらを駆使して乗り越えていく。

仲間のパワーを借りながら。

動かねば

今日、かみさんの姉妹二人が北陸からお見舞いに来てくれた。

母の日に、かみさんが向こうに行ったばかりで、一月後に、こんな形で会うなんて誰が想像しただろうか。

僕は、何としても、かみさんの命を助けたい。

これまでかけて来たわがままへの恩返しをこんな形でしたくはないが、いましなければ、する時がない。

動かなければならない時は動かねばならないのだ。

命を懸けて動かねばならないのだ。

さあ、今週は

放射線治療は十回行われる。

先週の水木金と三回し、土日は休みだったので、体力は回復したが、今週は今日から五日間連続だ。

さぁ、体力維持、免疫力アップのために、僕の出来ることはしなくっちゃ。 ガンバ□

今日はラクそう

朝、八時頃に病室で鍼灸治療をする。

朝の仕事をしてきた後、昼にかけてマッサージと経穴に磁気を貼る。

午前中に放射線は終わったとか。

昼からはシャワーだけ。

少し開く窓を開けていると、心地良い風が流れこんでくる。

僕は仕事に出掛ける。

また夕方、鍼灸治療、掌療法だ。

脳検査

脳にも転移しているた言われたが、放射線の先生が、脳梗塞の痕かも知れない ということで、脳には放射線を当てていない。

で、明日、造影剤を入れて検査をする。

脳への転移でなければ良いが…。

二人

__ 二人でいる時の彼女は嬉しそうだし、

タオルとって。

お茶のみたい。

ジュース飲もうかな。

ビワの葉取って。

これして、あれして…。

と、様々なわがまま(でもないかな?)を冗談っぽく言う。

僕は言われるままに彼女の世話をする。

僕の姉が彼女に言った。

「これまでずっと面倒みてきたんだから、何でも言って、面倒みてもらいなよ。」

彼女はそれを喜んで実行している。

空気(気)が穏やかに流れる。

それが、今の彼女の免疫力をあげる力になると感じている。

今は、時間があれば、全て彼女のために使いたい。

副作用

朝食の前に吐き気止めの点滴をする。

九時に飲む痛み止めも併せて、どちらにも、頭のふらつき等の副作用があるら しい。

目を閉じていたり、ベッドに横になっていると、ベッドがフワフワ動いているような感じがすると言う。

少し吐き気もあったのだが、気功で洗い流しをしていたらラクになってきたと 言う。

彼女は一人、自分で出来る治療に取り組んでいる。

「とうちゃんのために元気になる酥□ 気合だ□ってやってるんだよ。」 と、笑って言った。

甘くて飲み易い?

とん服(その場の痛み止め)が替わった。

日赤でも最近になって使えるようになった薬だと言う。

しかし、痛み止めは、一日二回のモルヒネと食後の薬があるので、とん服に果 てが出ない。

医者は使って欲しいそうだ。

痛みの段階に五段階あって、三程度になれば彼女は飲むようだ。

今朝、医者が来て、痛みの様子を尋ねた後、まだ二の程度だから飲むと言わない彼女に向かってこう言った。

「好評なんですよ。甘くて飲み易いって。」

えっ? 効果じゃなくて、甘くて飲み易いが基準?

それとも、かみさんは子供?

<u>本気だったろうか</u>

久しぶりにパソコンの前に坐った。

僕は、鍼灸院を開設し、鍼灸治療を生業(なりわい)としている。

今まで、何人の患者さんの体を診て来ただろう。

その一つ一つの治療において、常に真剣であったかといえば疑問だ。

患者さんの苦痛を和らげ、病気を治すことに、確かに良心的には当たって来た

しかし、本気で治すという気持ちはあっただろうか。

治って欲しいと願い、その立場で治療に当たってきたのには間違いないが、こうすれば治るという確信と展望を持って治療に当たってきたかといえば疑問だ。

何とかかるかな?

治らなかったとしても、それは僕の責任ではないよな。

医者に治せないものが僕に治せなくっても仕方ないよな。

そんな甘えがあったように思う。

しかし、僕の目の前にいる患者さんは、常に僕に助けを求めてきているのであって、遊びに来ているわけではないのだ。

命の重みを腹に収め、命に対する向き合い方を根本から見直さなければならない。

お弁当

昨日、娘が弁当を持って来た。

娘の弁当を食べたのは初めてかも知れない。

今日はMさんが、ビワの葉を持って来てくれる。

Tちゃんからのメールで、Mさんも弁当も持って来てくれるとか。(Tちゃんが頼んだみたい。)

それを楽しみに、今日もガンバ□

焼き芋

かみさんが

「焼き芋、買ってきて。」

と言った。

モルヒネの副作用に便秘があるので、それを予防するためらしい。

嬉しいことに、鍼灸院の近くに、焼き芋を売っている八百屋さんがあるのだ。 僕が買うのは少し照れますね。

ピースニつ

今日、昼過ぎに行くと、嬉しそうな顔をしている。

「朝夕、食前にしていた吐き気止めの点滴、無くなったよ。」

点滴の針が外されていて、手が自由になって嬉しそう。

「脳はね、脳梗塞の痕だろうって。だから、脳には放射線当てないって。」 そう言って、ピース。

「血液検査は何のためですかって尋ねたら、白血球が少なくなっていないかを 診るためだって。そして、それは落ちていないから免疫力は大丈夫だって。」 そう言って、再びピース。

そこへ、Mさんがビワの葉と僕のお弁当を持って現れた。

一時ごろ電話があって、楊先生が来て下さるという。

そして、二時過ぎに楊先生が顔を見せた。

楊先生は、痛みや吐き気、食欲、便通などの問診をし、脉を診、おなかを触り 、舌を診、漢方薬と食品の指示をしてくれました。 漢方薬は十全大補湯。

この薬は、体力の弱った人に、体力を回復させるために用いる薬なので納得。 主治医に言って、もらいなさいということでした。

さて、問題は食べ物。

何と、スッポンスープ□

スッポン一匹と冬虫夏草を十個入れ、それに生姜を入れて煮込んだもの。 レシピも教えてくれました。

それは、たまたまMさんがいてくれたので、彼女に頼むことにしました。 楊先生はビワの種は要らないと言ったけれど、それは続けるつもりです。 抗がん作用に期待しているからです。

楊先生は、最後にかみさんの手を握り、

「頑張りましょう。」

と言って下さいました。

とても優しく親切な先生です。

楊先生が帰られた後、Tちゃんも顔を見せてくれました。

野菜ジュースとパンの差し入れです。

明日の朝は、僕のおなかに入ります。

MさんにもTちゃんにも感謝です。

ありがとう。

これで、掌へのお灸療法、気功、ビワの葉療法、ビワの種の飲用、漢方薬、そして栄養満点スープと、彼女をバックアップする体制は揃います。

僕も鍼灸治療と気功治療に全力をあげなきゃね。

こういう時にこそ、気を引き締めなくっちゃね。

ゆっくり治療

昨夜は色んなところが痛んで、余り眠れなかったとか。

朝食後、九時の痛み止めを飲んだ後、ビワの葉を体のあちこちに貼り、横になってもらい、鍼灸治療と気功治療を一時間ほど行なった。

途中からは完全に熟睡し、ぐっすり眠れたようだった。

放射線治療が十一時なので、服を着替え、顔を洗い、トイレに行き、準備を整えて看護師さんが迎えに来るのを待った。

少し遅れたが、彼女が治療に行ったので、僕は病室を出て、午後の気功講座に出かけた。

安心

放射線治療に行くために、看護師さんが迎えに来るのを待っている時、彼女が 僕の手を握りに来た。

「どうしたん?」

僕の言葉に、彼女は答えた。

「安心。」

動揺していないように見える彼女の心の中は、不安で一杯なのだ。

十全大補湯

十全大補湯は体力の落ちた人、体力をつける必要のある人に用いる漢方薬だ。 楊先生に勧められたこの漢方薬をもらえるように主治医に頼もうと待っていた のだが、ここ二日ほど顔を見ていない。

仕方がないので、今夜の担当の看護師さんに、先生に伝えてくれるように頼んだ。

駄目なら、市販で売っているので、それを飲ませようと考えている。 スッポンスープは、彼女が飲めるかどうかわからない。

息子が一度試しに持ってくるとか。

飲めそうになかったら、高麗人参でもいいようだ。

今朝は悪い

タベは足が痛くて、湿布を貼っても駄目で、保冷剤をもらって痛みを和らげた とか。

睡眠不足のよう。

数m.の距離にあるトイレにも歩けず、車椅子で連れて行ってもらったとか。(今朝もそうだった。)

少し吐き気があるとか。

それでも元気の素だからと朝食には挑戦していた。

彼女の気持ちが萎えないようにしないと。

熱田神宮

今朝、気功教室の前に少し時間があったので、熱田神宮へ行った。

神木の大楠の前で採気をし、エネルギーをいただき、拝殿でかみさんの無事 を祈った。

祈りのパワーは強いと信じている。

入院十一日目

放射線治療を十回するのだが、今日で八回目が終わった。

今週は五日連続だったので負担が大きかったようだ。

今日は吐き気が治まらず、一度、吐いたとか。

起き上がることや歩くことが辛く、車椅子でのトイレ通いだった。

車椅子も自分の手が自由にならず(痛くて力が入らない、)、介助を頼むことにかる。

僕がいる時は僕がするが、あとは看護師さんを呼ばねばならない。

痛みと吐き気は辛く、病を乗り越える気力を失わせる。

痛み、吐き気は我慢せずに、薬をもらうように言っておいたが…。



<u>寝ています</u>

眠りに入ると、誰でも体をピクッと動かす。

その時に、かみさんは股関節から大腿にかけて激しい痛みが走る。

眠りに入っても、その痛みに起こされる。

それで一晩中眠れなかったようだ。

朝、僕が来てから、トイレに連れて行き、朝の薬を飲んで眠りについた。 看護師さんが来て、時々は起こされたが、昼になっても眠り続けている。 今日は、こんな様子かな。

スッポンスープを依頼

山田君(婿さん)がネットで調べてくれた熱田区にあるスッポンを扱う店に電話をした。

「病人の栄養をつけるためにスッポンのスープを飲ませたいのですが、テイクアウト出来ますか?」

「ああ、いいよ。」

「おいくら位でしょうか?」

「一人前、3800円で、鍋は二人前からだけれど、そういう状況なら一人前でいいよ。」

「スープだけでもいいをですが…。」

「えーっ□ でも一、スープだけじゃお金取れませんから。」

「じゃ一、肉もいただきます。」

「鍋の形でお出しするので、持ち帰り用のタッパーや水筒を持って来てね。」 「はい、わかりました。」

いいお店があって良かった。

<u>スッポンが来た</u>

夕方六時過ぎ、娘がスッポンスープを持って来た。

一回に飲める程度の量が入るタッパーに小分けし、肉は別のタッパーに入れた

少し持って行くと、かみさんは恐れることなくスープを口にした。「生姜が効いてて美味しいよ。」 そして、肉に箸が伸びる。 白いゼラチンのようなものをつまんだ。

「食べられないことないよ。」

僕も肉をつまみ、スープを飲んだが、さすがに料理屋のスープだ。 ただ、鍋用で、本来なら、これに野菜などを入れるので少し味が濃い。 で、僕が薄めて煮込むことにした。

今日は爽快

タベ、ニラを入れ、薄めて作り直したスッポンスープを、今朝、今日の分だけ 煮直して持っていった。

かみさんは椅子に坐っていたが、少し痛そう。

「薬飲んだら?」

「そうしようかな。」

七時半頃に、定時の薬を飲む。

その後、トイレ、食事、歯磨きなどの世話をして、仕事に出た。

昨日より、かなり明るく元気そう。(といっても、昨日は寝てばかりいたからね。)

スッポンも美味しそうに飲んでいた。

「身は何も考えずに食べよ。」

と言って食べていた。

ねぎを入れてきたので飲みやすそうだった。

「ああ、今日は爽快。」

そんな言葉が彼女から出たのは久しぶりだった。

スッポン効果かな?

眠るこの意味

安心という気持ちには絶対になれない。

だから、安心して眠るということは絶対にない。

眠るのは、今日の疲れを取るためではない。

明日、起きて早く病院に行き、仕事をし、また病院に行き…と、そのためだけ に眠るのだ。

「かぁちゃんがいないと寝れないよー。」

「あたいもー。」

この年齢(とし)になって、こんなに弱い僕たちなのだ。

咽喉がいがらっぽくて

夜は足が痛くて、湿布を貼ったり、とん服飲んだりしてごまかしたが、痛みは 取れず、余り眠れなかったようだ。

いつもは七時半に飲む痛み止めの薬を六時半に飲んだとかで、僕が行った時は、少し楽そうだった。

「うどんが食べたい。」

というので、近くのコンビニに行ったが、生めんのものはなく、止むを得ず「 どんべえ」の小ぶりのにした。

病院で出される食事は余り食べれない。

今日、僕が持っていったスッポンスープは、胡麻がたっぷり入れているので、 うどんの前に飲んでいた。

豆腐、プリン、バナナ少々などを食べたようだ。

咽喉がいがらっぽくて、柔らかいものしか手が出ないらしい。

元々喘息気味で、クーラーには弱いので、マスクを持って来て欲しいとのこと

以前、Tちゃんに買っていただいたマスクが少し残っていたので、持って行くことにしよう。

いのち

今週の木曜日に抗ガン剤点滴をする予定だ。

でも、その効果は二割から三割。

消滅させることは出来ないと言う。

これ以上進行させないための抗ガン剤なのだ。

半年までに五割の方が亡くなり、一年で八割の方が亡くなって行く。

これはかなり厳しい現実だが、その厳しさへの挑戦なのだから、一日も気が 抜けないし、一日もおろそかには出来ないのだ。

明るい顔

今朝はすっきりと明るそうな顔をしていた。

十全大補湯も飲み、食事の前にミニトマトを食べ、食事と一緒にスッポンスープを飲み、食事もわりと食べていた。

ちょこちょこと、一日何回も食べるように指示しておいた。

<u>みんなの力にありがとう</u>

昨日、Mさんからビワの葉を沢山いただいた。

その時、Mさんが話してくれた。

「うちの旦那さんが自転車で走っていて、公園に大きなビワの木を見つけ、これと同じくらいのビワの葉を採って来たので、まだ沢山あるからね。」

うちのかみさんは、こうやって見知らぬ人達の力を借りて、ガンと闘っことが 出来ているんだよね。

スッポンスープを心良く作ってくれた店屋のご主人もそう。

家族、姉妹、友人、見知らぬ沢山の方々に感謝です。 ありがとう。

ミニトマト

姉が美味しいミニトマトを持って来てくれた。

優糖生という名のミニトマトだ。

こんなに甘いのがあるんだとびっくりした。

かみさんが、ちょっと食べるのに、こういうのが良いと言う。

で、スーパーに買いに行った。

別のブランド名のものがあった。

これも甘かった。

ミニトマトがこんなに品種改良されて、こんなに甘くなっているとは知らなかった。

何か、はまりそう。

<u>つまみ食い</u>

朝の仕事を終えて、十一時半に病室に来る。

彼女は放射線治療のために出ていて、ベッドは空だった。

ちょっとお腹が空いていたので、ベッドサイドの冷蔵庫から僕の好きなプッチンプリンを失敬した。

あ一、美味かった□

食べ終わったら彼女が看護師さんに車椅子を押されて戻って来た。 えへへ。

. -

吐き気

今日で放射線治療は終わった。

やはり吐き気は出る。

夕方の四時頃、嘔吐したらしい。

その後も少し吐き気は続き、夕食は、おかずの南瓜の煮物を少しだけ食べて終わった。

うどんも食べたいと言いながら、吐くのが恐いからやめよと言って食べなかった。

お腹空いたら、夜中に食べなと言って帰って来た。

プリン、ヨーグルト、ミニトマト、さくらんぼ、あと、何があったかなー? 明日の朝が楽しみだ。

整形

七時半頃、嘔吐した。 看護師さんを呼んだ。

「僕の顔を見ると気持ち悪くなるみたい。」

看護師さんは笑った。

そして続けた。

「整形いるかも」

かみさんも笑った。

抗がん剤治療

今日の採血の結果、免疫力が落ちていないので、明日、抗がん剤の点滴をするらしい。

少し吐き気があるので、明日の朝決めようとのこと。

四時間点滴で、その後三週間で体が元に戻るほどの強い副作用があるのだ。

一番恐いのは、白血球が減少すること。

免疫力を落とさないような対策を取らなくては…。

<u>スッポンスープ</u>

自然治癒力を高めるために、楊先生が教えて下さったように、冬虫夏草と高麗 人参を入れてスッポンスープを作っています。

この前に作ったのは、スッポンだけのスープだったが、今回のは強力パワーだ

味付けはプロがしているので、水を足しながらコトコト煮込んでいる。 僕が料理の出来る人、しかもスープの得意な人で良かったね。

いよいよ

今日は入院の中で一番の治療を受ける。

四時間の抗がん剤の点滴だ。

有効率は二割から三割。

効く効かないの差はなんだろう?

とにかく、副作用を含め、辛い治療なのだから、効いて欲しい。

最初の一時間はアレルギーや吐き気止めをして、その後、三時間が抗がん剤だ

がんばれ! かあちゃん□

今日は、祈りの日になりそうだ。

無事に終わりました。

抗がん剤点滴も、何の問題もなく、快適に終わりました。

その間、僕は老人会の健康講座があって傍にいてあげることは出来なかったのですが、Mさんが来て下さり、ずっと面倒をみてくれました。

点滴の中にはアルコールが入っているので(薬の影響もあるのだけれど)、頭がモウロウとするので、体の異常な変化がわからないといけないから寝てはいけないということで、Mさんは話しかけたり、色々食べさせてくれたり、大変なようでした。

かみさんも、いい友達を持ってしあわせな人です。 ありがとうございました。

仲間のみなさん、ありがとう

かみさんの入院治療も、医療としての分野での治療(放射線治療と抗がん剤の点滴)は、今日で一応終わりました。

しかし、治療というものは医療だけではありません。

鍼灸、漢方、代替治療、飲食、呼吸、気功、愛、安心、祈りなどの全てのものが動員され、有効的に働いていくのだと思います。

何よりも心強く嬉しいのは、直接的にかみさんの顔が見えない人たちからの祈りのパワーが届けられていることす。

陰に陽に、かみさんと僕を支えて下さっている仲間のみなさん、ありがとうございます。

食欲あり

、今朝は、昨日の吐き気止めの点滴が効いているのか、朝食は殆ど食べていた。 朝は僕の治療の時間。

脈を診て、弱っている気を補い、掌と三里に電気のお灸をする。

少し気功をさせ、その後、十全大補湯を飲み、少ししてスッポンスープを飲む

昼食後にビワの種の粉末を飲んで終わりだ。 僕たちの治療はまだまだ続くのだ。

快適空間を

抗がん剤の副作用が和らいで、白血球が元に戻るのに三週間ほどかかるということで、あとは外来での通院になる。

それまでに家の中を彼女のための快適空間に変える作業が必要になる。

電動ベッドを入れる。

トイレを和式から洋式に改修する。

部屋や廊下に手すりを作る。

介護サービスを受ける。

色んな行政サービスや介護サービスを使って、かみさんの快適な個室を作ってあ げないとね…。

錯覚

体調が良いと、病気が治ったように、或は、治る方向にあると錯覚する。

痛み止めや吐き気止めで、症状が抑えられているだけで、ガンは治った訳ではない。

ビワの葉や呼吸法、気功などをサボるのがかみさんの悪いところだ。

症状が悪くないと自分で出来る治療を忘れてしまうのだ。

僕たちはガンと闘っているんだということを話しておいた。

<u>普通の内臓疾患じゃないんだよ</u>

普通の内臓疾患なら、体調が良くなると、それは良い傾向にあると言える。 しかし、ガンの場合はそうはいかない。

体調が良くなって、喜んでいて、ドンと悪くなった患者さんを何人も見ている

0

良くなったように見える時ほど慎重にしなければならない。

何しろ、かみさんは、抗がん剤を一回打っただけなのだから、良くなる訳がないのだ。

自分治療、僕治療に力を入れなければ…。

一人が不安

今朝、少し吐きました。

寝かせて治療しました。

仕事があるの出掛ける時、

「いつ来れる?」

と聞く。

[十時半頃かな?]

「ゆうこ(娘)はいつ来るって言ってた?」

「同じ頃だと思うけど。」

[···。]

辛い時は一人になるのが不安なんだろうな。

何か元気

十時半頃、病院に行くと、かみさんはベッドに腰をかけていた。 「いいの?」

「うん。ビワも飲んだよ。」

午前中にシャワーがあるんだと、準備をしていた。

しばらくすると娘夫婦が顔を出した。

お寿司や果物などの差し入れだ。

シャワーの連絡があり、婿さんの押す車椅子に乗ってシャワー室に出掛けて 行った。

シャワーの後、タイ、マグロ、イカ、玉子、いくらと、お寿司を美味しそうに頬張っていた。

「あ~、しあわせ。」

朝の気持ち悪さはどこへ行ったのやら。

千客万来

今日はお客さんの多い日だった。

娘夫婦

友人のMさん

息子

かみさんの妹夫婦(富山から)

いま、横にして寝かせている。

ビワの葉をおでこに乗せて、タオルで覆っているとよく眠れるようだ。

愛

昔から、かみさんが病気になった時は、仕事から早く帰ってお粥などを作っていた。

いざとなった時は、何をおいてもかみさんのことを大事にする。

普段はほったらかしているのにね。

でも、今度ほどかみさんにかかりっきりになったことはない。

誰かが言っていた。

介護は第二のハネムーン。

僕には、かみさんの身の回りの世話に加えて、治療師としての役割がある。

そして何よりも、「君の傍にいるよ」という安心感を与えること。

愛なしには続けられない。

ちょっと、のろけてみました。

日曜日

今日は雨。

1994年から毎月一回続けてきた「ウォーキング」も、僕が、一日、体を空けることは出来ないので中止にさせて頂き、一日かみさんの病院だ。

朝、少し吐き気はあったが、妹が持って来てくれた笹寿司(マス、タイ、カニ)を二つ半ほど食べ、バナナも口にしていた。

今のところ、殆どひどい副作用も無く推移しているようだ。

<u>あ〜あ</u>

病院で出される食事は食べれないが、「小さなおうどん」なら食べれるというので、病棟の台所にうどんを作りに行き、お湯を入れて戻ってくると、少し 嘔吐していた。

あ~あ、しばらく食べれないね。

という訳で、いま、カップラーメンを食べたばかりの僕のお腹に入っちゃったよー。

苦しいよ~□

今日は最悪

やっと抗がん剤の副作用が現れて来た。

昼前から、ひどくはないが、悪心、嘔吐が続き、余り起きていられないようだ。

朝食以降、何も食べられない。

夕方、無理に、スッポンスープをスプーン三杯口にした。

今日からが勝負なのか、今日が最悪なのかは、僕にもわからないが、今朝の脈はホルモンや自律神経のバランスの異常を示していたが、夕方の脈は、今までのように、免疫力の低下と消化吸収能力の低下を示し、それは治療したので、多分大丈夫だとは思うが…。

あ~疲れた~!

七時のニュースを見ながら帰りの支度をする。

最後に車椅子でトイレに連れていき、歯磨きをするのを待ってベッドに戻し、寝る準備をさせる。

ここまでしてから僕は病室を出る。

毎日のことだが、今日は何故か疲れた。

今日は一階のエスカレーター前のロビーの長椅子に横になって小一時間寝て しまった。

やはり、もっと早くしっかり眠らなきゃ、疲れがたまるんだな一。

良くなる方向

夕べ、吐き気止めの点滴を受けたとか。

朝は、スッポンスープを飲み、お粥を少し食べた。

主治医の先生が来られて

「これからは良くなっていく方向にあると思います。」

とおっしゃっておられました。

でも、それは体調のこと。

決して「ガン」のことではないので要注意。

昼の治療

昼前に病室へ。

掌への温灸をし、お腹のマッサージをする。

昨日は全く動かなかった腸が、今日は少し動く。

小さなおうどんが食べたいというので、用意をし、昼からの仕事へ出た。

介護保険の手続き

今日、介護保険の手続きに行って来ました。

かみさんは六十五才以下なので、ガンという病名で認定される「二号認定」になるとのこと。

金曜日に、かみさんの調査に来て、要介護度を決めます。

認定までに約一ケ月かかるとか。

でも、トイレ等の改修は急ぐので、仮認定ということで、早速ケアーマネ

ージャーを決めて改修のプランを提出しなくてはなりません。

僕は治療に専念したいのですが、大事な雑用が増えてきます。

僕かかみさん本人じゃないと出来ない仕事なので仕方がありません。

主治医は、来週末か再来週の始めには退院させたいようです。

<u>ビワの種</u>

吐き気があるとビワの種には手が出ないようだ。 こうなったら仕方がない。 お気に入りのスッポンスープに内緒で入れることにしよう。

吐き気止めや痛み止めは副作用を抑えているだけで、ガンに対処している訳ではない。

鍼灸も漢方もスッポンスープも掌療法も、基礎体力や免疫力を高める効果はあってもガンに対処している訳ではない。

ガンに対処する僕たちの治療はビワの種なのだ。

だから、ビワの種は飲んでもらわないと困るのだ。

少し味は変わるけれど、料理人和気の腕の見せ所だ。

がんに負けるな

がんと闘う武器は手術、放射線、抗がん剤だけではない。

鍼灸、漢方、食品、呼吸法、瞑想、気功など、自分や家族で出来るもの、プロにされるものなど色々ある。

漢方では十全大補湯、補中益気湯などが有効。

食品では、枇杷の種、高麗人参、スッポン、冬虫夏草など。

臍への手当やお腹へのお灸もいい。

腹式呼吸、気功法(特に洗い流し、採気や気を丹田に収める気功)もいい。

とにかく、何か一つに決めて、それに頼り切らないで、東洋医学、民間療法も 大いに使って、免疫力を高めて、乗り越えて欲しいものだ。

痛くて寝れなかった

今朝は五時頃まで痛くて寝れなかったそうだ。

「痛み止めは?」

「効かないんだ。湿布さがしたけど無くて、やっと見つけて貼ったらラクになって、五時頃からグーっと寝たみたい。」

先生が来られて、痛み止めの薬を変えてみようということになったようだ。 でも、吐き気は無いので、スッポンスープと小さなおうどんを食べた。 病院食は僕がペロリロ

改修

かみさんが帰ってくるとなると、色々準備しなければならない。

電動ベッド、ポータブルトイレ、車椅子のレンタル、和式から洋式へのトイレの改修、風呂の床や部屋と廊下の段差の改修、幾つかの場所への手すりの取り付け、シャワー用の椅子やベッドサイドでの食事用テーブルと椅子の購入、…。 僕の家はクーラーのないことで有名だったのだが、そうも言ってはおれないし…。

とうちゃん、頑張れ□

<u>勘違いしちゃ駄目だよ□</u>

退院だとか介護だとかという話になると、このまま治っていくような錯覚に 陥る。

昔は、退院というと、完治して、看護婦さんから花束でも戴いて、

「おめでとうございます□」

と、送られての退院だったが、今は、医療制度の改悪で、追い出されての退院となる。

あとは外来でというが、ワンクールの治療も終わってはいないのだ。 半年後に五割の生存率の患者を一ヶ月で追い出す医療改悪をしたのは誰だ□ 彼女を治すこと、これが僕の使命なのだ。

電気製品

「お昼ご飯は、お粥もみんな食べて、ハンバーグも半分食べて、スッポンスープもビワの種も飲んだよ。」

「おりこう、おりこう!」(パチパチパチ)

食べたものがエネルギーになるように、三里にお灸をしておいた。

ちなみに、病院でお灸?と思われるかも知れないけれど、電気の温灸器を使うのだ。

電気製品は三個まで、届けなくても使用できる。

あんか、パソコン、ラジオ、髭剃りなどだ。

だから、気がねなく使っている。

カセットの電池も充電式で、病室で充電している。

かみさんの携帯の充電もね。

わりとすっきり

腰の痛みはあったそうだが、普段よりはぐっすり寝たので、すっきりしている とか。

スープと小うどんを食べた。

今日は僕が昼休みに行けないので、

「昼は病院のお粥を頑張って食べるぞ□」

と言っていた。

今日も暑くなりそうだ。

どうなるんだろうなー?

自宅の部屋やトイレ、風呂の改修は進んでいくし、退院の話も進んでいる。

かみさんは歩けないけれど、わりと元気そうだし、何か戸惑ってしまう。 この先、どうなっていくんだろうか?

そんなこと考えていないで、いま出来ることに全力を傾けていこうね、和氣 さん!

エライロ

吐き気がするのなら、十全大補湯を止めましょうかと看護師さんが聞きに来た 。

かみさんは断ったそうだ。

かみさんは楊先生の勧めてくれた漢方薬とスッポンスープ、そして樋田先生の 教えてくれた掌療法は何としても続けるようだ。

エライロ

緩和病棟

かみさんの入院している病棟の上の階は緩和病棟だ。

エレベーターに乗った。

僕は□を押す。

一緒に乗った男の人に尋ねた。

「何階ですか?」

「七階です。」

そして彼は呟いた。

「あそこは生きては帰れないんだ。」

末期がんで、治療の施しようのない場合、最後の残りの人生を、痛みをとって、有意義に生きてもらうためのホスピスではあるが、家族にとっては、勿論、本人も、つらい日々なんだろうなー。

彼に声をかけることは出来なかった。

マスク

昨日、採血とレントゲン検査があった。

今日、主治医が話に来られた。

「肺ガンの影は薄くなっています。

こんなに早く出る人は珍しいです。

ただ、抗がん剤の副作用で、免疫力が低下しています。

いますぐどうこうということではないけれど、ここ二三日は感染症には気をつけて下さい。

手洗い、うがいは忘れずに。」

「マスクした方がいいですか?」

「そこまでは大丈夫だけれど、じゃー、念のために。」

ということで、僕も明日からマスクをつけよう。

モウロウ

痛み止めの薬が変わり、頭をモウロウとさせる物質が入っているようだ。 昨日から眠たい眠たいと言っていたが、今朝は僕が顔を出しても眠っている。 時々薄目を開けるのだが、すぐにつむってしまう。

こんなことは初めてだ。

朝のトイレに連れて行き、戻った後、椅子に座って記録を付けるのだが、「いま何時?」

と聞く。

「八時十分だよ。」

「いつの?」

[?]

「朝? 夜?」

「外、見て。明るいよ。」

「でも、わからんもん。」

「朝だよ。」

「わたし、薬、いつ飲んだ?」

こんな薬はやめてもらおう。

嘘

第二と第四の木曜日に、午前と午後を通して行なわれている気功塾の人たちに は言えなかった。

かみさんの足が動かなくなって歩けないから、僕が家事をしないといけないので、一日中家を空ける訳にはいかないから、午後だけにして欲しいと頼んだのだ。

まさか、肺ガンなんてねー。

しかも第四ステージなんてねー。

言えないよねー。

今日からマスク

今日から自主的にマスクを付けました。

集中治療室じゃないりで病棟には置いていないから、Tちゃんお薦めのダイコク薬局というところまで自転車で買いに行きました。

十枚入りで百円です。

五袋(五十枚)買いました。

そこには、かみさん愛用の湿布も売っていて、かなり安いんです。

その近くに千里馬薬局というのもあって、アリナミンVが11本で1380円でした

もう少し近いと、いつでも行くのにな一。

介護の調査

今日の昼から、区役所の人が病院にやってくる。

介護認定のための調査に来るのだ。

認定の段階によって、ベッドなどのレンタルの補助が出るかどうかが決まるので、大事な調査だ。

ベッドのレンタルは、実費だと月に約一万五千円。

要介護二以上だと一割負担で済むのだ。

かみさんの状態は要介護いくつかな?

足の痛み

薬が切れてくると足の痛みが強くなる。

この痛みは足の骨に転移したガン自体から来る痛みだから、転移したガンは小さくなってはいないんだろうなー。

最近はビワの種も余り飲んでいないし…。

明日、また、ハッパかけなきゃ。

痛みを抑えるのは治療じゃないんだよって。

僕たちの目標は、ガンを小さくし、消滅させることなんだってね。

<u>元気にな~れ□</u>

痛みはあったが眠れたようだ。

痛みより眠気の方が強くなる薬なのかな?

スッポンスープは、いつもより少し薄味にしたので、美味しい美味しいって飲んでいた。

元気にな~れ□



<u>今日は元気かな</u>

ご飯も割と食べました。

吐き気は殆どなく、足の痛みは少しあるけれど、痛いって言うほどでもなく、 割と明るく元気でした。

ありがたいね

今日、家に帰って驚いた。

玄関や部屋に手すりが付けられ、段差をなくす板が取り付けられ、部屋と廊下 の境や風呂の入り口にカーテンが吊り下げられていた。

山田君(娘の旦那)が取り付けてくれたのだ。

彼は、病院に来ても、かさんがシャワーに行く時に車椅子を押して行ってくれる優しい人だ。

僕たちは良い人たちに恵まれていると感謝している。

日課だから

今日は、少し寝坊した。

起きたのが六時三十八分だった。

雨が降っていた。

「雨だったら来れないかも知れないよ。」

昨日、そう言って帰って来たので、寝ていようかと思った。

少し酸素をした。

少し頭が戻ってきた。

スッポンスープを作りに起きた。

今日は不燃ごみの日だった。

片付けものの山が廊下にあった。

出しに行った。

雨は小雨だった。

自転車で行けると思った。

毎日続けている日課だ。

スープと野菜ジュースをビニールの袋に入れて自転車にまたがった。

心がホッとしていた。

朝の日課

病室に入る。

かみさんは寝ていた。

僕は、一階で買って来たコーヒーを飲み、かみさんの食べかけのバナナを口に した。

そして、治療。

脉を診て気を調える。

おなかをマッサージしてから手を当てて気を入れる。

かみさんが起きる。

水を小さなペットボトルに入れ替えて冷蔵庫に入れる。

お茶が来る。

かみさんを車椅子でトイレと洗顔に連れて行く。

食事が来る。

こみを出しに行く。

「じゃー、また、昼来るね□」

病室を出る。

いつもの朝だった。

わりと元気そうだった。

え一、早すぎるよ一□

今朝、主治医の先生が来られて言った。

「もう明日にでも退院できますよ。」

白血球も戻ってきているし、ガンの影も薄くなっているし、入院している必要 はないということだ。

本来なら喜ぶべきことなのかも知れない。

でも、かみさんは自力では数歩しか歩けない。

しゃがむことも出来ない。

そのかみさんが家で暮らしていける準備はまだ出来ていない。

トイレ、風呂、移動など、全てを作り替え、電動ベッドを入れなければならないのだ。

また、ケアマネージャーさんにも会っていないし、リフォームの人とも今日会ったばかりだ。

先々週の木曜日に抗ガン剤を入れて、免疫力が落ちて、戻るのに三週間かかって、そこで検査して、問題がなかったら退院になりますっておっしゃったじゃないですか。

まだ、二週間も経っていないんだよ。

早すぎるよー□

次から次へと

今日はケアマネージャーさんと初めての顔合わせと状態説明をした。

どういう介護が必要なのか、食事は、トイレは、入浴は、通院は、訪問看護は、訪問医は…、と問題は山積している。

とにかく疲れた。

僕と娘と友人のMさんの三人でカバーできるのだうか?

かさんが一人きりになる時間が余りにも多すぎる。

ガンと闘うというよりも、日々の暮らしに追われてしまいそうだ。

そのことで、折角戻りつつある命の炎を消していくことになりはしないだろうか。

不安がいっぱいの僕であります。

のんびり

ここ何日か、退院の準備のためにドタバタして忙しかったが、今日は盲学校も 試験のために、非常勤の僕は休みだし、何かの予定もないし、病院の畳の部屋で 横になることが出来た。

さぁ、少し早いけれど、買い物に行って来ようかな。

なんか美味しいもの探して来よう□

医療改悪

肺ガンは、二回目からの抗ガン剤の点滴については、保険の点数が入院では低くなって、通院じゃないとお金にならないようだ。

患者や家族に負担を負わせて医療費の削減をおこなっている。

おかげさまで僕の仕事は、朝も昼も夕方も自宅に帰る時間が作れるし、娘も 昼間、来ることが出来る。

自宅(持ち家)だから、それなりに改修も出来る。

でも、そうでない人たちも沢山いるはずだ。

そういう人たちにも、保険の点数が低くなるから通院でないと治療は出来ない というのだろうか。

かみさんが帰った後の状況なんて聞いてはくれない。

それは介護の仕事なのだ。

ベッドのままリフトタクシーに乗せて帰る退院なんてある?

タンカーで運ばれて入院することはあるけれどね。

もしかしたら、通院もベッドのままだよ。

条件も無視して、一律に治療の単価を下げて、通院を強制する医療制度を作った自民党とその政府に僕は怒りを覚えるし、弱い立場の国民に顔を向けた政権を作らなければと、つくづく実感した。

大きな力

かみさんのガンの影はまた小さくなったらしい。

白血球も普通に戻りつつある。

まだどうなるかわからない。

しかし、これまでになるためには沢山の力が彼女に降り注がれている。 科学者や医者は認めないかも知れないが、僕は全ての力に感謝している。 Tちゃん、U君、Mさんが届けてくれた矢合の観音さんの祈祷したお水。 熱田神宮の祈祷済みのお札。

Mさんがくれたお守り。

Tちゃん、U君、Mさんとご主人の取ってきてくれたビワの葉。

ビワの種を分けて下さった恒川クリニック。

てのひら療法を教えて下さった樋田先生。

忙しい中、わざわざ日赤まで来て漢方薬とスッポンスープを教えて下さった楊 先生。

スッポンスープを心良く分けて下さった愛郷のご主人。

元気の出るものを土産に駆けつけてくれた姉や妹たち。

何でも引き受けて、してくれている娘や婿さん。

そして、遠く祈りを届けて下さっているネットの仲間たち。

優しく接して下さった日赤のスタッフのみなさん

まだまだ書き足らないけれど、全ての祈りや思い、愛が彼女に届いているのだと感じている。

ありがとうございます□

今日は忙しい

今日は八時前に病院に行き、朝食や歯磨き、トイレ、洗顔の介助をして、九時 半頃から治療をし、今はシャワータイム。

この後、僕は一時に地下鉄の駅でMさんと待ち合わせてから自宅へ。

一時半にベッドなどが搬入される。

その後、ケアマネさんと退院やその後のケアについて打ち合わせ。

そして再び病院に行くことになる。

さぁ、ファイト□

人情

僕は、今の時点での退院に不安を持っていた。

土曜に退院して、次の火曜に二回目の点滴をし、そのまま帰って、次の日からトイレやらの改修工事に入る。

抗ガン剤の点滴は、二三日後が一番辛いのだ。

そんな時期に工事をしている中で寝てはいれない。

医療制度上、二回目の点滴は通院でないと駄目なのだ。

ケマネさんも心配してくれた。

僕たちはそのことを率直に病棟の看護師さんに話をした。

ケアマネさんも話をしてくれた。

夕方、看護師長さんがやって来た。

「制度上では主治医の言う通りなんですが、みなさんの希望に添って考えたい と思います。入院したまま二回目の点滴を行ない、少し落ち着いてから退院され ても構いませんよ。そうすると改修工事も終わっているようですし。」

看護師長さんがそうおっしゃって下さった時、僕は嬉しくて鳥肌が立ったよ。

制度はあるけれど、患者の状態と思いを大切にしてくれた日赤の看護スタッフのみなさんに感謝である。

ありがとうございました。

人情ある対応は嬉しかったねー□

_

不安

先生がどんなに良くなったとおっしゃっても、かみさんが疲れた顔をしていると、やはり不安になる。

昨夕は、疲れたから早く寝ると言って七時過ぎに横になった。

退院のごたごたで精神的に疲れたのだろう。

ガンを悪化させる大きな要因は疲れだ。

僕はかみさんが疲れないようにすること、そのことにかなりの神経を使っている。

昨夜は不安だった。

久しぶりに、あんなに疲れた顔を見た。

しかし、今朝は普通に戻っていた。

少し安心した。

_

<u>医療費の請求</u>

今日、六月分の請求が来た。

えつ□

請求額を見て驚いた。

請求書には、三十一万数千円の文字が。

名古屋にはとても良い制度があって、国民保険限度額適用認定証というものがもらえ、八万円を超える医療費は請求されず、それを超える分は、医療機関が名古屋市に直接請求する制度だ。

僕はかみさんの入院と同時に、区役所に行って、その認定証をもらい、日赤に 提出していたので、その額の多さにびっくりしたのだ。

差額ベッド代?

それとも食費?

明細を見ると、ベッド代は無し(入院費として、千五百円少し)。

食費が、二万二百円。

放射線治療費が、一万五千円程度。

残りが医療費となっている。

慌てて事務の女の人に尋ね、会計の管理室へ。

認定証を提出していることを話す。

どうも、提出した時に、コピーした病棟のところで止まっていた模様。

すぐに作り直してくれた請求額が10万少し。

医療費は、七万四千円少しになっていた。

放射線は医療費に入らないんだ□

それにしても、個室なら一日一万円少し、四人部屋なら一日四千円少しと聞いていたのに、それは無かった。

千五百円少しで一ケ月も入院出来るの?

食費がもったいないよね。

だって、かみさん、病院食は余り食べずに、僕が買ってくるものを食べるんだからね。

残り一週間だけれど、病院食は、僕が一生懸命に食べることにしよう□

快適空間

家に帰った。

かみさんの寝る電動ベッドの頭の側にあった本箱が無い。

邪魔なので二階に上げたいと娘に言っていたので、娘が(山田君かな?)が 上げてくれていたのだ。

置き場の無かった仏壇が元の本箱のあった台の上に収まっていた。

まず、二階にある不用なものを片づけて、そこに一階から本箱を持って行ったのだ。

その他にも、整理棚が置かれ、何かスッキリしていた。

娘も山田君もよくやってくれる。

家の中が何か変わっていく…。

嬉しいことなのだろうか…?

そばにいよう!

今日は日曜日。

僕も仕事は入っていない。

明後日には第二回目の抗ガン剤の点滴が行われる。

体調を調えておいてもらわなくてはならない。

だから、今日は一日かみさんの傍にいよう。

買い物以外はね。

どうしたの?

かみさんが元気がない。

看護師さんにも言われたらしい。

余り食欲もない。

「えらい?」

「うん。」

「どうしたんだろうね?」

「家に帰りたいんかも知れない。まだ入院か一って思ってね。」

「でも工事中のところでは寝ていれないよ。」

「わかってるよ。」

やはり、病院はいやだろうな一。

明日、早く行ってあげよう。

副作用

抗ガン剤の副作用で、最近、抜け毛がひどい。

かなり薄くなってきた。

「あんたのは、まだいいよ。また必ず生えてくるんだから。

僕のはもう生えてこないんだよ。」

なんの慰めにもならない?

出かけたい所

元気になったら出かけてみたいところを語り合った。

清里高原

五月の連休に何回か泊まりで行ったよね。気功の合宿もしたよね。

吉野山

癒しの学校の合宿で行ったね。山の上から歩いて下りながら見た山一面の桜が もう一度見たいな。

曽爾高原

緑一杯の山が綺麗だったね。わ一って広がる感じが好き。

高野山

二人で行ったのと合宿で行ったの合わせると何回行ったろうね。幽玄なロー ソク祭りも大伽藍の澄んだ気も良かったね。

三尾 (京都)

山の中の緑と空気が好き。かわらけ投げしたね。

どちらにしても山の中、緑の中だ。

あの子は山や緑が好きなんだよな。

<u>トイレおじさん</u>

朝、七時半頃、病室に顔を出すと、

「洗顔とトイレ連れて行ってくれる?」

「はいはい。」

僕は車椅子を準備する。

朝食を終え、八時半過ぎ、仕事に出掛ける前に、

「トイレと歯磨き、連れて行ってくれる?」

「はい、はい。」

昼に顔を出すと、

「トイレお願い!」

昼食後の歯磨きも。

夕方、仕事を終えて顔を出すと、

「トイレ行きたい!」

夕食を終え、七時半頃、帰る前に、

「トイレと歯磨き、お願い。」

彼女は一人ではトイレに行けない。

車椅子で連れて行ってもらうか、ベッドサイドのポータブルトイレですること になる。

どちらにしろ、看護師さんの手を煩わせてしまう。

彼女はそれがいやなのだ。

だから、僕の顔を見ると、

「トイレ、お願い□」

ということになるのだ。

僕はトイレおじさんなのだ。

今や、車椅子でのトイレまでの運転免許がもらえそうたよ。

大慌て

携帯が振動している。

目覚ましだ!

慌ててラジオをつける。

ニュースをしている。

七時を過ぎている□

慌てて飛び起きて、冷凍している一日分のスッポンスープをレンジにいれて二分セット。

その間に着変えて、温めたスープを鍋に入れて沸騰させる。

洗顔を済ませ、スープを小さなポットに入れ、可燃ゴミを出して自転車にまたがる。

七時半までに行ってあげないと、かみさんがトイレを待っている。

少し遅れたが何とか間に合った。

かみさんは寝ていた。

「早いね。」

「今日、目覚ましに気が付かなくて、寝坊したよ。音、消していたみたい。や っぱり六時半にセットしとかなきゃ。」

「?…?、今、六時半だよ。」

[?]

かみさんが時計を見せた。

こんなことは初めてだ。

さっきの振動はなんた?

見ると、アダルトの迷惑メールだった。

携帯を換えてから、迷惑メール対策してなかったんだ。

あ~疲れた!

チャンチャン!

木曜日に

朝、八時半、主治医の先生が顔を見せた。

「昨日の採血で白血球が二千七百に下がっていたので、今日の抗がん剤の点滴は無しにしましょう。木曜日に採血して、それで木曜日にするということで…。」

あらら。

退院はまた延びる?

そんなことより、かみさんの治療しなきゃー□

色々な味で

スッポンスープを作っています。

高麗人参、冬虫夏草、ビワの種(粉末)のブレンドスープです。

今日、白ごま、黒ごま、きな粉、とろろ昆布、マッシュルーム、ヤングコーンなどを仕入れてきたので、明日からは色々な味を楽しんでもらおうかな?

元気そう

タベ、少し強い睡眠薬を飲んだようだ。(昨日、そうしようと言っていた。) で、ぐっすり眠れたのか、朝、珍しく「元気だよ」というメールがあった。 朝の洗顔とトイレに連れて行き、治療をする。 おいしそうにスッポンスープを飲んでいた。

<u>祈り</u>

__かあちゃんの無事を祈って、見守り続けた 彦根城の彦にゃん お灸の袋に付けられている熱田神宮のお守り 「元気でね」と書かれている地蔵画

祈り 2

ベッド横の簡易テーブルの上に置かれた陶器のお地蔵さん

倉庫

かみさんが帰ってくるというので、トイレやお風呂などの改修工事に入りま した。

朝九時から夜の九時まで、娘、Mさん、僕と交代しながら部屋にいました。 水が止められているので、トイレにも行けない。

もちろんその工事なのだから。

留守番の時間はMさんが一番長かった。

とりあえず、トイレと風呂は入れるようになった。

でも部屋の中は倉庫のようだ。

僕は今夜、ここで寝るんたよな一。

ま、風呂も入ったし、トイレも行けるのだから、ありがたいことだね。

白血球

また下がった。

二千二百。

従って、今日予定の抗ガン剤点滴は延期になった。

土曜日に退院し、次は一週間後くらいに外来でということになりそうだ。 いやはや。

治療としての方向を

今までずーっと微熱が続いていたが、今朝は三十六度六分。

食事も八分くらいは食べて、痛みもコントロールされているのか、動きも軽くなってきた。(勿論、車椅子だよ。)

明日、退院の予定だから元気なのかな?

いよいよ明日退院だ。

今日は退院後の訪問看護とヘルパーさんの打ち合わせをした。

娘も参加してくれたので、今日は何と、Tちゃんが留守番をしてくれた。(まだ 改修工事をしているので、留守番が要だったのだ。)

月曜の午後にヘルパーさん、木曜の午後に訪問看護、火曜にMさん、水曜に娘が入ってくれる。

金曜の夕方に夕食の配達を依頼して、後は僕の奮闘で看病していく予定。

しかし、僕の意識の中では、かみさんは介護ではなく、治療を目的としての生活を組み立てなければならないのだ。

医師や看護師、訪問看護の人、ヘルパーさんたちには、そんな意識はない。

現状維持か悪くなることを予想しての看護とヘルプの話ばかりで、どうやって 回復させていくのかという方向は持っていないようだ。

補中溢気湯、ビワの葉、スッポン、高麗人参などは、仲間や娘の協力を得て、 鍼灸は僕とかみさん自身が担当する。

治す、治るという意志と対策を立てずにおいて、どうやって治るというのだ。 それにしても、今日は疲れた一。

退院

まだ採血の結果が出ていないけど、無事に退院出来るといいな!

決まったよ

今日、退院出来ることになりました。

まだまだ治療は続きますが、みなさんの祈りと応援に ありがとう□

息子の決意?

母親が退院してきたことを機に、息子が二つの決意をしたようだ。

一つは禁煙。

従業員の子にも宣言して、持っていたタバコとライターをみんなあげて来た とか。

二つ目は、食事の用意

週に二回、母親のために、晩飯を作るとか。

僕としては、かなり疑い深く思っているのだが…。

いつまで続くのかな?

いずれにせよ、あの息子が、母親のために何かをしようと決意してくれたこと は喜ばしいことだ。

とにかく忙しかった

今日は忙しかった。

かみさんが退院したとは言え、生活していく上で不都合なことがいっぱい見つかる。

例えば、お風呂は椅子に座ってシャワーを浴びるのだが、脱衣、着衣も椅子に座ってしなければならないのだ。

食卓の椅子を持って来ても良いのだが、大きすぎて不便だ。

百均に見に行ったが、風呂用の小さなものか、釣り用のものしかない。

スーパに探しに行く。

そんな具合に、水を買いに行ったり、夕食の買い物に行ったりで、スーパーを 三つもはしごした。

朝は洗濯して干して、夕方は取り込んで、三食作って後片づけして、とにかく、主婦って凄いんだって改めて実感させられました。

さて、これから、かみさんのシャワーの介護です。



<u>家がいいね</u>

「美味しいもの食べて、一人で静かで、家がいいね。

嬉しいな!

とうちゃん、大変になったよね。」

かみさんがそう言った。

和気から体重計を持って来た

四十一kgだった。

少し増えていた。

<u>お隣さん</u>

今日の夕方、突然に雨が降って来た。

え一つ、洗濯物が一。

家に帰ると、大きなビニール袋が二つ、玄関の取っ手に吊り下げられている。 隣の奥さんだ。

「チャイムを押しても返事がなかったものだから…」

と、奥さん。

隣の奥さんは、旦那の両親の介護に明け暮れ、自分も足を骨折し、大変な暮ら しをしてこられた方だ。

僕が礼を言うと、隣の奥さんは言った。

「何でも出来ることあれば言って下さいね。わたし、奥さんに何度も何度も励まされて来たんですから…。」

僕の知らないかみさんの一面を知った思いだった。

時間がない

かみさんはトイレに行く以外は何もしない。(出来ない。) まるで女王様だ。

何かを食べる、何かを飲む、勿論、それを作ったり、冷蔵庫に取りに行ったり、器に入れたり、箸やスプーンを用意したり、食べ終わったらすぐに洗いに行ったり…と、これを朝の出勤の前に、昼の休みに、夕方にと三回もする。

一緒にご飯を食べてはいるのだが、一分と座ってはいられない。

勿論、台所が整理されていないので、片付けながらなので落ち着かないのかも 知れない。

夕ご飯を作る。

食べる。

後片づけをする。

入浴の介助をする。

自分が風呂に入る。

ベッドを整える。

寝かせて治療をする。

明日もあるから、僕も寝ることにしよう。

介護というものは楽しいものだ

介護というものは、なかなか楽しいものだ。

かみさんの場合、トイレとシャワー、衣服の着脱は一人で出来るので、かなりらくだ。

必要なものを彼女の手の届くところに運んでさえやれば、あとは一人でする。 テレビ、ビデオ、CD、クーラーのリモコン、飲料水、薬、お菓子や果物、筆 記用具、体温計、お灸セット等々。

夕方には、ベッドの上で洗濯物をたたんでくれた。

食事が一番世話がかかるかな?

とにかく今は、楽しんでいる。

今日は午後から体がだるかったとか。

体温は三十六度九分。

木曜日からの訪問看護の打ち合わせと下見に来られた。

炒飯と野菜スープは美味しい、美味しいと食べていた。

今週で夏休み

今週で盲学校も夏休みに入るので、朝、出かけてから夕方まで帰らない日は、 今日で最後になる。

今日は娘が来てくれて、昼飯の用意をしてくれるとか。

だから安心だ。

治療の時間がないので、仕事から帰った後の、夕食の準備の前にした。(やっとおなかへの本物のもぐさによる温灸が出来た。)

ケアマネさんが来られた。

□手を抜かない

食事や洗濯など、家事に対して一切手を抜かないでやってきたかみさんに頭が 下がる。

倒れるまでは、僕が朝、起きてくると、ちゃんとリンゴが剥かれ、緑茶が用意 されている。

それが終わると朝食が出る。

食べ終わると紅茶が出る。

夕食だって、買ってきた総菜を並べることなどなく、しかも、毎日違った料理が並ぶ。

洗濯物は、Tシャツもジーパンもいつもアイロンがかかっている。

彼女は、それを仕事を持ちながら続けてきたのだ。

僕もなるべく手抜きをしないで、かみさんの治療と世話に当たろうと思っている。

これまでの借りを返さなければね

今日は訪問看護の日

かみさんは、人が来ると疲れるようだ。

ヘルパーも訪問看護も必要か?

<u>薬がない□</u>

退院してから毎日飲んでいるとん服がある。

それが、明日までくらいしか無い。

次の受診日は三十一日だ。

日赤に電話をかける。

主治医はいないので、受診してもらわないと出せないという。

そんな一□

退院する際にもらえるはずの薬を、主治医が処方箋を書き忘れたのだから、 何とかならないかと訴える。

看護師長に相談してみるという。

しばらくして電話があり、入院していた病棟に用意していますから取りに来

て下さいとのこと。

昼過ぎに取りに行く。

看護師長が出て来て、どうもすみませんでしたと頭を下げる。

入院の追加ということで支払いをしていって下さいとのこと。

会計に行く。

百九十八円です。

えっ!

会計の人も、えっ?

確かめますね。

やはり百九十八円です。

とん服を三十包も頂いたのに、入院費は高額医療があって、一定の額以上は 、市が負担してくれるので、そういうことになったのだろう。

あ一、良かった□

<u>元気がもらえた</u>

今日は娘が来てくれて、昼飯を食わせ、夕飯の用意をしていってくれたので、 大助かりでした。

娘の子供二人も一緒に来たので、しゃべり過ぎたけれど、元気がもらえたと喜んでいました。

もう寝る

寝ていても起きていても、今日は体がだるいという。 足の痛みもあり、少し体温も高い。 (三十六. 九度)

湿度が高く、部屋の空気も重たい。

今日は僕もだるかったほどだ。

今日は二人とも、もう寝ることにする。

ちなみに、今日の夕食は、美味しい野菜の煮物でした。

気分良さそう

今日は久しぶりに晴れた。

暑いくらいだった。

窓を開けっ放しにした。

洗濯物を日に当てた。

全てが気持ちよかった。

昨日の澱んだ空気が流されていった。

かみさんも気分良さそうだった。

昼間、僕がいると、治療が出来るから嬉しい。

早めにシャワーを浴びて、八時頃眠りについた。

九時にモルヒネを飲んで寝た。

洗濯

最近は夜に洗濯をして、台所の中に干しています。

朝、晴れていたら外に出します。

そうしないと、朝は忙しすぎるからです。

今日は別に風呂と台所のマットも洗ったので、まだ洗濯中です。

治療しなきゃ

今朝のお粥は、干し椎茸、乾燥ホタテ、煮干し、根昆布を一晩浸した出し汁で お粥を作りました。

チョー贅沢お粥です。

お昼は、また、そうめんをご希望なのかな?

僕も麺好きだからいいんだけれどね。

気功の教室を終えて家に帰り、次は、かみさんの治療です。

何しろ、現時点で治療をするのは、僕の鍼灸とビワの葉と種だけなのですからね。

スッポンは免疫力というか体力を上げるためなんですよ。

さぁ、ファイト□

夕ご飯

娘が作ってくれたシチューを冷凍していたので、それを解凍し、少し煮込んで 頂きました。

漬け物は千枚漬け。

それに、夕べ出汁を取った干し椎茸などを煮てみました。

ホタテも昆布も美味しかったよ。

でも、かみさんは、ほんの一口二口。

昼にオヤツに食べたプリンが多かったとか。

やれやれ。

ベッド交換

和気の治療を終えて、太田屋さんでそうめんを買い(まだあるんだけれどね) 、家に帰りました。

朝干した洗濯物を取り込み、第二段を干しました。

お昼はそうめん。 (また?飽きない?)

生姜をすり、白胡麻、きざみ海苔、ねぎの薬味をそろえて、はいどうぞ。

パイナップル一切れ、ミニトマト二つをそえました。

少し休憩して、また和気に行って治療して、そのまま大黒薬局と千里馬薬局 に行って、四時半に戻ってきます。

介護用品のお店の人がマットの交換に来るからです。

かみさんは、昔から煎餅布団に寝ていたので、低反発マットだと、かえって腰 や背中が痛くなるんだよね。

という訳で、マットを堅い物に換えていただきました。

今日の夕方から、体からえらいという。

寝ていても起きていてもえらいという。

痛みではなさそうだ。

タご飯のおかず(和気特製野菜たっぷりコンソメシチュー)と、わかめとキュウリの酢物は、わりと沢山食べていたので大丈夫だとは思うが…。

忙しかった□

今朝は忙しかった。

朝、仕事に出たあと、昼休みには帰れないので、おにぎりでも作っておこう と思ったが、朝食に昨夜のご飯でお粥を作ったのでご飯を炊いていない。

朝食の後、おにぎりをコンビニに買いに行き、休む間もなく家を飛び出した。

期日前投票

今日、かみさんを車椅子に乗せて、娘の運転で、区役所に行って期日前投票 に行ってきました。

退院してから外に出るのは初めてです。

行って来ただけなのに疲れたみたいです。

期日前投票をする人が増えたのか、まるで投票所のようでした。

病気をおして車椅子に乗ってでも投票に行って自らの意思を表わそうとするか みさんは大したものです。

変更

今日は、イカ焼きにしようと思っていた。

中村公園の参道には八百屋さんや魚屋さんがある。

イカ焼きと一緒に魚の塩焼きもしたかった。

ところが、行ってみると魚屋さんのシャッターが降りている。

やむを得ずスーパーに行く。

と、刺身の盛り合わせが目に飛び込んできた。

マグロ、タイ、イカ、サーモン…。

よし、手巻き寿司にしよう□

あさりの味噌汁も。

根生姜(酢漬け)も買って帰った。

何か今夜は魚介類一色だ。

デザートはパイナップルにした。

ご飯を炊いて、酢飯にして、おにぎり海苔を用意して、今夜は手巻き寿司で

ーす。

白血球が落ちている時はなま物は禁じられていたので、久しぶりのなま物に 、かみさんも喜んで食べましたよ。

あさりの味噌汁が美味しいって□

腰が痛い

昨夜は腰が痛くて寝れなかったようだ。

朝食後に飲む薬を朝の四時に飲んで、それでも痛みが治まらないので、五時にとん服をのみ、明け方やっと熟睡したとか。

いつもは七時に僕が起きると起き出して来るのに、今日は、それも知らずに七 時半まで寝ていた。

「久しぶりに痛みのレベル四だったわ。」 痛むのは腰ではなく、仙骨のようだ。

体重

昨日の体重は 40.5kg。

着ている物によっては少しの誤差はあるので変化なしというところか。 もう少し増えてほしいものだが…。

やっと出た□

うんちでたよ。

薬の副作用で便秘というのがあるので、本人にとっては一大事なんだよ。

体力的に

少し弱っている。

冷房はつけているが、元来、寒がりなので、すぐに消す。

とたんに汗が吹き出てくる。

これが体力を消耗させるようだ。

よし! 明日の昼はウナギにしよう!

体力を消耗させてはならないからね。

□日本人だなー

今朝は元気に起きました。

朝は、いつもはお粥を作るのですが、今日は梅干のお湯づけでいいというので、ご飯の上に梅干と昆布、そしてわさびを添えて、花かつをの出し汁をかけて、 上からきざみ海苔を振りかけ、お茶漬け風にして食べました。

それに白菜の漬け物です。

何か日本人って感じ。

さて今回は

明日、いよいよ二回目の抗ガン剤点滴をします。

なるべく朝早く行って、採血とレントゲンをしてから、四時間の点滴です。

とは言っても、入院していた時は三時間少しで終わったので、そんなものかも 知れません。

先回と同じようなら、当日は元気で、三日目くらいに一番ひどく嘔吐に悩まされ、一週間くらいで一番免疫力が落ち…という感じでしょうが、さて、今回は…?

守る

守るというのは、盾になるということ。

盾になって自分は傷ついても守り抜くというのが守るの意味。

サッカーのゴールキーパーは、体のどこを使ってでも自分のゴールを守り抜く

自分の身の安全なんかは考えない。

自分の手に負えなくなったら手を引く、自分の立場が危うくなったら守るのを やめるというのでは守るとは言えない。

戦前、侵略戦争反対、国民主権の声を命をかけて守り抜いた宮本顕治や小林多喜二。

太宰治の書いた「走れメロス」。

いざとなったら保身を考え、或は盾を放棄するのであれば、最初から守るなん て言わないことだ。

本当に盾になる守り方こそ愛であり友情なのだと思う。

僕は、何かに対して、そんな守り方ができるだろうか。

しているだろうか。

青空

朝から青空です。

タベ洗濯して裏に干していた物を表の陽の当たる場所に干し直し、朝御飯を 食べ、出かける用意をして娘の迎えの車を待っています。

今日は暑くなりそうです。

診察券を出し、三十分位待ち、採血とレントゲン撮影をして一時帰宅してきま した。

検査結果が出るのに一時間ほどかかるので、車椅子のまま座っているのは辛そうなので、横になるために帰って来たという訳です。

それにしても、家が近くて、尚かつ車椅子ごと乗れる車と運転手がいて幸せで すね。

今から点滴

診察が終わりました。

ガンは退院時の三分の二くらいに小さくなっているとか。

但し、白血球の立ち上がりが弱く、今日でも三千五百しかなかったので(普通は四千~八千くらい)、普通は三週に一度の点滴だけれど、四週に一度の点滴にしましょうということだった。

点滴は、痛み止め三十分、吐き気止め三十分、抗ガン剤二種類、九十分と六十分、最後に水を流して終わりとなる。

さあ、長い治療が始まった。

病院にて

かみさんが点滴しているベッドの横で、イヤホーンから流れる夏の甲子園愛知 大会決勝戦を聴きながら、する事もないので、ただ座っていると、知らないうち にうたた寝をしてしまった。

病院の冷房は強い。

娘に羽織る物を持ってきてもらったが、膝から下は何ともならない。

体を温めようと、ココアを飲みに外に出た。

高校野球は名電が中京に勝った。

少し汗がにじみ出てきたので、病室に戻った。 今日は点滴に時間がかかっている。



そろそろかな?

三十一日に抗ガン剤の点滴をしたから、今日で二日目。

前回は三日目、四日目が嘔吐がひどかったから、そろそろかなと思っている。

一週間後くらいが一番免疫力が落ちるから、手洗い、うがい、マスクが絶対に なる。

うまく乗り越えてほしいものだ。

抗ガン剤というのは、体全体の機能を落とすようになっているので、そろそろ体が反応を始めだした。

だるくて辛そうだ。

自分では一生懸命に何かを食べないと、と思って食べようとするのだが、余り 食べられないようだ。

隣の奥さんが下さったコーンスープを飲んでいた。

それに赤いメロンもね。

ということは、甘系がいいのかな?

僕は食欲が進むようにと少しピリ辛系を作る傾向にあるのかな。

う~ん、明日からのメニュー考え直そうかな。

整理整頓

一回一回の食事作りだけでなく、食後の後片付けをして、食事を作る前と同じ 状態にする(ゴミも全くないようにする)のは楽しいことだ。

僕が今までどんなに、やりっ放し、作りっ放し、洗いっ放しであったことがよくわかる。

仏道修行においても、食事の世話をすることが最高の修行として尊ばれているようだが、精神修養、人間作りとして家事をさせて頂いていることに感謝しでいる。

食欲低下

どちらにしろ、そんなに食べられないのだが、少しずつ吐き気が出てきている ためか、軽いものにしか手が出ない。

サラっとしたお湯づけにレタスのサラダくらい。

ねっとりした男前豆腐はだめのようだ。

カロリーメイトゼリータイプで栄養補給かな?

痛みのコントロールは薬に頼っているが、昨日、その薬を飲み忘れたようで、 夕べは寝れずに苦しんでいた。

体が辛くて寝ていることが多いので、忘れたのだろう。

今日から、

「薬飲んだか?」

の声をかけることにしよう。

ヘルパー犬

かみさんがベッドの上でつぶやく。

「あっ、タオルがない。」

僕はガバッと起きあがってタオルを持ってくる。

「のど乾いた。」

冷蔵庫へ飛んでいく。

「ショウガが欲しい。」

食事中であろうと、僕は台所へ行って、ショウガをすって来る。

まるで僕はヘルパー犬だ。

何でも出来るヘルパー犬だ。

自分の意思ではなく、ご主人様の意思に従ってテキパキ動くヘルパー犬だ。 それが今の僕の大事な大事な仕事なのだ。

何しろ、これまでの何年間も、彼女が僕のヘルパー犬だったのだから、半年や 一年では返せないほどなのだ。

奥様がお呼びだ。

「はい!奥様□」

今回の抗がん剤派は

今回の抗ガン剤の点滴から四日が経ちましたが、今回は嘔吐はないようです。 ただ、胃腸の動きが減退し、便秘と食欲不振が強いようです。 痛みも軽くはならず、辛い夜が続いています。

それなりに

今回は吐き気はないようだ。

朝も昼も、食事は少ないけれど食べている。

食欲がない訳ではない。

お昼に帰ったら、

「今日、お芋さんと小さいジュース二本、飲んだよ。」 だって。

足も少し軽くなったらしい。

これからは、感染症対策だ。

かあちゃんごめんね

水屋の中の殆ど使っていない食器を処分した。

洗濯場の棚の上にある訳の分からない袋物を処分した。

日常生活の中での不用品って沢山あるんだね。

いつか使うつもりで取っておいて、結局使わないものは思い切って処分してい こうと思っています

かあちゃん、ごめんね。

今はいいけど

今は盲学校が夏休みなので、火曜の午後は家に居られるけど、夏休みが終わったらどうなるんだろう?

今日も、治療を終えて買い物して家に帰れたのが十一時半。

それから素麺ゆでて、昼飯食わせて、洗い物をしていたら十二時半になって いた。

盲学校が始まったら、遅くとも十二時半には出ていかないと間に合わない。 休む暇もない。

休もうとすると洗い物は学校から帰ってからになる。

それでも何とかしなければならないのが人生だ。

魔の火曜日になりそうだ。

そういえば、月曜も同じだった。

治療を終えて家に帰り、飯を食わせて、十二時半には熱田に行ったんだ。 ま、どちらにしろ、スーパー和気さんでいる以外にはないようた。

子供?

日記を書く精神的余裕がなかったので、少しさぼりました。

二人とも元気です。

かみさんは、外に出ていけないのと足腰の痛みで

「もういやだ!」

と、時々悲しそうですが、特に落ち込んではいません。

美味しいものを食べさせると機嫌が直ります。(子供?)

ま、そんなところです。

不幸せな人

いまを楽しめない人は悲しい。

どこに行っても、何をしていても、あそこはこうだった、あの時はこうしていたなどと、他の場所や済んだ時間と比較して、今を楽しめない人は悲しい。

その場、その時に楽しめない人が、いつ、どこに行って楽しめるというのだろうか。

今を幸せと感じて生きられない人が、どこで幸せになれるというのだろうか。 条件や環境のせいにして、つまらないつまらないと言って、そんな人生が続いて、いつ楽しい時が、幸せな時が来るのだろうか。

自分がその場に入り込んで楽しまない限り、幸せにならない限り、不幸な人生は続くだけなのだと思う。

腰が痛いよー

先回、抗ガン剤点滴の時、夜、腰が痛くて眠れない旨の訴えをし、夜のモルヒネを倍の量にしてもらったのに、痛みのコントロールは出来ていない。

夜、何度も起きて座っている。 痛くて寝ていられないそうだ。 僕も寝不足になっちゃうよー。

結局僕が

あれから二週間、今日は診察の日です。

今日は診察だけなので、早く終わると思います。

昨日の夜、餃子が食べたいというので用意していたら、今日が診察日てあった ことを思いだし、餃子は今日に延ばしたのだが、すみさんは十二個ある中の三個 を食べただけで、残りの九個は、結局、僕が食べるはめになってしまった。

あ一、腹一杯!



<u>夜の痛み</u>

痛い時はとん服を二袋飲んでもいいよという医師の話だったが、かみさんは一 袋ずつしか飲まない。

だから夜の痛みは変わらないようだ。

寝ては痛くて起こされ、薬を飲んでは寝るという繰り返しだ。

寝る前の治療をしてあげないといけないかな?

明日は陶芸の日

先月は行けなかったから、明日こそ行くぞ。

一日中は無理だけれど、半日なら行けると思う。

午前中の二時間を集中して、お地蔵さんを造るぞ。

祈りをこめて!

お久しぶりです

かみさんの状態は、さほど変わりはありません。

元気というか、食っちゃ、少し起きて寝てるというか。

ただ、仰向けにしか寝れなかったのが、片方だけは横になって寝れるようになりました。

歩くのも、うちの中の狭い範囲でちょこちょこ歩いています。

でも、まだ歩くリハビリは、すぐに足が痛くなるので無理かも知れません。 ぼちぼち前進している感じです。

あんしん

あなたたといると ほっとします

あなたを思うと 心が温かくなります

あんしんって 心が安らぐことなんですね

あなたといると 不安も畏れも 無くなっていきます

あんしんって 最高の しあわせなんですね

<u>明日です</u>

明日、第三回目の抗ガン剤の点滴です。

明日の検査の結果に期待しています。

それによって、僕なりの治療への取り組み方を変えなければなりません。 とにかく、明日です。

三回目の抗がん剤点滴

血液検査とレントゲン検査を終えた後、診察遅れて、抗ガン剤点滴は十一時半から始まり、三時四十五分に終わりました。

会計を済ませ、薬を頂いて、タクシーで四時半に帰ってきました。

一日がかりの行事は無事終わりました。

腫瘍マーカー

体内のガン細胞の働きを診るのに、腫瘍マーカーというのがあるそうだ。 正常な人の値は0~五くらいで、十を越えるとガンを疑うらしい。

かみさんは、五月の段階で百を越えていた。

今日の検査の結果は六十八打とか。

肺の影も小さくはなっているが、ガン患者には変わりはない。

もう少し、免疫力を付ける対策をとらなくてはならないと実感した。

食べれない?

少し吐き気がするから余り作らなくていいよ というかみさんの声。

きゅうりともずくの酢もの、オニオンスライスに花鰹をかけたもの、簡単オムレッを作った。

「ご飯はお湯づけ? それとも海苔巻いて食べる?」

「海苔巻いて食べようかな。」

それに、友人から戴いた 椎茸の煮物を出した。

さすがにオムレツは食べれなかったけれど、そのほかのものは、結構食べていた。 吐き気がするから食べれない?

うそ-□

吐き気のために

やはり吐き気はあって、今朝はトマトを二切れ食べただけだった。

この分だと果物しか無理かな?

消化の良い栄養のあるものって何だろうね。

最近はプリンもヨーグルトもゼリーも殆ど口にしないしね。

でも、二三日のことだけどね。

元々食べることが好きな人だからね。

お昼は桃を二切れ、二時半に梨二切れを食べ、飲み物としてポカリを飲んでいます。

晩ご飯は食べられないので、あったかご飯に海苔を巻いて梅干し付けて食べる そうです。

料理人の腕が見せられないよー□



えらいよー、えらいよー

昨日あたりから少しずつ食べれるようになってきましたが、まだほんの一口二口です。

痛みは相変わらずで、夜中に眠れないと、日中は辛そうです。

今日は退院してから一番状態の悪い日でした。

胸の中、背中、腰、太ももと、ガンに関係するところの全てが痛んで、寝ても座ってもおれず、「えらいよー、えらいよー」と、声を出してのたうち回っていた。

鍼をし、手を当て、撫でさすり、気を入れ…と、僕も夕食を作る時間がないほどでした。

このままだと病院に行かなくてはという感じだったが、夜の七時ごろになって、薬のお陰もあって、何とか持ち直したようでした。

あ一疲れた。

明日は元気で起きられますように□

心細さ

昨日に比べれば割りと良さそうです。

朝、少し胸の中が痛んだようですが、それも治まり、昼はうどんを食べました

かみさんの分は少なめにしたので、ちょっと少なかったと言って、あられを食べていました。

でも心細さの感覚は強いようです。

この分だと、学校を辞めた方が良いかも知れません。

仕事にならないような気がします。

少し様子を見よう

盲学校の非常勤講師の時間帯が、毎週火曜と水曜の午後なのですが、その火曜日が、かみさんの抗ガン剤の点滴と診察に当たり、月二回は休まなければなりません。

そうなると授業が無責任になるので辞めた方が良いのではないかと思っていま した。

しかし、今月の終わりの抗ガン剤が一クールの最後で、次はどうなるかわかりません。

主治医の担当曜日が火曜日なので、どちらにしろ診察は火曜日になるのですが、第二クールがあるのか、あるとしたら何時からなのかもわかっていない段階から慌てて辞める必要もないかなーとも思いました。

という訳で、今日、教頭に話そうと考えていましたが、とりあえず、今日は保留にします。

<u>生きる意味</u>

「明日、退院して初めてだね、僕が朝、出てから夕方まで帰らないのは。」 「えー、やだー。」

「昼は、娘、来てくれるんでしょ。」

「うん。」

「何か、最近、弱気だよね。どうしたん。」

「死ぬのが怖くなったんかな。」

「何言うてるん。影も小さくなってるし、腫瘍マーカーの値も少なくなって るし、あと二十年は生きるよ。」

「でも、寝てるか起きてるかしかできないなんて、もうイヤだ。」

「じゃー、何かしようか。何がいい?」

かみさんは、最初、ぬりえをしようかと言っていたんだけど、急に親指と人 差し指で四角形を作って

「これくらいの千代紙(色紙)があるでしょう。あれで折り鶴つくろかな。」 「自分の願いこめて?」

「ううん、それはいいわ。広島に。平和の願いこめて。それくらいなら出きる

かな。」

ぬりえにしようかと言っていたみたいだが、やはり、自分の楽しみではなく 、何かの役に立ちたいんだな。

生きている意味を実感したいんだな。

明日、何処かて手に入れて来なくてはね。

天然物のスッポン

十日から二週間に一度、スッポンスープを買ってもらってくるのだが、今回の は養殖じゃなく天然物だということだった。

さすがに違っていた。

コラーゲンの量も肉の美味しさも格段に違うのだ。

いつもは肉は少なく、しかもぼろぼろに崩れてしまって、余り食べられないの だが、今回の天然物は大きな肉やコラーゲンの塊がドンと付いている。

今までは食べられなかったが、今回はしっかり全部食べてしまおう。

お誕生日おめでとう□

今日はね、かみさんの誕生日だよー□ おめでとう□ この三ヶ月はしんどかったねー。 まだまだ、これからだけどね。 ファイトだね。

スライドショー

僕とかみさんは、気功の仲間たちと一緒に「緑の風にゆられて」というグループを作り、百三十回以上(十年以上)にわたって、京都、奈良、東海三県のあちこちに出掛けて来ました。

その写真のネガが電子ネガとして残っています。 (勿論、デジカメになってからの話ですが。)

そのネガの中から、素敵な風景写真や仲間の写真をマイピクチャに入れて、パソコンの画面上でスライドショーとして、かみさんに楽しんでもらっています。 こんな財産があるなんて、幸せな僕たちです。

食事? 餌?

食事に関して、かみさんが心掛けていたことがある。

それは、食事は一緒に食べる、

やむを得ず一緒に食べられない時でも、一緒のテーブルに座って、話をしたり、 お茶を飲んだりするというものだった。

かみさんは、食事は餌ではないことを知っていたのだ。

食事は作って与えればいい物ではない。

僕たち人間の食事は餌ではない。

確かに命の糧には違いないが、人間らしく、楽しみながら食べる食事は、本当の意味での生きる力になるのだ。

時間がなければ、例えおにぎりでも構わない。

子供には親が、病人や介護を必要とする人には家族や介護をしている人が傍にいて、出来れば一緒に食事を食べて欲しいものだ。

それが、何よりのご馳走なのだから。

餌のように与えておけば良い訳ではないのだから。



最近のかみさん

先回の診察で痛み止めの薬をほぼ二倍の量に増やしてもらったお陰か、痛い痛い、辛いからもう嫌だ□ なんてことは無くなってきました。

昼間も起きている時間が長くなり、体がしんどいと言ってすぐに横になること も少なくなりました。

テレビの一時間ドラマも見ようとする力が付いてきて、体重も四十二kgまで戻りました。

入院した時が四十二kgたったかな。

四十kgを切ったこともあり、退院後も四十一kgあたりをうろうろしていたのでね。

元気になってきています。

その分 甘えん坊になりましたけれど…。

こころは 今日も 晴れ!

西の空から

黒い雲が

広がって

土砂降りの雨が

叩きつける

日もあれば

朝から 霧が立ち込めて 近くのものさえ 見えなくさせる 日もあるさ

枝を揺らす 大きな風が 吹きつけて 巻き上がる砂埃が 行く手をはばむ 日もあれば

降り続く雨に ため息でがいる がいして がいる がいる ある ある

でもね これだけは 覚えておこうね

どんな日でも

こころは 今日も 晴れ□ ってね

自分の心に

声かけるんだよ

こころは

今日も

晴れ□

弱い方がいい

人間 弱い方が いい

体には 病気を 抱えている方がいい

他人の傷みが わかるから

心には悲しみを 抱えている方がいい

他人の傷を 労れるから

悲しみに共感でき 慈しみの心で生きている

弱い人間だから そう出来るんだ

弱い人間は 弱肉強食の 競争社会の中では 置いてきぼりに されるけど

でも 僕は 弱い方が いい

弱い人たちが 生き生きと 生きていける社会を 作りたい

コスモス

チューリップと水仙の球根の入ったプランターが淋しいので、いつも行く花屋 さんに行ってコスモスの鉢を買ってきました。

花屋さん

「水、沢山いるよ。何処で面倒見るの?」

その花屋さん、治療院の近くなので、僕が最近余り居ないことを知っていたので心配になったんだと思う。

「自宅て見ますから…。」

「それならいいね。」

だって。

プランターの中の球根を掘り出して、そこにコスモスを植えました。 玄関先が少し華やいだかな。

明日は点滴

ークール最後の抗ガン剤点滴の日です。

ここ二、三日、元気がなく、食欲もありません。

明日、点滴が出来るか心配しています。

明日の朝は、八時過ぎに出掛けます。

血液検査とレントゲン検査をして、問題がなければ点滴です。

一日仕事なのに、今の様子では辛いかも。

検査終了

採血とレントゲンが終わりました。

血液検査の結果が出るまで一時間ほど待ってから診察です。

呼ばれるのは十時半くらいかな?

残念□

二週間前の検査で、白血球が千四百に下がっていて、この二週間で戻るだろうと思っていたのに、二千九百までしか戻ってなくて、今日の抗ガン剤点滴は見送りになりました。

また二週間後です。

でも肺のガンは確実に小さくなっていますので、抗ガン剤は効いているようです。

点滴の時は、夕方の四時過ぎまでかかるので、お昼のパンとおにぎりを早め に買ったのに一。

大事にしてね

大事にしてね

あなたの命を 大事にしてね

あなたの体を 大事にしてね

あなたの心を 大事にしてね あなたの気持ちを 大事にしてね

あなたの体験を 大事にしてね

あなたの生活を 大事にしてね

あなたの日々を 大事にしてね

あなたの師と友を 大事にしてね

あなたの時間を 大事にしてね

あなたの人生を 大事にしてね

全ての縁あるものを 大事にしてね

<u>打ち破ろ</u>

自分の壁を 打ち破ろ

自分の殻を 打ち破ろ 自分の弱さを 打ち破ろ

自分の心を 打ち破ろ

周りの状況を 打ち破ろ

自分の生き方を 打ち破ろ

とにかく 自分を 打ち破ろ

孫悟空になりたい

髪の毛を一本抜いて、フッと息を吹きかけると僕の分身が出来る。

そうやって何人もの僕を作り、僕を必要としてくれるところへ行きたいものだ

体は一つしかないからねー。

悲観しないこと

僕は、二十代前半に進行性の病が見つかり、四十才位までしか生きられないだ ろうと言われました。

遺伝性の病なので結婚はするな、子供は作るな、とも言われました。

二十代後半には鬱病にもなりました。

そんな時でも、かみさんは、何一つ、ああして欲しい、こうして欲しいとは言いませんでした。

今のような僕になることを信じていたのがも知れません。

お陰で、僕は、物事を悲観的にとらえることがなくなりました。

何に対しても、さほどプレッシャーを感じなくなりました。

どんな状況に追い込まれても、楽しく、淡々と出来るようになりました。

人生を生き抜くコツは悲観しないこと、悲観する出来事に対して、のめり込まないこと、そのことはそのこととして、その中に、或いは別のことに楽しみを見つけ出し、工夫して楽しむことなんだと思います。

悲観的なことにのめり込み、そこから心が抜け出せないから辛く、苦しくなる のです。

自分で自分を追い込まないこと、自分を自分で許すこと、許して受け入れる こと、自分を愛すること、大事にすることが、僕の生きるコツなのです。

初めての外食

今日ね、金曜日はね、娘が来てくれて、かみさんのお昼を用意してくれるんだけどね、今日は近くのうどん屋さんに外食に行ったんだって□

この前までは車椅子ごと乗れる車で移動していたんだけどね、前の診察から、 普通の車の座席に乗って、車椅子は後ろに積んで、病院の中は車椅子だったんだ けどね、だから、少しは歩けるようになっていたのでね、家もお店も車横付け でね、歩いて移動して行けたんだって□

僕は車に乗れないから、行くとしたら車椅子を押して行かなきゃならないけどね、娘が車で良かったなって思いました。

外に出られて、かみさんも嬉しかったろうね。



今の状態

先回の診察の時に、安定剤ももらって飲んでいるお陰か、以前のように夜中中 痛くて眠れないというようなことは無くなったようだ。

ただ、座っていると太股が痛んでくるので、長くは座っておれない。

でも最初の頃に比べれば雲泥の差だ。

テレビを一時間くらいは見ておれるからだ。

一時出てきた食欲は余りない。

本人は食べていると言ってはいるが、作っているのは僕なのだから…。

少ない食事の中で、食品の数を多くするのは大変だよー。

<u>ひろがれ〜</u>

ひろがれ~

気持ち ひろがれ~

元気 ひろがれ~

勇気 ひろがれ~

のぞみ ひろがれ~

優しさ ひろがれ~

しあわせ ひろがれ~

いのち ひろがれ~

みんな みんな 空いっぱいに ひろがれ〜

足 出せるかな

ねぇ 君 足 出せるかな

水たまりがあるよ 泥が跳ねるよ

でも 足 出せるかな

溝があるよ 落ちるかも知れないよ

でも 足 出せるかな

闇が迫ってくるよ 前が見辛くなるよ

でも 足 出せるかな

人としての尊厳をないがしろにする言葉が 飛び交っているよ 心が傷つくよ

でも 足 出せるかな 明日が見えなくなって 足が震えて 立ちすくむよ

でも 足 出せるかな

ねぇ 君 どんなに辛くても どんなに悲しくても 足 出せるかな

痛いよー□

最近、足の痛みが強くなり、昼と言わず夜と言わず、とん服を飲んでいます。 飲む量も最初の頃の二倍は飲んでいるのだけれど、痛みは強くなっている感じ です。

明日、抗ガン剤の点滴なんだけれど、これで一クールが終わりで、さて、その あとどうなるのかな。

先週の金曜日に、お風呂の中に入れる椅子を購入して、土、日と腰湯程度です が湯船に入れました。

やはり、シャワーとは違って嬉しそうでした。 いいこともあるんだよ。

点滴

+-辞から点滴が始まりました。

三十分、三十分、九十分、九十分の四つの点滴なので、まだまだかかります。 白血球は三千五百だったので、ぎりぎりだけれど点滴をしています。

+-時に始まった点滴は三時半に終わりました。

今日は割と順調でした。

あと一ヶ月ほど、感染症に要注意です。

清潔に清潔に。

百歳になっても使命に燃えて

僕が気功の道を深めて来ることが出来たのは、仏教、中でも般若心経に触れる ことが出来たからですが、それを導いて下さったのは、今年の11月で百歳になら れる松原泰道老師です。

僕が約20年前に気功を始めた頃、ある通信教育の会社からダイレクトメールが 送られてきました。

「南無の会、辻説法集(カセットテープ)」というものでした。

本来、僧の任務というものは、釈尊の教えや仏教的な生き方などを民衆に広めるために、辻説法をして回ることで、その活動を宗派を越えて喫茶店などで始められたのが南無の会で、その南無の会の会長さんが松原泰道老師だったのです。

僕は、そのカセットテープ集を購入し、釈尊の教えや仏教的な生き方に導かれていきました。

その後も機会をみては松原泰道老師のお話をテープで、或いは直に聴かせて 頂き、著作も読ませて頂きました。

何も知らない僕が言うのは生意気ですが、松原老師のお話や文章は理論的思想的な深さから言ってピカーに思いました。

霊魂などという神秘的な部分や信じれば救われると言ったようないい加減な部分は一切なくなく、現実の社会の中で、自らを主人公として自らの人間性を豊かに開花させるには、如何なる生き方をすればいいのかという極めて哲学的な内容を、様々な方の詩などを引用されてお話になっておられ、全てが腹に落ちるのでした。

六十才、六十五才で一線を退き、あとは余生といった生き方ではなく、六十才から一線に出て、百才になられても、尚、一線において釈尊の教えや生き方を伝え続けられておられる松原泰道老師は、やはり、僕に生きる意味を教えて下さる導きの師なのです。

本当の強さ

昨日のボクシングを見て感じた。 本当に強い人は威張らない、吠えない、粋がらない。 弱い犬ほどよく吠える。

愛のない強さは偽物だ。 内なる強さこそが人間としての強さなんだ。

抗ガン剤の副作用

抗ガン剤の点滴の後、三、四日が一番調子が悪い。

今回は余り嘔吐はないが、気持ちが悪くて食欲がない。

腸の動きが落ちるので便が出なくなる。

おなかも張ってくる。

今を乗り越えると楽になるんだけどね。

笑顔は内なる強さだね

笑顔は いいね

周りの人を 明るくさせる

笑顔はいいね

悲しいことを 吹き飛ばす 生きる勇気を 与えてくれる

笑顔は いいね

自分の過去を みんな後ろにやって 笑顔をつくる

笑顔は いいね

笑顔は 自分も周りの人も みんな元気に させるから

笑顔は いいね

笑顔は 内なる強さだね



出てきました

以前、カメラ屋さんで、昔の写真のネガをCDにしてくれるというので、ネガを探してCDにしてもらったことがあります。

一九九四年の夏からウォーキングの会を始めたのですが、その初期の頃のネガが無く、もう捨ててしまったんだと残念に思ったものでした。

ところが、昨日、そのネガが出てきたのです。

緑のきれいな曽爾高原、今も我が家の仏壇の上にある薬師寺の薬師如来、唐招提寺の千手観音など、お気に入りの写真が沢山あるので、発見した時は、飛び上がるほど喜びました。

早速、CDにしてもらいます。

いま 凝っていること

主婦の僕としていま凝っていることがある。

少し大きめの片手鍋に一杯の出しを作ることだ。

ミネラルウォーターを鍋一杯に入れ、そこに茶碗蒸し用の小さな干し椎茸を五、六個、大きな出し昆布を幾つかに切ったもの、出しじゃこを数匹を入れて一晩 寝かせる。

それを小分けして冷蔵庫に入れておく。

その出汁を使って味噌汁を作ったり、煮物を作ったり、肉じゃがを作ったりしているのだ。

今日は、それを使って「きのこスパゲティー」を作った。

その出し汁にバターと鶏がらスープの素を少し入れて、数種類のきのこを煮 こみ、ゆでたスパゲティーの上からかけた。

うまかったよ。

勿論、出汁に使った椎茸と昆布は、醤油とみりんを入れて煮て食べている。

<u>庭のコスモス</u>

今朝、資源ゴミを出しに行ったら、庭のプランターに植えているコスモスが綺麗に咲いていた。

一度咲いたものが枯れ、次のが咲いたんだよ。

診察

抗ガン剤点滴後の嘔吐、便秘も乗り越えて二週間。

今日は診察です。

採血の結果が気になります。

白血球が…。

できるって

できるって

大丈夫だから やってごらんよ

わたしは やれる

必ず

できる

そう自分に 言い聞かせて やってごらん

必ず できるから

大丈夫だから やってごらん

君なら

今後の予定

白血球は二千五百だった。

彼女の場合、二週間では戻らないので、まだ下がるかも知れない。

一応、一クールが終わったので、十一月一日にペット検査をして、ガンの広がり(狭まり)の状態を診ることになった。

その上で、六日に診察をして、今後の方針を決めることになった。

とにかく今は感染症にかからないこと、風邪を引かないことに注意をはらわなくてはならない。

シャンとして

今週から11月に入ります。

体も心もシャンとして、少し気持ちにエネルギー入れて、日々を充実させなくっちゃ!

夕日

僕が高校生まで暮らしていたところは、西が海に面していたので、夕日は海に 沈んでいた。

しかし、今の名古屋の街では、夕日は家の屋根の向こうに沈んでいく。 街の子は、これが心の風景になるんだろうか。

明日はペット検査

明日はペット検査です。

十一時四十分に行って、ブドウ糖の注射をして、五十分ほど待って、一度トイレに行ってから検査です。

検査の時間は約二十分。

それから約三十分安静にしてから解放されます。

検査がうまくいかなければ、もう一度やり直しになります。

うまくいって、約二時間の検査ですが、六時間前から食べてはいけないので、朝食は抜きで、口に入れられるものは水かお茶だけです。

だから、明日は午後の二時半か三時くらいまで何も食べられないのです。(可哀想)

他所に転移していなければいいけどね。

始まりました

十一時四十五分、ペット検査が始まりました。

注射をして四十五分間、待機です。

放射線の出る物質を注射したので、個室に閉じこめられています。

僕はパンでも食べよかな。

終わりました

検査は一時過ぎに終わりました。

放射性物質が体内に残っているので、本来なら、後三十分ほど個室にいなければならないのですが、彼女が辛そうなのを見て、そのまま帰してくれました。

検査料は二万二千九百円でした。

検査結果の日

先日行ったペット検査と今日の時点での血液検査とレントゲン検査の結果は? 検査の結果によって、今後の方針を決めます。

診察は十時からです。

結果発表、そしてこれから

五月の末に肺ガンと診断され、六月に入って入院して以来、放射線治療と抗ガン剤点滴の一連の治療が終わり、その結果が知らされた。

原発部である肺の部分、転移部である首の骨、首のあたりのリンパについては 効果は出ているらしい。

ただ、骨盤部への転移は今のところ効果は出ていないという。

これ以上同じ抗ガン剤を使っても殆ど効果はないとのこと。

放射線は一度当てたところには二度と当てられないという。

しばらく今のまま痛みのコントロールをしながら様子をみることになる。

つまり医療行為としては何もしないということだ。

次に抗ガン剤をする時は別の種類の抗ガン剤になるのだが、そのためにも体力を付けることがこれからの仕事になる。

自分でする治療は、お灸、ビワの葉療法、高麗人参入りのスッポンと僕の手当 というこれまでの治療を続けることになる。

さあ、ある意味、今からが僕たちの闘いの始まりかも知れない。

痛みを抑えるモルヒネは飲み薬から貼る薬に変わった。

効果があれば良いのだが…。

目標の設定

目の前にある問題を解決するために何かの目標を決める時、その問題を解決するだけの目標設定では問題は解決できない。

うまく行ったとしても目標の七槍、八割程度の達成になり、目標の十割は達成できないだろう。

だとするならば、設定する目標を二割、三割高くして、そこを達成するために は如何なる取り組みが必要なのを考え、高い目標に向かって進むべきなのだ。 それてやっと当初の目標が達成できるのではないだろうか。

試験にしろ、病気の治療にしろ、自分の趣味にしろ、悩みの解決にしろ、全て に共通するテーマだと思う。

今朝は忙しかった

いつもは夜に洗濯をし、裏の軒下に干し、朝になってから表の日当たりの良い ところに干し直すだけなんだけれど、夕べは洗濯物が少なくて、今朝になってか ら洗濯をしたので、余分な仕事が増えてしまいました。

また、二週間に一回ほどのスッポンと高麗人参の煮込んだスーブを一回文ずつ に小分けして冷凍保存する仕事、更に、干し椎茸と出し昆布を一晩水につけて作 った出汁を、これまた小分けして保存する仕事などが重なったのだ。

勿論、普段通りに起きて、朝飯(わかめご飯、ほうれん草のお浸し、シジミの味噌汁、バナナと牛乳の枇杷の種の粉末入りジュース)を作り、食って、洗って、九時には治療に出かけたよ。

今日は昼からは岡崎で気功塾です。

まるく まぁるく

まるく

まぁるく

いのち

まぁるく

こころ

まぁるく

からだ

まぁるく

わたしに

まぁるく

あなたに

まぁるく

みんなに

まぁるく

今日を

まぁるく

まるく

まぁるく

お月様のように

お日様のように お空のように

まるく まぁるく

おおらかに ひろく

おおらかに ひろく

両手いっぱいに 広げてさ 心を 空に遊ばせて

おおらかに ひろく

上を向いて あーって 長く 声出して

おおらかに ひろく

指一本 延ばしてさ 大空に 大きな

字を書いて

おおらかに ひろく

過去を みーんな 受け入れて

わたしを みーんな 受け入れて

あなたを みーんな 受け止めて

おおらかに ひろく ひろく ひろく

やさしをありがとう

やさしさを ありがとう

わたしのことを 気遣ってくれて ありがとう わたしに 声をかけてくれて ありがとう

わたしを 受け入れてくれて ありがとう

わたしを 励ましてくれて ありがとう

わたしを 見守ってくれて ありがとう

あなたの やさししさに 感謝します

心から あなたに 感謝します

やさしさを ありがとう

た出かけようね

また出かけようね

あの山へ あの森へ あの海へ

あの空に会いに あの光を感じに

あなたを癒し わたしを癒し 元気と勇気を与えてくれた あの場所へ また出かけようね

あの如来様に会いに あの観音様に会いに

あの気を感じに あの風にゆられに

また出かけようね

<u>レモンだよ</u>

今年の初夏、毎朝受粉に勤しんだレモンの収穫です。 三十一個も採れたんだよ。

<u>ちょっと気になることが…</u>

骨盤部への転移は小さくなっていなかっただけではなく、影が濃くなっている と医師は言った。

体重を計れという指示が出ていた。

気がついた。

これは腹水の状態を診るためなのかも知れない。

そういえば、最近おなかが張るという。

尿の出も悪い。

おなかに水が貯まってきているのがも知れない。

さぁ、どうする。

何が出来るか

僕は大事な友人を二人もガンで亡くしている。

特に、その中の一人は亡くなる直前まで週に二回、病院に行って治療をしたり 励ましたりしていたので、急変して亡くなったのにはショックを受けたものだった。

彼女は乳ガンが腰椎に転移し、腹水を起こし、それへの抗ガン剤によって腸が 癒着し、腸閉塞によって亡くなったのだ。

腹水がひどくなって、入院して二ヶ月も経っていなかった。

骨から腹膜に広がり、水がお腹の中に貯まっていくのだ。

抗ガン剤は全身の機能を低下させる。

腸も動かなくなる。

だから抗ガン剤の後の便秘は命取りになる可能性を持っている。

だから僕はかみさんの便秘にだけは気を使い、治療してきた。

しかし、腹水には利尿という対処しか方法はない。

勿論、膝の水と一緒で水を抜くことは出来るが、炎症による滲出を止めること はできない。

ガンを小さくするか無くす以外にはどうしようもないのだ。

ビワの種の粉末の飲用の回数を増やし、僕なりの手当てを長くしていくことで 対処しているが、かみさんの生命力に頼ることになる。

半年で五割の人が亡くなるというラインはクリアできそうだが、一年で八割の人が亡くなるという側に入らないようにするのは、かなり気を引き締めて、気を入れなければならないようだ。

和気さん、ファイト□

<u>うまかった!</u>

今夜のメニューは、鮭の切り身の焼いたの、ナメコの味噌汁、エビとエリンギ、椎茸のホイル焼き、豆腐の豆乳煮? (娘に習ったもの) みんな食べたよ。

診察

今日は定期の診察日です。

免疫力を高める対策を相談しなくちゃ。

どうにもならないのかなー

痛みに対する治療として貼るモルヒネの量が増えた。

腫瘍マーカーの数値は少し増えているが、免疫力を高める治療はないという 。(バランスの良い食べ物でしか。)

毎日熱が36度8分9分あるのだけれど、それは熱ではないらしい。(軽い炎症があるから微熱が続いていると思うんだけれど…。)

覆水については触れなかった。

医師としては、今よりかなり悪くならないと、医療としての対処は考えていないようだ。

医者も治療のしようのない病気に苛立っているのかも。

医療制度の関係で治療の縛り(したくても出来ないこと)があるのかも知れないな一。

まぁ、僕のすることはしっかりして、もう少し経過を見ることにしよう。

体が辛そう

今週はずーっと調子が悪い。

日曜日、陶芸を休み、火曜日、学校を休み、水曜日、学校を早引きし、今日は気功塾を休んだ。

痛くて、だるくて、一人でいるのがかなり心細いのだろう。

我慢強いかみさんが休んで欲しいという。

僕は手を当てているだけなんだけどね。

夢の再生医療!

京都大学がノーベル賞に値する物凄い研究に成功したという。

皮膚の細胞から、人体の何にでも変化する万能細胞を作り出すことに成功した のだ。

僕たちの細胞は一つの卵細胞が細胞分裂を繰り返しながら僕たちの体を作り、 それぞれの場所に応じた細胞に変わっていく。

心臓に行った細胞は心臓に、肝臓に行った細胞は肝臓に、脳は脳に、骨は骨に …という具合だ。

だから、細胞には、その場所に合う細胞に変化していく能力を持っている。 それを本物にしたのだ。

しかも、皮膚の細胞から心臓の細胞や神経細胞に変化できる万能細胞を作った のだ。

これは、これからの再生医療に革命を起こす研究だ。

身体障害、神経損傷、心臓疾患、肝硬変など、悪い部分に変えて、正常な細胞を自分の皮膚の細胞から作れるようになれば、かなりの病気や症状が克服できるのではないだろうか。

京大の研究チームは凄い!

診察

先週の火曜日に行ったばかりなのに、モルヒネが七. 五 mg.から十mgに増えたのに、痛みが和らがないので、木曜日に来られた看護師さんが電話をしてくれて、今日の診察になりました。

貼るモルヒネの量が十mg.から十二. 五mg.に増えました。

これ以上痛みが取れないと、入院して点滴でコントロールすることを選択する ことも考えないと…と医者の話。

次の診察は来週だ。

主人公

京都、大徳寺の塔頭の一つに拝観に訪れた時、その床の間に「主人公」と書かれた軸があった。

それを見た時、「人生という舞台の中では、お前が主人公なんだよ。」という 意味だと思った。

しかし、後に、この言葉の意味はそういうことだけではないことを知った。

これは、客観的に存在する外の状況を自分のこととして受け止めなさいという ことらしい。

他人の苦しみや悲しみを見た時、想像力を働かせて、その人の苦しみや悲しみを自分のこととして受け止める、或いは、自分がそういう立場になったら自分はどんな気持ちになるのだろうか、そして、どんな行動をとるのだろうかと考えてみる、そうすることによって、他と自分を一体化させていき、他人事ではなく自分事にしていく、そのことによって自分を見直し、他人のために動ける自分を作っていく、つまり、あらゆる問題や状況を自分のこととして受け止めなさいということらしいのだ。

他人の痛みがわかるというのは、同情ではなく、共感し、一体になることなんだなー。

<u>出ない□</u>

最近、モルヒネを増やした副作用なのか、便が出ていない。 尿の出も良くないようだ。 おなかは張っている。 手を当てていても腸の動きが少ない。 う~ん?

動くこと

高齢者や重病人になってくると、まるで赤ちゃんと同じだ。

おしっこが出たとか、うんこが出た出ない、軟らかかった固かったなど、排泄 一つで一喜一憂する。

普段、僕たちが何気なくしているおしっこやうんこも、大切な命のバロメーターになるのだ。

ベッドで寝ているから足を使わない。

足を使わないから腹筋も使わない。

だから腸も動かなくなる。

薬ではどうしようもない。

動かせるところは、かなり意識的に動かさなくてはならないのだ。

<u>今日の終わりに</u>

今日も綺麗なお日様が沈んでいきました。

雨

外に出ると冬の雨

冷たい雨

心まで冷えてくる

早く治療院に行ってストーブ点けなきゃ

患者さんに

ホッとしてもらわないとね

冬虫夏草

モルヒネを強くしたせいか、かみさんは頭が働かないようで、ぼんやりしていて、すぐに寝てしまう。

胃腸の働きも弱くなり、食欲もめっきり落ちてしまった。

スッポンスープとビワの種の粉末を入れたホットレモンは飲んでいるが、元気 は出てこない。

そういえばと思い出した。

漢方薬の楊先生のレシピには、スッポンと朝鮮人参、生姜、そして冬虫夏草が入っていたのだ。

冬虫夏草は小さい筍の細いようなもので、入れてもさほどわからないようなものだったので、 ここ最近三回ほどスッポンスープに冬虫夏草を入れていなかったのだ。

やはり入れようと思った。

Tちゃんに電話をして頼んでみた。

彼女は超安値の薬局のお得意さんだからだ。

朝鮮人参も安く買ってもらった。

しかし、その店での冬虫夏草は高かった。

彼女はMさんと連絡を取った。

そして、Mさんが行ってくれるというので、最初に冬虫夏草を買った漢方薬屋 さんに買いに行ってもらった。

いま、僕は冷凍していたスッポンスープを解凍し、それに冬虫夏草を入れて煎じ直した。

かみさんに一口飲んでもらった。

「おいしい」

お二人さん、ありがとう。

持つべきものは友達だよね。

時間の制限

人は必ず死ぬ。

そんなことはわかっている。

しかし、家族の中に命の炎が弱くなっている人がいると、それなりに覚悟しなければならない。

それを悲しんでも意味はない。

その人と、どれだけ有意義に一緒に生きる時間を持つかを大事にしなければならない。

かみさんの命があと半年持つのか持たないのか、一年持つのか、五年持つのか、 、それは誰にもわからない。

しかし、命に限りがあることには変わりはない。

だから、彼女の人生がイキイキできるように、とにかく明るく元気にかみさん の傍にいるようにしようと考えている。

診察

今日は日赤です。

尿の出が悪いので、泌尿器科の診察も受けます。

頭がぼんやりするのはモルヒネのせいで二週間ほどで慣れてくるとのことです。

げんきでいてね

げんきでいてね

あなたが いてくれた おかげで わたしは どんなに 励まされてきたことか

あなたが かけてくれた言葉が わたしを どんなに 勇気づけたことか

あなたが くれた ほほえみが わたしの心を どんなに 明るくしてくれたことか わたしは あなたに 何もしてあげられないけれど 心から祈っています

げんきでいてね

げんきでいてね

たのしくね

たのしくね

何をいている時も たのしくね

食事の時も お風呂の時も

炊事の時も 洗濯の時も

仕事の時も 遊びの時も

いつても どこでも たのしくね

辛い時も 悲しい時も どんな時でも たのしくね

たのしくするのは 自分自身なんだよね

十二月六日

今日はいい天気

空が青いと

気持ちも

晴れるよね。

窓開けて

空気の交換しようね。

意識がモウロウと

モルヒネのためか頭がモウロウとしている。

常に眠たそう。

そのために薬の飲み間違いをする。

医者は慣れてくるというが…。

このモウロウとなる副作用は何とかならないかなー。

笑い話

かみさんの頭が混乱している。

何か寝ていることが多いので、朝も夕方もわからないみたいだ。

「今日は何日、何曜日?」

僕が尋ねる。

「う~ん、11月、いや違う、12月8日、日曜日。」

「今日はね、12月7日、金曜日だよ。わかった?」

「うん」

「じゃーねー、あんたの娘と息子の名前は?」

僕は冗談交じりに尋ねた。

「娘は山田丫子、息子は…」

少し考えてから

「山田Dすけ。」

山田は娘の嫁ぎ先の姓なのだ。

「何か変でしょー。しゃー、あんたの名前は?」

「山田K子」

「えー? あんたの名字、山田だった?」

「うん」

そう言えば、この名前、病院に行くたびに、他人が呼ばれている名前で、娘の 名字に自分の名前が付いているのだ。

「そ~か~? じゃ一僕の名前は?」

「とうちゃん。」

「名前は?」

と、ここまできて僕のフルネームが言えて、自分の名前と息子の名前に気がつい たようだ。

娘の生年月日を尋ねると、月日は言えたが、何年生まれかは出てこなかった。 「頭、疲れた?」

「うん。」

薬の影響で、こんな感じ。

笑うしかないよね。

地獄と楽園

いま自分のしていることが苦しみならば、いまは地獄になっていく。 ただのストレスであり、自分にとっては何の価値もない。

しかし、いま自分がしていることを楽しみに変えていけば、いまが楽園になっていく。

喜びであり生き甲斐になり、自分にとって価値ある日々になっていく。

どうすれば楽しくなるのか、どうすれば喜びになるのかは、与えられた仕事を 工夫しながら主体的な仕事へと変えていくことだと思う。

工夫の余地の無いものは何一つないように思えるのだが…。

わたしにナーム

わたしにナーム

ナームっていうのはね 安心して 信頼して 身を任せきること

吊り橋やハシゴのように 怖いけれど 落ちることはない 切れることはないって 言い聞かせて 足を踏み出さなきゃ 向こうには渡れない 上には登れない

ナームアミダブツ ナームミョーホーレンゲーキョー も大切だけれど わたしを わたし自身を わたしが信頼し わたしが身を任せられなくて どんな歩みが できるのだろうか

わたしにナーム

わたしにナームと言える わたしになろう

<u>困ったものだ</u>

金曜日の日に頭の中がモウロウとしていたかみさんも、まぁまぁ何とか普通に戻ってきたかな。

ただすぐに眠たくなるのは変わらない。

モルヒネって、脳の機能も抑えるんだろうね。

困ったものだね。

踏ん張り時

かみさんの調子は余り良くない。

ほとんど食べれない。

元気が出ない。

辛いだろうな一と思う。

どんな病気でも、介護する人や家族がどうのこうのというけれど、患者本人が 一番辛いんだよね。

一番頑張っているのは患者なんだよね。

だから、笑って、ほめて、言うこと聞いて、支えてあげないとね。

どちらにしろ、今が踏ん張り時なんだと感じている。

みなさんに支えられて、僕は元気に頑張ってますからね。

痛み

三日に一度、モルヒネのパッチを貼り換えるのだが、今日の朝がその日だった

薬が切れてくるためか、かなり痛がっている。

貼り換えても、すぐには効いてこないので、その間、二時間ほどの痛みが辛そうだった。

朝ご飯を作ったが、食べられる状況ではない。

痛むところを撫でさすりしているうちに二時間ほど経ってしまった。

今日は仕事には行けないなと思ったので、朝の治療は、こちらからキャンセル させてもらった。

昼からも無理かなー?

とにかく眠る体勢になったので、僕も少し横になろう。

すこしだけ、お休みなさい。

<u>休みました</u>

今日は一人で置いておける状況ではない。

盲学校も二学期の評価の提出期限が来ているので休むわけにはいかないが、明日は娘が来てくれるから、明日は休まずに行くことにして、今日は休んだ。

教頭先生の声を聞くと、申し訳なくて…。

すみません。

ひと安心です

朝はバナナ半分弱、昼はスパゲティー数本とビワの種入りバナナジュースしか 食べていなかったが、夜は炒飯とコンソメ野菜スープを半人前弱ほど食べてく れた。

食べないと元気が出ないので、夕方にみかんジュース(みかんの中身をミキサーにかけてこしたもの)に栄養剤を入れて飲ませた。

モルヒネが効いてきたのか痛みは弱くなったようだ。

頭のモウロウ感も前よりは少ないようだ。 とりあえず安心して下さい。

疲れる夢

金曜の夜の気功教室(七時半~九時)に出かけた。

僕はいつも十分位前に着くようにしている。

生徒さんはまだ来ていなかった。

誰かが来るまで寝ていようと、寝ころんだ。

人の気配がした。

目を開けると五、六人の人が来ていた。

あ、ごめん! 始めようか!

そう言って僕は時計を見た。

何と九時五分前!

えっ! 終わる時間じゃん!

みんな寝かせておいてくれたのだ。

後片付けをする一人が残って、あとの生徒さんは帰って行った。

僕も外に出ようと、玄関に降りていくと、突然の大雨。

傘は持っていない。

少し待っていると小雨になった。

フード付きの水をはじくような上着を着ていたので、頭からフードをかぶって 外に出た。

走って地下鉄の駅に向かった。

携帯が鳴った。

そこで目が覚めた。

疲れる夢だった。

しばらく体が動かせなかった。

体を拭いてもらいました

毎週木曜日は訪問看護の方が来て下さる。

貼るモルヒネにになってから寒いのもあるけれど、調子が悪く、シャワーに行けない。

で、先週から看護師さんに体を拭いてもらっている。

今日も、体を拭いてもらって気持ちよかったらしい。

早く、シャワーに行けるようになるといいな。

夜はビーフシューにしたけれど、人参、肉、椎茸、ジャガイモ各一切れ、二切れ程度でもうおなか一杯らしい。

ご飯は茶碗に四分の一くらい。

余り食べられないけれど、色々作らなくっちゃね。

<u>パッチの貼り換え</u>

火曜日に換えた時ほどではないけれど、痛みが強くなります。

早め早めに換えないと駄目かな一。

効果は三日らしいけれど、かみさんの場合は二日と十八時間くらいかな?

リハビリ

薬のせいだけではなく、本当にボケつつあるのかも知れない。

かみさんは、僕の奥さんというよりマネージャーと言った方がいいぐらいしっかり者でした。

そのことは気功の仲間の多くの人が知っています。

そのかみさんが、今日が何月何日何曜日かがわからなくなっているのだ。

朝、教えて彼女も口にする。

しかし、寝て起きた後は、つまりお昼にはもう言えない。

言っても、とんでもない日を言う。

明日貼り換えるべきパッチを今朝、貼り換えようとしていて、慌てて止めた。

また、百から七を引くと?と尋ねると、少し考えてから九十三と答える。

しかし、九十三から七を引くと?と尋ねると、八十四とか八十五とか色んなこと をいう。

ジャー十三から七を引くとと尋ねると六と答えるのに、 九十三から七を引く とと聞き直すと七十六という。

どちらにしろ頭の回線がつながっていない。

という訳で、今日から、体と頭のリハビリを開始することにした。

眠ることだけが彼女の人生じゃないからね。

<u>寝ている間に</u>

かみさんが起きている間は、かみさんのリハビリや治療や訓練に当てることに します。

寝ている間に、買い物や食事作りや洗い物、洗濯なでをします。

大変だー□

検査の結果は良くなかった。

腫瘍マーカーの値が 百六十に跳ね上がっていた。

ガン細胞が暴れ出したのだ。

ここひと月の調子の悪さから、そうではないかとは思っていた。

次の抗ガン剤は、副作用として肺炎を引き起こし、死に至らしめる確率が高いものだと言う。

飲み薬らしいがやるにしても二週間は入院で、年明けになるという。

抗ガン剤をするかしないかは本人が決めることだが、さて…。

頑張れとは言えない

僕は頑張れと思う。

しかし、かみさんは充分に頑張っている。

痛みと歩けない(何も出来ない)もどかしさに耐え、愚痴一つ言わずに頑張っている。

そんなかみさんに頑張れとは言えない。

一番辛いのはかみさん自身なのだから。

気力が萎えたらどうしようもない。

僕は笑って、食事を作り、食べさせ、後かたづけをし、洗濯物を干し、かみ さんの背中をなでる。

かみさんが少しでも笑うようにバカなことや冗談を言う。

僕に出来ることはそれだけなのかも知れない。

かみさんの気力が萎えないように、頑張れとは言わない。

痛みがひどい

今朝も痛みがひどくて、朝食は食後の薬を飲むために無理矢理一口食べたという感じ。

薬を飲んで直ぐに寝た。

今日は昼から家にいられるよと言うと、安心したような顔をしていた。 僕は十一時に治療を終えて、食料品を仕入れて帰ります。

おなか減った□

今朝はあわただしくて僕も余り食べた気がしなかった。

十一時半前に家に帰って、

あ一おなか減った□

というと、

わたしもおなか減った!

の声。

良かったね一□

買ってきたバナナを二口とクロレラ牛乳九十ccを飲んだ。

「少し起きていられる?」

「うん。」

「じゃー、お灸しようか。」

「うん。」

掌への温灸をしている途中から眠たそう。

お灸を終わって

「背中撫でて、寝る?」

「うん。」

という訳で、また寝てしまいました。

お昼ご飯は何時になるのかなー?

愛別離苦

四苦八苦という言葉がある。

四苦が生老病死だということは知られているが、その四苦に更に他の四苦を加 えて八苦ということは余り知られていない。

その他の四苦の一つに愛別離苦(あいべつりく)というのがある。

愛する者と別れなければならないという苦のことだ。

この苦の中でも、愛する者との死別ほど残酷な苦はない。

決して二度と会うことの出来ない、その可能性が一%もない別れになるからだ。

今まで僕は、この愛別離苦を心の底から味わったことはない。

想像力を働かせても、頭の中では理解しても、実感としてはわからないものだと思う。

僕の両親は既に亡くなっている。

しかし、さほどの悲しさは味わわなかった。

一緒に暮らしてはいなかったし、僕は既に家庭を持っていたし、二人とも目 の前で亡くなったのでもなく、何か他人事のように済んでしまった感じがして いる。

しかし、かみさんは違う。

結婚したのは二十四歳の年だが、大学の一年、つまり十八才の時からの付き合いなのだ。

一緒に暮らした時間は両親との比ではない。

だから、かみさんとの別れは有り得ないことなのだ。

あってはならないことなのだ。

想像できないことなのだ。

そんな日がいつかは来るに違いない。

若い頃、四十才くらいで死ぬと言われていた僕が先に逝くと誰もが思っていたのだが…。

といって、今の状況を諦めている訳ではない。

文章がまとまらなくて…。

寝たままの

痛くて起きられない。

一口食べて薬を飲んで寝てしまった。最近は、寝たままのかみさんに向かって「行ってくるね。」

と声をかけて出掛けることが多くなった。

<u>ただいまー□</u>

仕事を終えて、買い物をして家に帰る。

玄関に入る前に自転車のベルを鳴らす。

チリンチリン(帰ったよー!)

ただいまー!っと声をかけてから玄関を入り、手袋とマスクを外し、鍵を靴箱の上に置いて靴を脱ぐ。

廊下で上着を脱ぎ、ショルダーをハンガー掛けに引っかける。

まず台所に行って、買ったものを置き、洗面台で手と顔を洗い、うがいをする

それからかみさんの寝ている部屋を覗く。

大抵はベッドに座り、こっちを見ている。

「ただいま□」

「お帰り□」

「起きてたん?」

「いま起きたとこ。」

ベルの音か玄関に入る音で起きるらしい。

しかし、今日は、背中を向けて寝たままだった。

体が辛いのか痛いのか…。

今朝と同じで、こんな日が多くなるんだろうな一。

<u>ファイト!</u>

ふさがれていく胸の中を解き放つように、両胸の間の扉を開いて、大きく広 げて、ファイト!

痛いよー

昨夜は十二時半、二時半と目が覚めた。

僕はかみさんのベッドの隣で布団を敷いて寝ている。

見ると、かみさんはベッドに起きていた。

痛くて起きたのだ。

少し腰を撫でる。

「トイレ行く?」

「うん。」

その後寝かせて背中を撫でると眠りに入る。

次に起きたのは五時。(その間にかみさんは起きていたかも…)

「薬は?」

と、かみさん。

「とん服は机の上にあるやろ。」

「ちがうの。」

かみさんが探していたのは朝食後に飲む痛み止めだ。

それを飲まないと治まらないのだ。

薬の袋から出してあげる。

「痛いよー!」

体をよじって出ない声で叫ぶ。

かなり強い薬なので何かを食べてじゃないと飲めない。

バナナを一口食べさせる。

薬を飲んで横になる。

背中を撫でていると眠っていった。

痛みで寝れないなんて、可哀想だな一。

<u>今日も</u>

殆ど寝たままだった。

起きても、それは起きるためではなく、痛いから寝ていられなくて起きるだけ

0

だから、起きても座ったまま寝ています。 お昼も、少し起きている時に、

「食べる?」

と聞くと、

「うん」

というので、用意をしていると、

「エラいから少し寝てから食べる。」

と言って横になってしまった。

本当に調子が悪いんだよね。

寝ている

かみさんは今日も殆ど寝ている。

トイレや食事には起きるが、十分ほども起きてはいられない。

しかも、ただ寝ている訳ではない。

エライ、エライ(辛い、痛い、だるい)と口に出す。

あの我慢強く、愚痴一つ言わないかみさんが口に出す。

かなり辛いのだ。

湯呑みも茶碗も小さく軽い物にしても、重くて持っておれない。

筋力が落ち、自分を支える力さえ(勿論、気力も)無くなってきているのだ。

あーあ

かみさんは寝てばかりなので、起きた時に何かを食べさせないといけない。 朝の仕事を終えて帰ると、ムックリ起き出す。

「何か飲む?」

「うん。」

牛乳をチンして持っていく。

机の上にあったカステラを指して

「食べる?」

「うーん。」

「食べときー。」

「うん。」

あーんとするかみさんの口に少しちぎって運ぶ。

「スッポン飲む?」

「うん。」

最近、スッポンを好んで飲む。

小さなコップに三分の一ほど入れてチンして持っていく。

グーと飲み干した。

昼の薬を飲み、トイレに行って寝てしまう。

昼飯も一人で食べることになってしまった。

抗ガン剤は無理

「今の体力では抗ガン剤の副作用が出すぎて、体力的に無理だと思いますので 。薦められません。」

と主治医に言われた。

診察の待ち時間に時間が掛かり過ぎで、かなり疲れたようだ。

このままだと訪問医を頼んで、時々は栄養点滴をしてもらわなくては…。 いまのままでは弱っていくばかりなのでね。

栄養満点スープ

かみさんは固形物が殆ど食べられなくなっているので、いわゆる料理を作っても、例えば大根の煮物一かけらでおわりになってしまうので栄養が摂れない。 そうだ、出汁を取るように野菜スープを作ろう。

とにかくちょっとしか食べれないのだから、そこに凝縮させたものを食べさせなければ…。

椎茸と昆布で取った出汁をベースに、その中に

- 人参・椎茸・エリンギ・玉葱
 - 大根・ネギ・ほうれん草
 - ・・・レタス・グリンピース
 - ホタテ・牛肉・豚肉

と冷蔵庫にあった物を細かく切って放り込んで煮込みました。

そのスープと煮込んだ野菜を少し入れて、カップ一杯のコンソメ味のフープ を作りました。

みかさんに、

「カレー味?、コンソメ味?、それともクリームシチューみたいがいい?」と尋ねると、

「コンソメかなー。」

と言ったのでね。

勿論少ししか口にはしなかったけれど、大根一切れとか人参一口とか言うよりも、少しは栄養価は高いと思いました。

主婦は苦労するねー□

訪問医

かみさんの栄養と水分の補給のために点滴をしてもらいたいと思っていました

ケアーマネージャーさんの尽力で訪問医が決まったようです。

明日、日赤の主治医からの紹介状を持ってお願いに行きます。

訪問医が見つからなかったら、正月は入院して点滴を受けなければならない と思っていたので、とにかく一安心です。

やっぱりかみさんも、家で居た方が安心だろうしね。

<u>訪問医</u>

訪問医の先生が来て下さった。

僕が朝の講座を終えて家に帰る前に来て下さった。

早い□

点滴で少しでも元気が出ればいいなー□

<u>ドサッ</u>

夕べ、深夜の十二時過ぎのことだった。

僕の寝ている布団の上にドサッと何かが落ちてきた。

何だ?□

僕は目を覚ました。

えっ?

かみさんが転がっている。

「つまづいちゃった。」

勿論、かみさんは一人では起きあがれない。

起こして隣のベッドに連れていく。

それからは少しの物音で目が覚める。

二時、四時半、六時五十分とトイレに行き、四時にとん服、四時五十分に麻薬 の痛み止めを飲む。

今日も寝不足だよー。

それにしても、丸々僕の布団の上に転がってきてくれて良かったよ。

ベッドサイドに置いてある机やボックスなどに頭を打ったりしていたらと考えると、ゾッとしましたよ。

訪問医の制度を

ありがたいことだ。

二十八日、二十九日、三十日と三日間連続で、訪問医の先生が看護婦さんを連れて、栄養点滴を打ちに来て下さった。

これを日赤に打ちに行っていたらと考えるとぞっとする。

診察に行く度に体力を消耗させるのは耐えられなかった。

その時々の症状に合わせて必要な薬も入れて下さる。

しかし、この制度もお金がないと利用できない。

こうううお医者さんと制度がもっともっと普及するといいよね。

安価でね。

お飾りと鏡餅

夕方になってお飾りと鏡餅を買いに行った。

お飾りはいつも行く、年末だけの露店商のおじさんのところで、既に半額になっていた。

門松と玄関の外に飾るものを買った。

さて鏡餅だ。

お餅専門の店に行ったが売り切れていた。

あっちゃー。

仕方なくスーパーにに行く。

ない。

店員さんに尋ねる。

「すみません、売り切れました。」

ガーン。

近くの別のスーパーへ。

そこも売り切れだった。

やむ、得ない。コンピニにならあるだろう。

サークルKに行く。

わるいねー、売り切れちゃったー。

急いで近くのセブンイレブン

^。

こんなのしか残っていないんですよー

店の人が連れて行ってくれた先には、子供のおもちゃのような小さなもの。 これじゃ駄目だ。

一旦家に帰って荷物を置いて、今までの店とは反対側にあるサークルKに。 あった!

レジの前に三つ残っていた。

あ一良かった!

本当の残り物には福がある…かな?

門松を門扉の横に植え、玄関の扉にお飾りを吊した。

鏡餅は、居間のテレビの上に飾った。

ヨッシャー!

<u>ありがとうございました</u>

人は必ず死ぬ。

どんな金持ちも権力者も、学者も芸術家もスポーツマンも…。

だからといって刹那的に、投げやりに生きて良い訳がない。

必ず死ぬとわかっているからこそ、真剣に生きなければならない。

己をごまかすことなく、己に嘘をつくことなく、己の命を最大限に発揮して、 最大限に燃やして生きたといえる生き方をしたいと思う。

年の終わりに、そして年の始めに、改めてそう心に決める。

今年にありがとう。

そして、次の年によろしくお願いします

仲間のみなさん、今年一年、ありがとうございました。

二〇〇八年に乾杯!

新しい年が動き出しました。

明けましておめでとうございます。

今年という年が、あなたにとって幸せに満ちた年になりますよう心より願っております。

僕は

「日々淡々と情熱的に!」

という座右の銘に従って、毎日毎日を丁寧に、丹精込めて暮らしていければと思っています。

今まで生かされてきたお返しとして、僕に出来ることは、これまで通り、気功 の心や技を知っている限りお伝えすることしか出来ませんが、精一杯努めようと 決めています。

個人的には、今日すべきことは今日のうちにしていくことを心がけていこう と思っているのですが、こればかりは、体力的に、時間的に、さぼる心に勝てな いかも知れません。

今年も明るく元気にファイト!

でいきましょう!

ドンだけーロ

今年はどんな年になるのだろうか?

正月だというのにかみさんは寝てばかり。

いま食事の量を五段階で記録している。

ま、感覚の問題で、少し食べれたかなという程度で「二」、食べれなかったな一で「一」。

今日は朝は $\mathbb{L} + \alpha$ 、昼は \mathbb{O} , 五以下、夜は \mathbb{L} , 五という感じ。

おやつにみかん一個食べたかな?

ただ、長く座っておれないので、寝てばっかりだ。

かみさんの世話をすることは何の苦もないが、この生活がいつまで続いてくれるのだろうと考えてしまう。

なるべくかみさんの傍に居てあげたいけれど、仕事が始まると…。

トイレに行くのも辛そうになってきているし…。

この暮らし、どんだけー。

かみさんの命、どんだけー!

病気平癒の祈祷

毎年、正月に二人で初詣に出掛けて行った大須観音に、今日は一人で出掛けて行った。

去年までは僕の名前で「家内安全」の祈祷をお願いしていたのだが、今年は、 かみさんの名前で「病気平癒」の祈祷をお願いした。

みんなが元気で居られるからこそ、正月らしい穏やかな初詣が出来るのだとし みじみ実感した。

<u>笑顔</u>

今年最初の笑顔(サザンカ)が一輪咲きました。

玄関に生けました。

布袋さんの笑顔がさらに嬉しそうになりました。

また点滴だよ

今日は殆ど食べれませんでした。

朝 ご飯スプーン三口、昼 うどん二口、夜 カレースプーン三口程度。 いつもは途中でみかんやバナナを食べるんだけど、今日はグレープフルーツジュースコップ半分とスッポンスープ湯呑み三分の一だけ。

やむを得ず、明日の昼に点滴を頼みました。

本人は食べようと努力しているのだけれど、胃がつかえて入らないのです。 また、座っているのが辛くて食べれないのもあります。

僕は明日の朝の仕事を休むことにしました。

恵子さん(かみさんの名前)、負けないで□

慌ただしかった□

昼前にかみさんを起こし、トイレに連れていく。

ホットミルクを作り、バナナと焼き芋を少し食わせるが殆ど食べない。

痛み止めの薬を飲ませているとケアマネさんが来る。

すぐに訪問医の先生が来て点滴を始める。

布団をかけて飛び出てきた。

今から仕事。

この分だと

鍼灸の仕事を続けていられないかなー。

かみさんは、年末の二十日以来初めての一人きりでの時間だ。

トイレが心配だろうな一。

<u>ちょっと ムカッ</u>

夕方、訪問看護センターの所長さんから電話があった。

「今日、奥様の様子を見させて頂きました。」

点滴の針を抜きに来てくれたのだ。

「お世話になりました。ありがとうございました。」

「お聞きし辛いのですが…、奥様は今後、入院をお考えなのでしょうか、それ とも最期まで在宅で介護されるのでしょうか…。」

確かに言わんとすることはわかる。

しかし、僕と訪問医や訪問看護の方とでは根本的な姿勢が違っている。

あの人たちは、痛みや苦しみが少なく、楽に最期を迎えさせて上げたいという 視点でものを考えている。

いわゆる、緩和医療というものだ。

つまり、最期というものを前提にしているのだ。

それは、日赤の主治医も同じことだ。

しかし、僕は違う。

家族として「治って欲しい」ということを越えて、一医療人として「いかに治

る方向に向かわせるか、治る方向で治療するか」という視点で治療に取り組んでいる。

僕が「楽に最期を迎えさせて上げたい」と思ったら終わりだと思う。

鍼灸、ツボ治療、漢方、民間療法、気功…など、西洋医学とは違うアプローチで治療に取り組んでいる。

だから、最期を考えて治療している訳では決してない。

末期ガン患者への緩和医療を僕は拒否する。

楽に、痛みがないようにという視点と、ガンを乗り越える治療とは矛盾しない と思うのだが、後者を放棄した医療や看護に、少しムカッとした。

生きています!

テレビを見た。

末期ガンの少女の話だった。

インタビューの女性が尋ねた。

「一日、病室で何してるの?」

きっと、病院の中で、する事もなく退屈だろうな一、退屈しのぎに何をしているのだろう? という思いで尋ねたのだろう。

少女の答えがふるっていた。

「生きています!」

それ以外の答えはない。

本当のこと

かみさんの状態はかなり悪く、二間くらい先にあるトイレに、十一月くらいまでは、手すりにつかまって一人で行けていたのに、十二月の中頃からは僕が手を添えて支えて上げないと行かれなくなり、それも辛くなって、昨日から一間弱の短い廊下も車いすにしたんだけれど、その移動にも体力が持たなくて、肩で息をするので、今夜からベッドの横におまるを置きました。

便や尿の状態がわかっていいかも知れません。

ご飯も、お粥か何か汁気のものをかけないと駄目で、しかも、スプーンに二口 三口で、僕が口まで運んで上げないと食べないんです。(甘えてる?)

手を挙げるのが辛いんですよね。

起きた時に寒いから、Tちゃんが買ってくれたフリースを着るんだけれど、それが重たくて着ていられなくなっている。

それほど体力が無くなっています。

今日、かみさんの口にスプーンでご飯を運びながら

「還暦って赤ちゃんに還るっていうけど、寝ながら食べるんだから、まるで乳児だよね。離乳食みたいだし。あんたが赤ちゃんになったら、僕はなれないね。」と、かみさん、出ない声で(力もないから声も出ないんです。)、

「残念だね。」

と、ニヤリ。

深刻な事態の中でも、ユーモアは忘れてませんよ。

点滴、いやだ

今朝、少しの朝ご飯を食べている時、かみさんに 「今日も昼から点滴に来てくれるからね。」

って話したら

「点滴いやだ。」

と言う。

「何で?」

「とうちゃんがいい。」

[?]

そうか、点滴をしてもらっている間、僕が居なくなると思ったんだ。

僕が治療の仕事を入れて、その間に点滴をしてもらう(寝かせられる)と思ったみたいだ。

今日は、昼からもずっと居るよと言ったら安心したようだった。

豪華なお粥

恵子さんが赤ちゃんのような口で、スプーンに二口三口しか食べられず、しか も固いものは駄目で、やむを得ず、お粥やスープを食べている。

その一口二口に栄養を凝縮させなければならない。

で、今日は、まず出汁を作りました。

手羽先、しじみ、小松菜、人参、タマネギ、生椎茸、干し椎茸、出汁昆布、長 ネギ、生姜、ニンニク、花鰹を、少しずつ入れて煮込んで出汁をとりました。

その出汁にクリームコーンを入れて、コーンスープを作り、また、その出汁で お粥を作り、更に、若鶏の血肝にニンニク、生姜少し加えて、酒とみりんと醤油 で煮込み、それを出しました。

それぞれ小さなスプーンで二口ずつ食べました。

僕は刺身にしたので、マグロー切れの四分の一も食べさせましたよ。

出汁は、まだカップ四杯分くらいあるので、明日は何味のスープを作ろうかな

0

みんな極上の味でしたよ。

諦めない

辛い報告を受けた。

今月一杯持つかなー?

勿論、かみさんの話だ。

話したのは主治医だ。

訪問医の先生も二週間くらいで意識が無くなる(眠ったままになる)かなーと言った。

それほどまでにかみさんの状態は悪化し、治療の方法はないとのことだ。 確かに、今も殆ど寝たきりで、食事とトイレに起きるだけ。

でも、五分と持たない。

しんどい(エライ)と言って横になる。

それでも、食べようとする気力は残っている。

その気力に支えられて命をつないでいる。

僕が和気の治療に行くことや気功教室に行くことに対して、今までなら(最近までは)

「いつ帰ってくる?」

と聞いていたのが、今は悲しそうな顔をして何も言わない。

日曜教室も、夜の教室も、盲学校も辞めた。

彼女の傍に居て上げようと思う。

しかし、和気の治療は、患者さんも辛い訳だし、和気先生がいいって言うし、

「一日一人だけにするね。」

って言っても無言だった。

ほかの治療を受けたいとか、死にたくないとかは言わない。

今は僕と娘が居てくれれば、あとの望みはないのだ。

明日は、一日、居て上げられる。

ずーっと背中に手を当てていて上げられる。

彼女は、僕の横で眠りにつきたいのだ。

でも、僕は諦めてはいない。

奇跡なんてことはないかも知れないけれど、少しでも元気になって欲しい と祈りながら、かみさんの背中に手を当てている。

初めての救急車

昨日の昼から尿が出ていないので、救急車で日赤に来ました。

晩ご飯前にトイレをするのだが、全く出ない。

ノートを見ると昨日の朝の十時から出ていない。

これは放っておいて良いものか?

他の病院で看護師長をしている友人に電話をする。

尿が作られていないのか、尿が出せていかないのかわからないけれど、水分とっていて脱水症状でなければ、病院に行って出してもらったほうがいいよ。

すぐに日赤に事情を話して、救急車で行くことにした。

もしかしたら今夜は入院になるかも知れない。

ま、かみさんは寝る格好ではあるし、荷物は要らないか。

保険証と診察券があるかを確かめていたら、救急車の音がした。

玄関に飛び出ていって案内する。

「すみません。救急でもないのに、歩けないものですから…。」

「歩けないのは救急ですよ。」

隊員さんは優しく言ってくれた。

血圧、体温を計り、簡単な問診をし、日赤に連絡をし、救急車は出発した。 尿は作られていた。

出す力がないというか、詰まっているというか、とにかく膀胱より先の問題ら しかった。

僕の一番気にしている覆水でないかを尋ねると、そうではなく、尿が貯まり過ぎておなかが張っていたのだろうという話。

尿を管で出してもらい、薬をもらって、駆けつけてきてくれた山田君の車に乗って帰ってきた。

救急車は病院までは運んでくれても、家までは運んでくれない。

寝たまま運ぼうとすると、民間の救急車(タクシー)を呼ばなければならない

それが来るまで四十分ほど待たねばならないという。

家までは十分とはかからない。

「帰ろ」

ベッドに横になっているかみさんがつぶやいた。

という訳で、僕がお姫様抱っこをして車に乗せ、家のベッドまで運びました。 かみさんは、いつものように、寝ています。

お騒がせ致しました。

今朝はラクそう

ここしばらく、朝のご飯も食べられないほどで寝ていたのに、今朝は起きて、 昨夜、僕が食べたビーフシチューを入れてお粥風にした朝ご飯を、いつもより沢 山食べました。

三口ほど口に入れて上げて、

「もうやめようか?」

と言うと、

「食べる」

と言って、更に二口、三口食べました。

「しんどい」

とも言わずに、朝ドラも座って見てから横になりました。

顔も明るく、辛そうではありません。

タベ、日赤に行ったのが良かったのかな?

かみさんが口を開けてくれたり、テレビを見たりするだけで幸せです。

<u>今日もまた</u>

昨日、日赤に行って尿を取ってもらってからも、薬を飲んでも今日も出ない ので、また行ってきました。

明日、主治医の先生の診察を受けなさいということで、急きょ受診することになりました。

明日は介護タクシーを頼む予定ですが、おんぶも抱っこも痛がるので、寝かせたまま連れて行けなければ、やむを得ず救急車を頼むことになります。

かみさんも体力を消耗するだろうし、余り動かしたくないのだけれど、あちこちの科を受診するのであれば、入院した方がいいだろうし…、僕も悩むところです。

だって、主治医、今度入院したら帰れないと思って下さいて言ったんだからね

二転三転

今朝、介護タクシーから電話。

タンカーで運び出すのに片方を持ってくれる人はいるかという確認。

十一時四十分に行くという連絡

娘から、子供たちが風邪引いたようなので行けないと電話。

自転車で日赤に診察券を出しに行き、二日にわたって救急車で行って、今日 受診を勧められたこと、介護タクシーの都合で十二時前に、ストレッチャー に乗ってくるので受け入れをして欲しいと依頼。

帰宅して、訪問医に今日の点滴は出来なくなった旨を連絡。

ケアマネさんから、十一時までに入らないと主治医でなく研修医が診察するので、その後、主治医の診察は四時半以降になるので、日赤に在中しているケアマネさんに電話して調整してもらったらと電話。

日赤のケアマネさん話し中。

内科の受付に問い合わせる。

診察券は出されているし、お話もお聞きしているので、その時間にお越し頂ければ大丈夫ですとのこと。

と、今度は日赤のケアマネさんから電話。

救急で来られたことや、尿の管を入れるか入れないか、少し黄疸が出ている 話などをしたら、今のかみさんの状態で、無理してこなくても、訪問医の先生 に頼んであるから、そちらに来てもらった方が良いと思うという話。

救急で行くと、必ず、翌日に担当医の受診をして下さいと言うのが決まりだと話してくれた。

訪問医に電話して、診察を依頼。

介護タクシーをキャンセル

日赤に診察券を取りに行く。

かみさん、トイレがしたいと言う。

これはいつも言うのだが座っても出ない。

が、なんと今日は大小とも出る。(万歳って感じ。出れば管なんて付けなく てもいいからね。) そこへ、ケアマネさんと訪問医が来る。

尿は出たという話をして、今日は採血と栄養点滴のみ。

続いて、訪問看護の方が来る。

二十四時間対応の看護に切り替える。

来られなくなった娘の今週分の時間に訪問を依頼。

Tちゃんが冷食とバナナ、コーヒーパック、草餅、串カツを持って顔を出す

コーヒーと蟹をご馳走する。

かみさんの点滴が三時に終わる。

二転三転どころじゃない忙しさでした。

救急車で病院に行く、尿が出ないということだけて、沢山の人たちが、かみ さんの負担にならないような対策を考え動いて下さるんだと感謝である。

かみさんは、いつものように家で寝ています。

さぁ、夕食の準備です。

今朝も元気なし

今朝は少し元気がありませんでした。

卵粥に明太子をつけて三口ほど。

出汁を取った昆布と椎茸を煮たものを一口ずつ。

十時くらいに看護師さんが覗いてくれます。

早く帰って治療してあげなきゃね。

またまた特製スープ

タベ、冷蔵庫に残っていた手羽先とホタテ、小松菜とほうれん草を煮込んでスープを作った。

かみさんの元気が出ないのて、それにスッポンスープ、椎茸と昆布の出汁を混ぜて、コンソメ味でスープを作りました。

少しでも元気になりますように□

<u>笑いの部屋と涙の部屋</u>

かみさんの寝ている部屋は南向きでお日様が入る。

エアコンも点いているしホットカーペットもある。

かみさんは電気毛布を敷き、電気のホットパックを足下に置いてある。

毛布もピンクでポカポカと暖かい。

二間ほどの廊下を隔てた台所は北側で暖房はない。

灯油の温風ヒーターはあるのだけれど、かみさんの部屋に向かって廊下の中ほどに置いてあるので温風は来ない。

芯から冷えてくる。

かみさんの部屋では大きな声で話し、笑い、元気な気で満たされる。

しかし、台所では何となく胸が詰まってくる。

学生の頃、かみさんと一緒に出かけたデモや集会で歌った平和の歌や闘いの歌

を大きな声で歌いながら料理を作り、洗濯物を干す。

そんな歌を歌うのは、自分を励ますためでなく、かみさんの元気を奮い立たせるためだ。

でも、胸が詰まってくる。

かみさんの部屋は温かい笑いの部屋、一人の台所の部屋は冷たい涙の部屋なのだ。

ファイトロ

今日から入院

昨日の夜、トイレに起きる時、介助しても痛みがひどくて、とても可哀想だった。

かみさんも

「もう入院してもいいよ。」

と言った。

最期まで家で介護したかったのだが、痛みには勝てなかった。

でも、まだ病気に負けた訳ではない。

入院先は緩和病棟、いわゆるホスピスだ。

ガンの治療も延命措置もとらない。

痛みがコントロール出来なくなると、眠らせて静かに永眠を待つことも行なう

さぁ、新たな段階での闘いが始まる。

今日は最初の夜だから、僕はかみさんの横で泊まります。

何だろう、この精神的な強さは。

楽天的にもほどがあるかな?

<u>ぐっすり寝たよ</u>

タベ、僕は七時過ぎから横になり、九時過ぎにプリンを少し食べさせ、薬を飲ませ、また寝て、十一時過ぎに看護師さんが痛み止めのパッチをはがしにに来て、そのまま探偵ナイトスクープを見てから今朝の七時までぐっすり寝ました。

いつも明け方に飲む痛み止めも飲まずにいたようで、起こされずにすみました

さぁ、今日もファイトです。

おしゃべり

朝からず一っと寝ていたかみさんが、僕が買い物に出た後、三時半頃に起きたようだ。

病室に戻ると息子と娘夫婦が来ていた。

夢の続きか妄想か、言葉ははっきりしているのだが意味不明の話をする。

しばらくしてみんなが帰り、二人きりになる。

いつもなら左を下にして横になってねているかみさんの後ろに回って、背中に 手を当てたり撫でたりするのだが、何か話をし続けるので、前に回り、手を握っ て相手をする。

まともじゃないんだけれど、時々笑みを浮かべて、悲しい言葉をつぶやきつづけた。

「もう終わりです。

すみませんでした。

ごめんなさい。

こんなことになるとは…。

ありがとう。」

僕は、なんだか穏やかな気持ちでかみさんの時々開く目を見つめながら、

「大丈夫だよ。

傍にいるからね。 恵子はなにも謝ることはな いよ。 心していいよ。」 かみさんは時々薄目を開けながら

かみさんは時々薄目を開けながら寝ていった。 僕も少し休もう。

心の言葉

看護師さんが点滴を見に来て、また起きました。

少し話をしていたら、今度は

「みなさん、ありがとうございました。本当にありがとうございました。」 を続けながら、涙を流しました。

一瞬だけ声を詰まらせて、声を出して泣きました。

「とうちゃん、一緒に謝ってね。」

「いいよ。僕が謝っておくから。」

「手を離さないと危ないよ。」

「僕なら大丈夫だよ。」

手は握ったまま。

心の言葉を話している。

ほんとうにこの人は善い人なんだ。

静かな時が流れています。

<u>まだ</u>

うわごとのように、

「ありがとうございました。

わたしたちはまだ半分しか気づいていません。

気づくのが遅すぎました。

勉強させて頂きました。

みなさん、ありがとうございました。」

を連発しています。

延々と

九時半になろうとしているのに、まだしゃべってる。

今度は、訳の分からないことばかり。

「消火器が倒れてくるから危ないですよ。」

「いま工事中なので通れませんよ。」

電球がぶら下がっていますが心配しないで下さいね。」

などなど。

僕が無視してコップなどを洗っていると、

「いま、大事な話をしているので静かにして、動かないで下さい。」 って叱られました。

こんな感じです。

保育所で災害が起こり、子供たちを気遣っているのかも知れません。 でも、結構楽しいですよ。

少し熱が

朝は三十七、七度あったので、おでこを冷やしていました。

日中は息も穏やかなので、熱も気にはならなかったのですが、夕方計ると三十八. 一度になっていました。

いま少しアイスノンで冷やしています。

呼吸は穏やかなので心配はないと思います。

顔

部屋の中にモーツアルトが流れ、かみさんの手を握って彼女の顔を見ている。 彼女は時々薄目を開け、ニコッとほほえむ。

「大丈夫?」

「うん。」

「傍にいるから安心して寝ていいよ。」

彼女はまた目を閉じる。

僕は、こんな風にじっくりと彼女の顔を見つめ続けたことがあっただろうか。 まだ寝返りをうてない赤ちゃんを親が見続けているように。

そんな風に子供たちの顔は見ていた記憶はある。

子供たちが動くようになってからは、かみさんと一緒に彼らの姿を追い続けていた。

そして、僕の目は仕事の関係もあって家族を離れ、外の人たちに向くようになった。

かみさんは辛抱してそれを許してくれた。

だから、月に一度の気功の仲間とのウォーキングも陶芸も、一緒に出来るようになったことを彼女は喜んでいた。

僕は彼女が居てくれることに安心をおぼえた。

特に僕は視力障害者なので、彼女の赤いリュックやわ赤いコートが目印だった

勿論、彼女は僕が探しやすいように赤いものを身に付けていてくれたのだ。 でも、僕が彼女を探し、目で追うのは目印としての彼女だったのだ。 目は外に向いていたのだ。

だから、彼女の人生の最期の何ヶ月かを彼女の傍で過ごし、こうやって顔を見つめていることは、僕にとっても、とってもとっても幸せなことなのだ。

僕こそありがとう。

すみませんでした。

ごめんね。

穏やかな時よ、流れずにいて下さい。

そう感じている僕でした。

熱

昨晩は疲れた。

朝に三十八. 五度あった熱が夕方には三十七. 二度まで下がっていたのに

六時に…三十七. 七度

八時に…三十七. 八度

九時半に…三十八.0度

と、少しずつ上がっていく。

勿論、頭を冷やしているのにである。

熱を下げるために、病院などでは脇の下や足の付け根など太い血管のあると ころにアイスノンを当てる場合があるが、恵子さんは、そういうのをいやがる

寒くなるからだ。

悪寒をさせてまで無理に熱を下げてはいけない。

だから、氷を頂いて、せっせと頭を冷やす。

その間、薬の影響で、恵子さんは目を開き、幻覚を見、話をする。

「先生!(僕のこと)、わたしの足下で、お嬢さんがパンに埋まっているの。 いますぐ助けてあげて□早く□」

てな調子で、そんな訳の分からない話を延々と続ける。

僕はかみさんの肩を叩きながら子守歌や童謡を歌う。

十一時になって、三十七.八度になって、少しずつ眠りについてくれた。

僕もベッドサイドのソファーの背もたれを倒し、横になった。

今朝の六時半まで何も知らずに寝た。

恵子さんの体温は三十七.二度になっていた。

さぁ、今日の一日を大切にして、ファイト□

残念でした□

ガンになって命の炎を消されるのは辛い。

股関節が動かせなくなり、歩けなくなり、座れなくなり、寝たままになるのも 辛い。

しかし、恵子さんは幸せだと言う。

旦那と子供たちを感じ、手厚く介護され、暖かい部屋とモーツアルト、穏やかな時の流れに彼女の心は静かだ。

まだ二人とも元気な頃に

「先にボケたり寝込んだ方が勝ちだよね。」

なんて話していた。

彼女が倒れ、まだ少し起きあがれて、僕が家で看病していた時、

「あんたは、もう僕の世話は出来ないね。」

て言うと、彼女、ニコッと笑って

「残念でした。 (わたしばっかりがしてもらって嬉しいわ、あなたは残念で した。)」

だって。

僕は、これまで彼女がしてくれた分は出来ないけれど、精一杯のお返しをしようと思っている。

ホント、いい旦那。 (えっ? 罪滅ぼしなんて言ってるのは誰?)

ついに

訪問看護の方が言った。

「一月単位で悪くなっていた病気が一週間単位で悪くなり、これからは一日単位で悪くなっていきますからね。」

今日、少し自宅に帰り、昼前に病室に戻る。

「ただいま。」

「お帰り。」

ここまではいい。

「僕が誰かわかる?」

答えがない。

「あなたのお名前は?」

これにも返事しない。

「あなたは恵子ちゃん。僕は恵子ちゃんの旦那。とうちゃん。」

「恵子のとうちゃん?」

「そう、恵子のとうちゃん。」

そこではじめてニコッと笑う。

確実に、自分が誰か、目の前にいるのが誰か、わからなくなってきている。 悲しい現実だ。

「僕はずーっと恵子の傍にいるから安心してね。」 そう語りかける僕の目は、涙は出ないが、目の奥は泣いていた。

もう帰ろ□

Tちゃんが持ってきてくれたハンバーガーを病棟の食堂で一緒に食べ、玄関まで送って行ってから病室に戻った。

「もう連れて帰って下さい□」

と、叫んでいた。

彼女の手を握り、

「帰る時は僕も一緒だからね。」

「ここにいると大変なことになるから、早く帰ろ。タクシー呼んで、早く 帰ろ!」

「そうだね、帰りたいね。」

「私は体が動かせないの。」

「大丈夫だよ。恵子ちゃんは僕が連れていってあげるから。」

いつになく恐い形相で僕の手を握り、引き寄せるようにして「帰りたい。」 と訴える彼女の叫びは、余りにも真に迫っていて、辛かった。

とろみ

お茶やポカリにとろみを付けるものを娘が買ってきた。 さらっとしたものを飲み込むと誤嚥を起こしてむせてしまう。 それを防止するものだ。 ポカリに入れてスプーンで口に入れる。

「どう?」

「おいしい。」

とニコッ。

今度は食事の前に、お茶に入れてアーン。

「お茶だよ。どう?」

「変な味。」

そう言って眉をしかめた。

なんでもあるんだねー。

ちなみに、いま、食事はお粥にスッポンスープを入れて、スプーンに軽く三杯 程度。

柔らかなお魚や豆腐、南瓜、芋などがあれば食べさせるが、繊維のあるものは 食べれない。

そういうおかずも、せいぜい小さくしてスプーンの先で一口。

だから、断食している行者のようにガリガリになってしまった。

残った病院食が僕の食事になるって訳。

何か穏やかですよね

夜の最後の薬を持って来た看護師さんが言った。

「夫婦喧嘩なんてするんですか?」

僕はかみさんの顔を見て言った。

「しないよね。仲良しだもんね。」

かみさんがニヤッと笑った。

「そうですよね。何か穏やかですよね。」

この部屋に流れる気を感じたのか、それとも二人の間の雰囲気を感じたのか…

そんなの当たり前でしょ。

ここはホスピスなんだから。

看護師さんが帰られた後、

「恵子ちゃんの前にいる人、だーれ?」

彼女、少しケゲンそうな顔をした後、

「知らないおっちゃん。(これ、冗談じゃなく本気なんだよ。)」

「知らない人に面倒看てもらってるの?」

「それもそうだねー。」

「僕はあんたの旦那さん。とうちゃん。」

またケゲンそうな顔をして目を閉じてしまった。

ま、確かに穏やかだ。

彼女の笑顔

死を目前にして、彼女は本当に嬉しそうな顔をする。

ある意味、この笑顔に救われているのかも知れません。

心配して下さっているみなさんに、かみさんの笑顔をお届けします。

「ありがとう。」

「しあわせ。」

朝なんか来なくても

さぁ、寝よう。

明日のために。

そう思って、ソファーベッドに横になった。

えっ?

明日はあるのか?

今朝、どんなに起こしても何の反応もなく眠り込んでしまっている彼女を 見て、このまま眠りについてしまうんじゃないかと心を痛めた。

覚悟は出来ていても、いざとなれば動揺する自分を知った。

彼女に必ず明日が来るなんてことはないんだ。

この夜で終わることさえあり得るのだ。

「さぁ、明日」

なんていって寝てていいのか?

起き出して彼女を覗きにいった。

薄灯りの中で彼女は目を開けていた。

「起きてたの?」

「うん。お話しよう。」

「そうだね。」

そう言って、僕は、僕と彼女が最初に出会った頃の話を始めた。

「…、そして僕は恵子が好きになりました。恵子も僕を好きになりました。そ

して僕は恵子にラブレターを書きました。恵子は少し心配だったけれど、私も 好きでしたって返事を書きました。そして二人は恋人になりました。…」

肩をゆっくり叩きながら、トツトツと話しました。

彼女は目を閉じ、寝息をたてていました。

朝なんて来なくていいから、このままの静かな空間に浸っていたかった。 彼女と知り合って四十二年になる。

その間、僕を慕い、僕を支え続けてくれた彼女の命の時間に限りがあるというのに、いつものように寝ていていいのだろうか?

穏やかな朝

「おはよー□Ⅰ

寝ているところを起こされて、少し迷惑そうな顔。

「朝だよ。もうすぐ朝ご飯だよ。」

迷惑そうに目を閉じる。

「ご飯の前に、少しリハビリしようね。」

かみさんの手首、肘、足首を十回ずつ動かす。

それから、スッポンスープを温め、冷蔵庫にあったみかんジュースにビワの 種の粉末を溶かし、それぞれにとろみをつける。

お粥を三口、スープとジュースを二口ずつ、彼女が開けた口の中にスプーンで流し込む。

すぐにおなかが鳴り出すから面白い。

氷とアイスノンをもらって頭を冷やす。(起きた時は三十七. 五度)

かみさんはもう寝息を立てている。

しゃべらないところをみると、まだ頭は起きていないのだろう。

今日の穏やかな(そうありたい)一日が始まった。

<u>教えてくれるもの</u>

釈尊の教えは、すべての物事を自分への教えとして受け止めなさいということだ。

団塊の世代の人たちが定年を迎える中、僕は走り続けていた。

気功の先生として、鍼灸の先生として、盲学校の先生として走り続けていた。

僕は進行性の血管腫の病気のために四十才位で死ぬと言われていた。

それがどうだ。

還暦を迎えても、まだまだ走り続けている。

かみさんは、それを止めさせたかったのかも知れない。

月刊誌の発行をやめ、京都セミナーをやめ、秋の大イベント「心をつなぐ気功

のつどい」をやめ、月に一度のウォーキングの会をやめ、陶芸をやめ、ウイング(気功グループ)をやめ、月に二回の気功塾をやめ、毎金夜の気功教室をやめ、盲学校の非常勤をやめ(休職)、鍼灸治療の予約をやめ、体は随分ラクになった。

文化教室三つと盲学校と少しの鍼灸治療、そして、障害者年金で食べていけるでしょ。

あとは、陶芸したり、気楽に京都や奈良に旅行したり、もっと自分の体をいたわって、ゆっくり生きたらどう?

勝手な解釈だけれど、かみさんがこうにでもならなきゃ、僕は走りをやめなかったと思う。

そんな風にも思える。

ただ、出きるなら、ゆっくりかみさんと旅をしたかったという思いが胸に突き刺さる。

ごめんね。

明るい部屋

病室は南向きの明るい部屋です。

僕は窓際のソファーを倒して寝ています。

<u>着換え</u>

体を動かすとかなり痛がるので、先に痛み止めを入れてからシーツ交換と着換えをしてもらいました。

体もきれいにしてもらって気持ちよさそう。

その間、僕は近くのコンビニに行って、幾つかの振り込みをし、ヨーグルトと 野菜ジュースを買ってきました。

「ただいま!」

「おかえり。」

そしてこの笑顔です。

「ジュース飲む?」

まぶたを閉じて「うん」の合図。(今日は声を余り出さずにアイコンタクトが 多いんです。)

とろみをつけた紫の野菜ジュースを二口ほど飲みました。

ありがとう

一九九四年の終わりから気功の仲間として、かみさんと行動を共にしてきた友 人のMさんが病室に来て下さいました。

彼女は、来るなり、かみさんに声をかけた後、歌を歌い出しました。

そう言えば、一緒にしていた月に二回の「癒しの学校」では、月刊通信の 裏に、Mさんが手書きで書いてくれていた童謡などを、毎回みんなで歌っていた のを思い出しました。

月に一回、癒しの場に出かけるウォーキングも、百回以上一緒に出かけました 。

新年会のあとのカラオケなどでも、二人は仲良く「大阪ラブソディー」をテーマソングのように歌っていました。

お互いを信頼し合っている友人の中には僕も入っていけず、僕は外にコーヒー を買いに行きました。

傍にいた娘の話によると、かみさんは、その人と一緒に口を動かし、歌っていたとのこと。

かみさんは、何度も「ありがとう」を繰り返していました。

こんなに元気なかみさんを見たのは久しぶりでした。

ありがとうございました。

余りよくありません

かみさんの状態は余りよくありません。

呼吸が荒くなり、血圧が低下しています。

飲食も殆ど出来なくなりました。

濡らす程度に少し流し込むくらいです。

言葉は発しているのですが、小さくかすれ、何を言っているのかは聞き取れません。

こちらの言うことには、時々、うなずいたり瞬きしたりして応えます。 命の炎が消えていくのがわかって、本人も辛いようです。 悲しいね。

<u>ありがとうございました</u>

僕のあ愛する恵子さんが、今日の七時三十分に息を引き取りました。 僕とかみさんを励まし続けて下さった仲間のみなさんに感謝致します。

ありがとうございました。

かみさんの死

気功の学校を終えて病室に戻った。

四時過ぎだった。

娘夫婦が来ていた。

彼らが帰り、二人きりになった。

呼吸は荒かった。

ただ、手足が異常に冷たかった。

足に靴下をはかせた。

おなかに手を当てたり、手をマッサージしていた。

声をかけ、歌を歌った。

学生の頃、一緒に歌った歌だ。

かみさんの呼吸が静かになった。

肩を叩いた。

大きく息を吐いた。

そして呼吸は止まった。

痛みに苦しむこともなく、僕の手を握ったまま彼女は息を引き取った。

静かな人生の終わりだった。

二人だけの時間だった。

かみさんは、もっとも幸せな、彼女の望んだ最期を迎えることが出来たように 感じている。

こんな幸せな死を迎えられる人はそうはいないだろう。

穏やかな死に感謝している。

かあちゃん、ありがとう。

長い間、ありがとう。

ほんとうにありがとう。

僕たちの愛した歌

【どこまでも幸せ求めて】

_

タベ二人で歩いたことが 私の心を開いてくれた 若者の明日を切り開くために どこまでもあの人と 一緒に歩きたい

=

瞳がささやくおふくろのように いつでもおいらに話し掛けてくる やさしい君の平和の歌で どこまでも幸せを 求めて歩きたい

Ξ

夜明けに向かって二人で歩こう あなたと私の子供のために 喜び広げる仲間の中で みんなと一緒に

かけ出して行こう

もっともつと手を握っておくんだった。

もっともっと腕を組んで歩くんだった。

もっともっと見つめあっておくんだった。

もつともっと話をしておくんだった。

もっともっと心を通わせておくんだった。

胸が締め付けられる

恋をしている時の胸の痛みとは全く違う

恋の痛みなら

夜を越えて逢いに行けばいい

布団をかぶって寝てしまえばいい 明日になれば逢えるのだから

でも これは違う

何をしても 明日になっても

逢えることは絶対にない

この虚しさは何だろう

60年の人生の中での初めての胸の痛みを経験している

いい告別式だった

僕は、かみさんが喜んでくれる告別式がしたかった。

お坊さんのお経があり、順に焼香して喪主の挨拶というのが普通の通夜や葬 式で、出棺の時に初めて故人との対面が出来る。

せいぜい通夜の前や後に、窓から顔を見ることが出来る程度だ。

これでは、かみさんを愛してくれた沢山の人たちとの心からの別れが出来ない

告別式の主人公は、かみさんであり参列して下さった人たちなのだ。

だから、お坊さんのお経はやめた。

かみさんの病気のことは殆どの人達に伏せていたので、かみさんの遺言通り、 最初に僕がそのことを謝り、経過を報告した。

そして、焼香台などを取り払い、棺の蓋を開け、かみさんの関係していた職場やグループごとに前に出てもらって、直接、かみさんに対面して語りかけて頂いた。

「濱崎先生!…」

「濱ちゃん!…」

「恵子さん!…」

百五十人近い人達が、それぞれに自分の言葉でかみさんに声をかけ、あとは涙 の連続だった。

そういう対面が終わってから、棺の蓋を閉じ、焼香台を出して、僕を筆頭にみんなが順に焼香をした。

式の後、残った人で般若心経を唱えたが、ほぼ全員の人が残ってくれ、般若心 経の大合唱になった。

告別式は、お焼香ではなく、献花にした。

これも、棺の蓋を開け、一人一人が、かみさんに声をかけながら献花して頂いた。

棺の蓋を閉め、保母の仲間、気功の仲間二人、妹、息子の五人に別れの言葉を述べて頂いた。

出棺の前には、棺の中に、沢山の花と一緒に、仲間との思い出の沢山の写真と、参列者の一人一人が思いを込めて書いて下さった折り鶴の短冊などを入れた。

参列して下さった人たちが、心からかみさんの死を悼み、別れが出来た告別式になったかどうかはわからないが、普通にはない、本当に心のこもったいい告別式だったと感じている。

かみさんも喜んでくれただろうと思っている。